公開　令和 6 年 4 月 1 日

教員研究業績

芦屋大学

臨床教育学部				経営教育学部	
教育学科		児童教育学科		経営教育学科	
窪田　幸子	学長 教授	石田　愛子	教授	西光　晴彦	副学長 教授
青木　敦英	学部長 教授	渡　康彦	教授	藤本　光司	学部長 教授
大石　　徹	教授	安藝　雅美	准教授	池田　　聡	教授 学科主任
阪本　美江	教授 学科主任	大谷　彰子	准教授	齋藤　　治	教授
杉島　威一郎	教授	福山　恵美子	准教授	瀧　厳	教授
竹安　知枝	教授	毛利　康人	准教授 学科主任	中村　宏敏	教授
三浦　正樹	教授			森下　博行	教授
石川　峻	准教授			盛谷　　亨	教授
伊藤　武徳	准教授			井上　　徹	准教授
金　　相煥	准教授			林　　泰子	准教授
西光　哲治	准教授			井村　薫子	講師
武田　光平	助教			高倉　弘士	講師
				成瀬　優享	講師
				野口　　聡	講師
浜本　幸子	教授	林　知代	教授	安東　茂樹	教授
吉田　隆夫	教授	小嶋　祐伺朗	教授	福田　芳行	教授
吉村　節子	教授	上月　敏子	教授	山片　崇嗣	准教授
阪本　朋子	教授	武並　朋美	准教授	池田　和三	准教授
松本　達也	教授	丹下　秀夫	准教授		
三羽　光彦	教授	中村　整七	准教授		
石川　宋孝	教授	槙場　政晴	講師		

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　窪田 幸子

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1.“Entangled Territorialities: Negotiating Indigenous Lands in Australia and Canada”	共	2017	University of Toronto Press pp.163-185	‘Transmission of Knowledge, Clans, and Lands among the Yolng (Northern Territory, Australia)’ Dussart,F., Poiriere,S.,… Kubota,S. 計 12 名
2.“An Anthropology of Things”	共	2018	Kyoto University Press pp.315-320	‘Globalization of Aboriginal Paintings, Localization of “Art”’ Tokoro, I., Kawai,K.…Kubota,S. 計 21 名
3.『トラウマ研究Ⅱ－トラウマを共有する』	共	2019 年 3 月 30 日	京都大学学術出版会 pp.195-218	「ナショナルな歴史経験とトラウマ　－先住民への謝罪と和解」 田中雅一、松嶋健、窪田幸子　計 20 名
4.“Fashionable Traditions - Asian Handmade Textiles in Mortion”	共	2020	Lexington Books, London, UK. pp. 177-191	“Crafts” to “Arts”?- A Trajectory of Aboriginal Women’s Weavings in Arnhem Land, Australia. Nakatani,A.,Willemijin,de.J.,…Kubota,S. 計 14 名
5.『オーストラリア多文化社会論―移民・難民・先住民族との共生をめざして』	共	2020 年 2 月 15 日	法律文化社 pp.79-93	「政治的ダイナミズムと遠隔地のアボリジニ」 関根政美、塩原良和、窪田幸子 計 16 名
6.『部族紛争後状況の多元的研究』	共	2020 年 3 月 20 日	晃洋書房 pp.77－104	「和解という道筋の可能性を考える」 月村太郎、本名 純、窪田幸子　計 7 名
7.“Arts in the Margins of World Encounters ”	共	2021.5	Vernon Press pp.43-55	‘Aboriginal art, transits and transitions; exhibitions in Japan and the US’ Willemijn, de.J .,Aoki,E.,…Kubota,S. 計 10 名
【学術論文】 1.‘Conflict and Peacebuilding rituals in North Australia – Traditional and contemporary contexts’	単	2017	“Conflicts and Peacebuilding: Toward the Sustainable Society ”Doshisha University GRM Program. pp.83-88	

2.「1988 年をふりかえる：入植 200 周年以降の先住民・非先住民関係」	単	2019 年 3 月 30 日	『オーストラリア研究』第 32 号、pp.114-117, オーストラリア学会。	
3.「先住民族との和解にむけて―謝罪、補償とトラウマの修復―」	単	2021 年 3 月 1 日	『アイヌ・先住民研究』第 1 号 pp.67-82、北海道大学アイヌ・先住民研究センター	
【その他（講演や発表）】 1.’Crafts’ to ’Arts’? －Weavings of Aboriginal Women and its change’	単	2017.5.4.	IUAES/CASCA University of Ottawa, Canada	Panel: fashionable tradition: innovation and continuity in the production and consumption of handmade textiles and crafts （chair: Nakatani & Kubota ）アメリカ・カナダ合同人類学会発表
2.「少数者を表象から考えるということ」	単	2017 年 5 月 27-28 日	日本文化人類学会 第 51 回研究大会 神戸大学	分科会 D① 少数者表象のポリティックス－展示、衣装、観光、芸術の文脈にあらわれる「もの」を中心に 代表者 窪田幸子
3.‘Representations and Acceptance of Australian Aboriginal Arts in Japan’	単	2017.10.15.	EAAA(East Asian Anthropological Association) , Hong Kong Conference 2017 , Hong Kong Chinese University	東アジア人類学会発表
4.「国家的暴力と和解オーストラリアとカナダの事例から」	単	2017 年 11 月 12 日	紛争科研集会 於同志社大学	科学研究費補助金研究会研究発表
5.’Aboriginal arts and changes of their acceptance in different ‘states’’	単	2017.12.14.	AAS/ASA/ASAANZ 2017 Adelaide University	オーストラリア・ニュージーランド人類学会連合大会発表
6.「‘クラフト’から‘アート’へ? －アボリジニ女性の編組品とその変化」	単	2018 年 1 月 28 日	布科研研究集会 於岡山大学	科研費研究会発表
7.‘Different relationships-Indigenous people and the museum in Japan and Australia	単	2018.6.2.	Art, Materiality and Representation BRITISH MUSEUM/SOAS	大英博物館・ロンドン大学合同学会 研究発表
8.「1988 年をふりかえる：入植 200 周年以降の先住民・非先住民関係」	単	2018 年 6 月 9 日～10 日	2018 年度全国研究大会 筑波大学筑波キャンパス	招聘・コメント
9.「人類学と博物館－アボリジニの遺物返還をめぐって」	単	2018 年 7 月 4 日	南山学会人文・自然科学系列研究例会 南山大学	招聘・研究発表

10.‘Japanese Anthropology and its Change’	単	2018.7.17.	PL II – Education in Anthropology in different national contexts IUAES 2018 Florianopolis, Brazil	国際学会・研究発表
11.“Aboriginal Alternative Tourism in Arnhem Land –Tourism as Cultural Learning”	単	2018.7.24.	‘The role of ″new tourism″ in post –/sustaining hunting and gathering societies’ CHAGS Malaysia, Penang	国際学会・研究発表
12.「海外における遺骨返還ーオーストラリアの事例」	単	2018年9月29日	日本学術会議・歴史的遺物の返還の分科会 甲南大学東京オフィス	研究発表
13.‘Repatriation in Australia’	単	2018年10月3日	返還科研研究会 神戸大学	研究発表
14.「海外における先住民遺骨返還ーオーストラリアの事例ー」	単	2018年10月20日	第72回日本人類学会大会 国立遺伝学研究所	招聘
15.「’クラフト’から’アート’へ? ーアボリジニ女性の編組品とその変化ー」	単	2018年12月8日	民博共同研究会「伝統染織品の生産と消費ー文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変化をめぐって」（代表 中谷文美） 国立民族学博物館	研究発表
16.「赦しと和解の可能性」	単	2019年2月28日	紛争科研研究会 同志社大学	研究発表
17.「和解という道筋の可能性」	単	2019年5月18～19日	紛争科学研究費研究会 金沢兼六荘	研究発表
18.‘Repatriation of Ainu human remains’	単	2019年8月22日	Kwansei Gakuin Workshop, seminar room 1401, Osaka-Umeda Campus of Kwansei Gakuin University	研究発表
19.‘Ainu, the Japanese Indigenous peoples- its history and changes’	単	2019.9.18.	Anthropology Seminor, Waikato University, Hamilton, New Zealand	招聘
20.「先住民研究とオーストラリア グローバルな視座と地域」	単	2019年10月4日	学術会議地域研究委員会地域基盤分科会公開シンポジウム「危機を超えて 地域研究からの価値の創造」日本学術会議 講堂	招聘・シンポジウム講演

21.‘Changes in the repatriation -Australia and Japan comparatively’	単	2019.11.21.	American Anthropological Association conference /CASCA, Vancouver Convention Centre	アメリカ人類学会発表
22.‘Changes in the repatriation - Issues concerning Ainu people, Japan, and involvement of academics’,	単	2020.3.3.	ICAS: MP Workshop ‘New Roles of professional historians in politics and new forms of public use of history’, Center for the Study of Developing Societies(CSDS) 3-4 March, Delhi, India	国際ワークショップ発表・招聘
23.‘Dealing with Negative Legacies in Japan - Why we do not apologize ?’	単	2020.9.28.	Keynote, Annual Conference of The Taiwan Society for Anthropology and Ethnology (TSAE)、National Chi Nan University	台湾人類学会キーノート講演・招聘
24.「先住民族との和解、謝罪とヒーリング－オーストラリアとカナダの比較から」	単	2021 年 2 月 16 日	北海道大学アイヌ・先住民研究センター講演会	講演・招待
25.「コロナ禍におけるフィールドワーク研究の困難と課題」	単	2021 年 2 月 19 日	「2020 年度全国公正研究推進会議」COVID-19 を経験した世界のニューノーマルな公正研究と教育分科会3「コロナが変える？コロナで変わる？人文学・社会科学における研究公正と研究の質」	研究発表・招聘
26.‘Continuous Attempts for Further involvements- Museums and Indigenous People in Australia’	単	2021.3.12.	IUAES 2020 Congress Sibenik, Croatia,	国際学会・研究発表 コメント
27.「先住民研究の展開－神戸大学での 12 年をふりかえって」	単	2021 年 3 月 27 日	神戸大学退職記念最終講演	講演
28.「授産事業からハイアートへ-アボリジニのプリント布の展開-」	単	2021 年 7 月 3 日	国立民族学博物館共同研究会 「伝統染織品の生産と消費」第 9 回研究会	研究発表

29.「アボリジニの神話と死-トーテミズムを生きる人々-」	単	2021 年9 月 18 日	神話学研究会第 12 回オンライン研究集会	研究発表
30.「人類学研究と公共性」	単	2022 年 5 月 7 日	京都人類学研究会	新歓講演会　コメント
31.「アイヌ民族に関する研究倫理指針（案）」から考える、文化人類学の過去と未来に向けての展望」	単	2022 年 6 月 5 日	第 56 回日本文化人類学研究大会研究倫理委員会特別シンポジウム 明治大学	研究発表

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名 青木 敦英

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
中等教科教育法Ⅰ【保健体育】	（学術論文） 1. 保健体育科教育実習生の不安と教育実習前後の教員志望の変化について	単	平成 29 年 1 月	芦屋大学論叢（No.66, 1-6）	芦屋大学の保健体育科での教育実習生が実習前に抱える不安と、教育実習が教員志望に与える影響について調査したところ、「授業実践力」が最も大きな不安因子であること、教育実習前後の教員志望の変化では実習後に有意に高くなっていることを明らかにした。
	2. 保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響	単	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢（No.71, 1-8）	保健体育科での教育実習を経験することで、自己評価得点と教員志望度が変化した割合には、有意な正の相関関係が認められ、教育実習で身につけた教員としての資質・能力に違いがあることが示唆された。
	3. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察 －芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢（No.71, 21-30）	小規模な教員養成系大学における教採受験学生の傾向・実態を兆歳、どのような支援ができるのか検討を行った。 著者：笠原清次、竹安知枝、盛谷亨、青木敦英、若杉祥太、石川峻、辻尚士、雄倉春来 （※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能）
	4. 教育実習前後の模擬授業（保健体育）の変容に関する事例的研究－教育実習を経験した大学生の模擬授業から－	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢（No.75, 101-110）	教育実習生が教育実習の前後に模擬授業を行い、その変容について分析したところ、授業場面では学習活動場面の割合が実習後に大きく増加しておりマネジメントの質が向上したことが伺えた。しかし、授業中のフィードバックについては大きな改善はみられず、課題があることが明らかとなった。 著者：青木敦英、降幡幸奈、石川峻、森田玲子 （※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能）

中等教科教育法Ⅲ【保健体育】	（学術論文） 1．保健体育科教育実習生の不安と教育実習前後の教員志望の変化について	単	平成 29 年 1 月	芦屋大学論叢（No.66，1-6）	（再掲のため、略）
	2．保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響	単	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢（No.71，1-8）	（再掲のため、略）
	3．大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察　－芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢（No.71，21-30）	（再掲のため、略）
	4．教育実習前後の模擬授業（保健体育）の変容に関する事例的研究－教育実習を経験した大学生の模擬授業から－	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢（No.75，101-110）	（再掲のため、略）
運動生理学	（学術論文） 1．肘屈曲運動における力―速度関係からみた両側性および一側性の筋パワー特性	共	平成 24 年 12 月	日本運動・スポーツ科学学会 運動とスポーツの科学 （No.18，9-15）	これまで筋力を中心にみられた両側性機能低下（Bilateral deficit：BLD）と呼ばれる現象が、力ー速度関係および力ーパワー関係についても出現するか否かについて検討した結果、一側条件が両側条件よりも高い値を示し、力ー速度ーパワー関係においても BLD が出現することが確認された。 著者：青木敦英、荒木香織、田路秀樹） （※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能）
	2．女子中学生における音響的骨評価値による骨密度と運動習慣との関連について	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢（No.62，1-7）	女子中学生を対象に音響的骨評価値（OSI）を調査し、運動習慣の影響について検討を行った。その結果、OSI は学年が進むにつれ大きくなる傾向を示すこと、とくに、跳躍運動を主体としたスポーツが骨形成に好影響を与えている可能性が示唆された。
	3．中学生陸上競技選手の指導に関する一考察 ： 無酸素パワーと脚筋力の分析から	共	平成 27 年 3 月	兵庫県立大環境人間学部研究報告 （No.17，57-67）	中学生陸上競技選手を対象に競技力向上を図るための有効な指導のあり方を検討することを目的に、無酸素パワーと脚筋力の分析を行った。体重当たり等速

					性筋力については女子の伸展が高校生のトップクラスに近い値を示したが、屈曲は低く、男子は伸展、屈曲ともに高校生のトップクラスより低いことが明らかになり、今後の指導の方向性について示唆することができた。 著者：田路秀樹、青木敦英、福田厚治 （※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能）
	4．高齢者の肘屈曲運動による力―速度―パワー関係からみた両側性機能低下	共	平成 27 年 8 月	兵庫県体育スポーツ科学学会 体育・スポーツ科学（No.24, 11-17）	荷重法を用いた力―速度―パワー関係から、高齢者の両側性機能低下（BLD）について検討を行った結果、力―速度曲線および力―パワー曲線のいずれも一側条件が両側条件よりも高い値を示し、とくに速い収縮速度条件において顕著であったことから、高齢者においても明らかな BLD が出現することを明らかにした。 著者：青木敦英、田路秀樹 （※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能）
	5．肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力―速度―パワー関係に及ぼす影響	共	平成 30 年 4 月	トレーニング科学（No.29 第 3 巻, 255-265）	肘関節屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングを課したところ、一側性のパワー改善という点から片側ずつの一側性トレーニングの方が、両側性のトレーニングよりも効果的であることが示唆された。 著者：青木敦英、田路秀樹（※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能）
	6．ジュニアバレーボール選手の栄養素等摂取状況について	共	平成 30 年 10 月	芦屋大学論叢（No.70, 51-56）	女子ジュニアバレーボール選手の栄養素等の摂取量について調査を行ったところ、栄養摂取状況は比較的良好であったが、バレーボールの競技特性や活動量からみると、栄養素摂取状況は必ずしも適正な摂取量とはいえない可能性が示唆された。 著者：青木敦英、鈴木麻希 （※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能）
	7．男性高齢者における肘関節屈曲運動の一側性と両側性のトレーニングが力―速度―パワー関係に及ぼす影響	共	令和 1 年 6 月	教育医学（No.64, 283-292）	高齢者を対象にトレーニング条件の違いが肘関節屈曲運動のパワー特性に与える効果について検討したところ、一側条件でトレーニングを行うことが筋力および筋パワーを高めるのに効果的であることが示唆された。 共著者：青木敦英、田路秀樹

	8. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和 1 年 12 月	体育学研究（No.64, 603-612）	（※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能） 動作速度の異なる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差について検討を行ったところ、女性では中高速でトレーニングを行った群において最大トルクの増加率が有意に高かったことから、女子においては高速度を組み合わせたトレーニングが有効であるという性差が示唆された。 著者：田路秀樹、溝畑潤、青木敦英、福田厚治 （※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能）
トレーニング演習	（学術論文） 1. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力―速度―パワー関係に及ぼす影響	共	平成 30 年 4 月	トレーニング科学（No.29 第 3 巻, 255-265）	（再掲のため、略）
	2. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和 1 年 12 月	体育学研究（No.64, 603-612）	（再掲のため、略）

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1. バスケットボールにおけるポジション別にみたリバウンド獲得状況と勝敗との関係	共	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢（No.68, 1-8）	芦屋大学のリバウンド獲得について分析したところ、ポジション別ではインサイドプレイヤーのリバウンド獲得が高いこと、ディフェンスリバウンドの獲得が勝敗に影響することが明らかになった。 著者：石川峻、青木敦英
2. バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究- Offensive Efficiency 算出の試み-	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢（No.69, 11-18）	バスケットボールにおける個人のパフォーマンスを評価できる Offensive Efficiency を用いて個人パフォーマンス並びに勝敗別の分析を行ったところ、個人パフォーマンスの評価やチーム貢献度について明らかすることができた。 著者：石川峻、青木敦英、別當和香
3. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニン	共	平成 30 年 4 月	トレーニング科学	（再掲のため、略）

グが力―速度―パワー関係に及ぼす影響			（No.29 第 3 巻，255-265）	
4. ジュニアバレーボール選手の栄養素等摂取状況について	共	平成 30 年 10 月	芦屋大学論叢（No.70，51-56）	（再掲のため、略）
5. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共	平成 31 年 3 月	スポーツサイエンスフォーラム　スポーツサイエンス（No.13，17-32）	中学生女子バレーボール選手のスパイク速度と身体特性や体力の測定を行い、中学生女子バレーボール選手では立ち幅跳びがスパイク速度に影響を及ぼす重要な体力因子であることが示唆された。 著者：青木敦英、石川峻、竹安知枝
6. 男性高齢者における肘関節屈曲運動の一側性と両側性のトレーニングが力―速度―パワー関係に及ぼす影響	共	令和 1 年 6 月	教育医学（No.64，283-292）	（再掲のため、略）
7. 保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響	単	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢（No.71，1-8）	（再掲のため、略）
8. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察　－芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢（No.71，21-30）	（再掲のため、略）
9. 日本プロバスケットボール選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果について－2018-19 シーズンの場合－	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢（No.71，57-63）	B リーグ選手の相対的年齢効果（RAE）について調査したところ、4-6 月生まれの選手が多くなっており、この点を配慮した今後の指導者の育成が望まれる。 著者：石川峻、青木敦英
10. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和 1 年 12 月	体育学研究（No.64，603-612）	（再掲のため、略）
11. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察	共	令和 1 年 12 月	アダプテッド体育・スポーツ学研究（No.5（1），18-21）	「近畿アンリミテッド・パラ陸上」に参加した協賛企業・団体とボランティアを対象に、障がい者スポーツイベントを活性化させるための手がかりを得るためのアンケートを実施し、イベントの活性化につながる分析を試みた。 著者：竹安知枝、青木敦英、石川峻
12. 大学生男子バスケットボール競技におけるゲーム分析ー本学における関西学生	共	令和 2 年 3 月	芦屋大学論叢（No.72，57-64）	芦屋大学の過去 3 年間の 2 部リーグ戦での戦いにおいて、BOX SCORE から算出できる各スタッツ

バスケットボール2部リーグからの検討				と勝敗負戸の関係につて分析を試みた。 著者：石川峻、青木敦英
13. バスケットボール競技におけるクォーターごとの得点傾向と勝敗との関係ー関西学生バスケットボールリーグを対象としてー	共	令和 2 年 9 月	芦屋大学論叢（No.73, 1-7）	関西学生バスケットボールリーグの 1 部および 2 部リーグの試合を対象として、バスケットボールのクォーターの得点傾向について分析を試みたところ、競技レベルで勝敗に影響するクォーターが異なっていることが推察された。 著者　青木敦英、石川峻、竹安知枝
14. 大学男子バスケットボール競技における選手評価の検討ー指導者と選手の評価に着目してー	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢（No.74, 103-110）	本研究では大学男子バスケットボール選手のスキル面とパーソナリティ面における指導者と選手の評価の差を明らかにし、今後のチームビルディングの方策について論じた。 著者：石川峻、青木敦英
15. 知的障碍男児における非肥満児と肥満児の身体的特性	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢（No.75, 51-58）	6 歳児から 18 歳までの男児知的障碍児の身長、体重、脂肪量、除脂肪体重の継続的な測定データについてパネルデータ分析を用いて分析を行ったところ、知的障碍男児の肥満、痩身の予防は学童期以前から実施することが重要であることが示唆された。 著者：田路秀樹、榊悠太、青木敦英
16. 教育実習前後の模擬授業（保健体育）の変容に関する事例的研究ー教育実習を経験した大学生の模擬授業からー	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢（No.75, 101-110）	（再掲のため、略）
17. 芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢（No.76, 21-30）	芦屋大学の運動部に所属する学生を対象として、スポーツ傷害の発生状況にについて調査したところ、格闘技と球技、男子と女子で傷害の発生状況に違いがみられたことが明らかになった。 著者：伊藤武徳、西光哲治、金相煥、別當和香、武田光平、石川峻、番平守、青木敦英
【その他（講演や発表）】 1. バスケットボールにおけるポジション別にみたリバウンド獲得状況と勝敗との関係（学会発表）	共	平成 29 年 9 月	日本体育学会第 68 回大会	発表者：石川峻、青木敦英
2. 中学生バレーボール選手のスパイク速度に及ぼす体格と体力の影響（学会発表）	共	平成 30 年 8 月	日本体育学会第 69 回大会	発表者：青木敦英、石川峻

3. 等速性膝伸展運動における複合トレーニングの効果 -男子大学生を対象として-（学会発表）	共	平成 30 年 8 月	日本体育学会第 69 回大会	発表者：田路秀樹、溝畑潤、青木敦英、福田厚治
4. 児童期における外遊びの多寡がその後の運動に対する主観的評価に与える影響（学会発表）	共	平成 30 年 9 月	日本体力医学会第 73 回大会	発表者：竹安知枝、青木敦英、臼井達矢、織田恵輔、辻慎太郎、松尾貴司
5. バスケットボールにおけるクォーターごとの得点と勝敗の関係ー関西学生バスケットボールリーグを対象としてー（学会発表）	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	発表者：青木敦英、石川峻、竹安知枝
6. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察（学会発表）	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	発表者：竹安知枝、青木敦英、石川峻
7. 等速性膝伸展運動における複合トレーニングの効果ー女子大学生を対象としてー（学会発表）	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	発表者：田路秀樹、溝畑潤、青木敦英、福田厚治
8. ミニテニスの普及に関する一考察（学会発表）	共	令和 1 年 9 月	日本体力医学会第 74 回大会	発表者：竹安知枝、青木敦英、臼井達矢、織田恵輔、辻慎太郎、松尾貴司
9. 片脚と両脚のプライオメトリックトレーニングが跳躍能力に及ぼす影響ー大学バレーボール選手を対象としてー（学会発表）	共	令和 2 年 6 月	兵庫体育・スポーツ科学学会第 31 回大会	発表者：青木敦英、石川峻、竹安知枝
10. ミニテニスに対する意識調査ー経験者を対象にー（学会発表）	共	令和 2 年 6 月	兵庫体育・スポーツ科学学会第 31 回大会	発表者：竹安知枝、青木敦英、石川峻
11. 小規模大学の特徴を生かした IR 活動の課題と展望ーIR 推進室の設置から教学 IR の分析に至るまでの3年間ー（学会発表）	共	令和 3 年 8 月	日本教育情報学会第 37 回大会	発表者：藤本光司、新谷隆之、青木敦英、徳岡拓、小野貴久
12. シニアテニス国際大会の参加者における運動継続に関わる実態調査（学会発表）	共	令和 3 年 9 月	日本体力医学会第 76 回大会	発表者：竹安知枝、青木敦英、臼井達矢、織田恵輔、辻慎太郎、松尾貴司

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　大石　　徹

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
社会学概論Ⅰ（単独）	（著書） 1. ひとが優しい博物館――ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社	16 (307)	株式会社セガが開発したお化け屋敷「マーダーロッジ」では、暗闇のなか、視覚を遮断された入場者の聴覚や皮膚感覚が刺激される。この画期的な体感アトラクションはまた、視覚障害者も楽しめるものだ。このような「マーダーロッジ」の仕組みはユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館および美術館）の設備にも応用できる。「社会学概論Ⅰ」で取り上げる感覚情報や知的な楽しみについても論じている。 （執筆担当部分：娯楽・余暇の幅を広げる――見えない恐怖を共遊する「マーダーロッジ」の衝撃） 主要な著者：広瀬浩二郎、相良啓子、大髙幸、篠原聰、黒澤浩、石塚裕子、大石徹、堀江典子、小山修三 著者の合計人数 23 名
	（学術論文） 1. 映画の副音声をめぐる一考察――創造的観念を通して	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』（芦屋大学発行）70 号	12	「社会学概論Ⅰ」で取り上げるトピック、たとえば情報化社会、感覚情報、ユニバーサル・デザイン、ライフスタイルの変化、芸術の社会的な重要性に関連する論文である。副音声は、映像の主音声を聴くだけではわかりにくい情報を視覚障害者に伝えるものである。この論文では、映画の副音声について、その先行研究・普及・作成手順を検討したのち、映画の主音声および副音声に対する批評の必要性を主張した。
	（その他） 1. 娯楽のユニバーサル化――映画の副音声	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんぱく』（国立民族学博物館発行）487 号	1 (20)	「社会学概論Ⅰ」で取り上げるトピック、たとえば情報化社会、感覚情報、ユニバーサル・デザイン、ライフスタイルの変化、芸術の社会的な重要性に関連している論考である。この論考では、映画の副音声の普及・媒体・作成手順を紹介したのち、副音声作成と学

						術的フィールドワークとの間には、副音声の作成者やフィールドワークの調査者が情報を選択し、それを解釈しながら、言葉に翻訳しているという共通点があることを指摘した。

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1．ひとが優しい博物館――ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社	（再掲のため、略）
2．ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会	共	令和 3 年 9 月	小さ子社	大切な人との別れは誰の人生にでも訪れる。死との闘いでは、いつか必ず誰もが負けるからだ。そういうユニバーサルな別れをよく噛みしめるためには、旅立つ相手の声に耳を傾けて相手の気持ちを考えたり、手足に触れて相手の今にも消え入りそうな命を体ごと感じたりして、聴覚や触覚を呼び起こし、そして身体に眠る潜在能力、全身の感覚を呼び覚ます必要がある。そういう潜在能力や感覚を磨く場にユニバーサル・ミュージアムはなりうる。 （執筆担当部分：聴覚と触覚が呼び起こす――母の声と手足を通して：全 248 ページのうち 3 ページ） 主要な著者：広瀬浩二郎、吉田憲司、小山修三、半田こずえ、篠原聰、山本清龍、細矢芳、阿部健一、北井利幸、大石徹、真下弥生、伊藤鉄也、岡本裕子、松山沙樹、日高真吾、黒澤浩、鈴木康二、堀江典子、原礼子 著者の合計人数 60 名
【学術論文】 1．映画の副音声をめぐる一考察――創造的観念を通して	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』（芦屋大学発行）70 号	（再掲のため、略）
【その他（講演や発表）】 1．研究発表「触常者も見常者も満喫できる音響娯楽施設――マーダーロッジの事例」	単	平成 27 年 3 月	国立民族学博物館共同研究会「触文化に関する人類学的研究――博物館を活用した“手学問”理論の構	株式会社セガが開発したお化け屋敷「マーダーロッジ」では、暗闇のなか、視覚を遮断された入場者の聴覚や皮膚感覚が刺激されることによって恐怖を味わう。この体感アトラクションはま

			築」（於：国際基督教大学）	た、視覚障害者も楽しめる。「マーダーロッジ」の仕組みはユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめるミュージアム）の設備にも応用できる。この発表では、「社会学概論Ⅰ」で取り上げるトピック、たとえば情報化社会、知的な楽しみ、感覚情報についても論じた。
2．講演「娯楽・余暇の幅を拡げる――見えない恐怖を共遊する『マーダーロッジ』の衝撃」	単	平成27年11月	国立民族学博物館の公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開――展示・教育から観光・まちづくりまで」（於：国立民族学博物館）	娯楽施設は、娯楽や余暇や芸術表現の幅を拡げる可能性も秘めている。そのような施設の例として、株式会社セガのお化け屋敷のマーダーロッジを紹介した。この施設は、日本社会にユニバーサル・ミュージアムやダイアログ・イン・ザ・ダークや暗闇体験ワークショップが普及する前に成功したケースである。言わば聴覚や闇の復権の先駆けと言えよう。この講演は、「社会学概論Ⅰ」で取り上げる情報化社会や知的な楽しみや感覚情報にも触れている。
3．講演「娯楽から人生を考える――お化け屋敷の音響の場合」	単	平成30年2月	芦屋大学公開講座（於：芦屋市民センター）	臨場感が表現されるようなタイプの娯楽は、現実の人生を捉えられるし、臨場感があるおかげで鑑賞者の人生の一部分になれると言えよう。そのようなタイプの娯楽の例として、お化け屋敷の音響を取り上げ、そのような音響を応用することによって人生を表現したり実感したりできる可能性について考えた。「社会学概論Ⅰ」で取り上げるトピック、たとえば情報化社会、知的な楽しみ、感覚情報についても論じている。
4．娯楽のユニバーサル化――映画の副音声	単	平成30年4月	『月刊みんぱく』（国立民族学博物館発行）487号	（再掲のため、略）
5．研究発表「大切なのは考え抜くこと――映画の副音声を作るために」	単	平成30年7月	国立民族学博物館共同研究会「『障害』概念の再検討――触文化論に基づく『合理的配慮』の提案に向けて」（於：国立民族学博物館）	映画の主音声には出演者の声、背景音、BGM などの聴覚情報が含まれ、それらの情報は映画に立体感も与える。視覚障害者は、映画の主音声を補足する副音声を聴きながら、主音声の聴覚情報を組み合わせて画面を想像している。そして副音声を作るとき、いちばん大切なのは、どのような副音声をどこ

				に入れるのかを考え抜くことなのだ。この発表では、「社会学概論Ⅰ」で取り上げる情報化社会や感覚情報についても論じた。
６．　講演「なぜ物語なのか」	共	令和元年 11 月	国立民族学博物館の公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題――2020 オリパラを迎える前に」のセッションⅢ「さわれないものへのアプローチ――映像・風景・宇宙の物語」（於：国立民族学博物館）	近現代をめぐる問題点は、くだらない仕事（bullshit jobs）とスティーヴ・ジョブズ（Steve Jobs）という二つのジョブズを通して分かる。そして、スティーヴ・ジョブズに最も影響を与えた人、ボブ・ディランは「荒野に響きわたる個人の叫び」のような存在であり、そんな叫びから、「具体的なケースと具体的な人間によって方向づけられた実質的『正義』」（マックス・ウェーバー『経済と社会』）が生まれ、こんな正義に基づく物語は近現代と対決する。
７．講演「暗闇へ突っ走れ――専門主義を打ち破るために」	共	令和 3 年 10 月	国立民族学博物館の第 514 回みんぱくゼミナール「ユニバーサル・ミュージアムとは何か――暗闇で『野生の勘』を取り戻せ」（於：国立民族学博物館）	国立民族学博物館の特別展「ユニバーサル・ミュージアム」には音の展示があり、芦屋大学運動部の協力を得て録音した 9 競技のプレー中の音を再生できる。来場者は、バスケットボールの靴がこすれる「キュッキュ」、ボールが弾む「ドムドム」といった音も「男子と女子で違う。スポーツ観戦の新しい方法として面白い」と言う。このような展示は学芸員の専門主義から生まれない。雑多な知識や記憶を結びつけることによって、既存の発想の殻を打ち破り、専門主義は超えられる。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名 阪本 美江

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概 要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	（著書） 1.『「劣等児」特別学級の思想と実践』	単	平成28年12月23日	大空社出版	（抽出不可） (277)	本書は、戦前の文部省の見解を踏まえつつ、奈良県下の「特別学級」の歴史を明らかにするものである。本書では、奈良の奈良女高師附小、桜井小学校、治道小学校に着目し、当時の「特別学級」や「劣等児」「低能児」の特徴を明らかにした。その結果、当該校には新教育的な理念があり、狭い地域の中で互いに交流を重ねることで、教育理念や実践を培っていたこと等が確認できた。本書は「2021 年日本特別ニーズ教育学会文献賞」を受賞した。
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	2. 『「劣等児」「特別学級」の思想と実践』（改訂版）	単	令和3年5月19日	大空社出版	（抽出不可） (280)	本書は 、2016 年「旧版」にさらなる調査を加えた改訂版である。改訂版ではとくに、奈良女高師附小「特別学級」の実践や理論に着目し、同校理念が京都市の「特別学級」の開設や実践に影響を与えたこと、さらにそれが後の障害児（者）教育へと継承されていった可能性について、より具体的に明らかにすることを目指した。戦前の「特別学級」の検討は、現代の教育問題を考える上でも多くの示唆を与えるものであるということを明確にした。
教育課程論（単独）教育学概論Ⅰ・Ⅱ	（学術論文） 1. 「戦前期における特別学級尊重論の比較検討―文部省特殊教育関係者と現場の特別学級担任教師の事例」	単	平成24年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間形成と文化』第 27 号	239 (13)	本稿では、特別支援教育研究の一環として、戦前期「特別学級」の発展に尽力した人物が、どのような根拠に基づき当該学級の意義を主張していたのか、解明することを目指した。その際、文部省嘱託青木誠四郎と奈良県の桜井小学校の一訓導の主張を例に挙げ検討した。その結果、両者とも共通して児童中心主義的発想の下、「劣等児」教育の必要性を述べ、教育方法及び教育課程編成の充実を期待していたことが明らかとなった。（pp：39～251）

（単独）						
教育課程論（単独）教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	2.「奈良県桜井尋常高等小学校における特別学級と新教育」	単	平成24年5月27日	全国地方教育史学会『地方教育史研究』第33号	43（22）	本稿では、道徳教育及び教育方法の歴史的研究として、当時「新教育」実践校として高名であった公立の桜井小の教育方法と「特別学級」の実践について明らかにすることを目指した。その結果、同校「特別学級」担任であった西久保訓導は、学力不振児を人道的・教育的・国家的見地より教育する必要性を主張し、特別な教育課程を編成し、将来の彼等の生活をも顧慮した進路指導や、能力や特性に応じた教育を実践していたことが明らかとなった。（pp：43～64）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	3.「大正期から昭和初期にかけての奈良県における「劣等児」特別学級の思想と実践：「新教育」との関係に着目して」	単	平成26年3月24日	奈良女子大学人間文化研究科博士学位論文（奈良女子大学第550号）	（抽出不可）（164）	本博士論文では、奈良県の小学校における「特別学級」の歴史や特徴を明らかにすることを目指した。奈良県では、奈良女高師附小、桜井小学校、治道小学校において「特別学級」が開設されていたことが確認できたが、当時「劣等児」「低能児」と言われた、いわゆる学力不振・障害を有する児童に対し、それぞれの学校が互いに交流を重ね、「新教育」の理念を深めることで教育的「救済」を目指していたことが明らかとなった。
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	4.「戦前期における「劣等児」の身体的問題について：「特殊教育」関係者の理論に着目して」	単	平成28年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第31号	139（11）	本稿では、特別支援教育の歴史的検討の一環として、「劣等児」とその身体的特徴について考察することを目指した。その際、当時「特殊教育」の実践・研究に関わった複数の人物（青木誠四郎、脇田良吉、東京高師附小の「特別学級」担任）に着目し、その見解を確認したところ、いずれも「劣等児」の原因には先天的要因と後天的要因があり、遺伝や貧困の問題等があることを指摘していたことが明らかとなった。（pp：139～149）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ	5.「奈良女高師附小訓導斎藤千栄治の「劣等児」「低能児」論とその展開」	単	平成28年3月20日	日本教育史学会『日本教育史学会紀要』第6号	20（20）	本稿では、まずは奈良女高師附小「特別学級」主任齋藤千榮治の論に着目し、学力不振に対する道徳教育、教育実践の歴史的考察を行った。齋藤は、徳育のみならず、教育的・社会的見地より「劣等児」等の教育が不可欠であること、さらに「実際生活」に即した教

（単独）						育等が必要であることも述べていた。齋藤は、転出先の滋野小で学級担任として田村一二を育成するが、田村は後の障害児（者）教育においても、齋藤の理論を継承していた可能性を指摘した。（pp：20～39）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	6.「奈良女子大学附属小学校所蔵の近・現代学校資料の現状」	単	平成28年3月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第11号	57（12）	本稿では、奈良女附小所蔵資料の特徴と、学校資料は児童・生徒の価値ある学習教材にもなり得ることを指摘した。附小には、開校時から作成された膨大な資料が学内に所蔵されている。しかしそのほとんどが酸性紙で作製されているため劣化が激しく、大学が主体となって資料の脱酸・補修を完了させた。本稿では同事業の特徴と今後の課題だけではなく、学内・地域に関する膨大な記録が残された学校資料活用の意義についても指摘した。（pp：57～68）
教育課程論（単独）教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	7.「通常学級で特別な配慮の必要な子どもたちについて― 視機能の問題に着目して」	単	平成29年3月（日付明記無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第12号	99（11）	本稿では、特別な支援が必要な子ども達への配慮のあり方と、そのための教育課程編成のあり方を考察する一環として、子どもの視覚的な問題に着目し検討することを目指した。とくに、視力・色覚に問題を抱え、心因性視力障害を発症した子ども達に着目し、どのような教育課程編成・環境構成が必要なのかついて言及した。加えて、学校・家庭・社会・医療の連携が不可欠であることについても指摘した。（pp：99～109）
教育課程論（単独）教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	8.「奈良女子高等師範学校第1期生斎藤よしの経歴について―佐保会での実績にも着目して」	単	平成29年3月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第12号	25（10）	本稿では、奈良女高師1期生であり佐保会を設立したメンバーの一人である齋藤よしに着目し、齋藤の教職者としての実績のみならず、奈良女高師、佐保会での実績、社会貢献、及び佐保女学院での教育実践・教育課程を明らかにすることを目指した。その結果、齋藤は、女子の社会的地位の向上を目指して、学内の実践のみならず、社会的方面でも多くの実績を残していたことが確認できた。（pp：25～34）

教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	9.「「実際生活」に即した滋野尋常小学校特別学級の教育実践―特別学級担任田村一二の教育記録に着目して」	単	平成29年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第32号	125 (11)	本稿では、田村一二の滋野小学校時代における教育内容を歴史的に考察することで、現代の特別支援教育における教育方法・道徳教育のあり方に示唆を得ることを目的とした。その結果田村は、支援の必要な子ども達には「実際生活」に即した教育と徳育が重要であると認識し、教師が良好な教育環境を提供する必要性を主張していた。さらに、子ども達の将来の生活までをも顧慮した職業教育も行っていたことも明らかとなった。（pp：125～135）
教育課程論（単独）教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	10.「小学校から現在までの印象に残る授業―教育課程論を受講する大学生を対象にした調査より」	単	平成30年3月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第13号	35 (8)	本稿では、教職課程を履修する学生が回答した「思い出に残る授業」アンケートの内容を分析することで、今後の教育課程、教育方法及び教職のあり方について考察することを目指した。その結果、教師主体、座学中心の授業ではなく、体験を織り交ぜた授業が理想であり、子どもの興味関心に即した学習環境の整備、総合的な学習の時間の充実が必要であることが明らかとなった。（pp：35～42）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	11.「OG によるキャリア教育に学生が期待する講義内容と今後の課題について―奈良女子大学「専門職論」のアンケート結果から」	単	平成30年3月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第13号	385 (8)	本稿では、今後のよりよい進路指導を考察する一環として、奈良女子大学が開講する「専門職論」における受講生対象のアンケートに着目し、検討することを目指した。とくに将来教職を目指す学生においては、同講義で様々な職種のゲストスピーカーの職業内容・職業観に触れることで、将来教育現場における進路指導のあり方を改めて考察するきっかけとなっていたことが確認できた。（pp：385～392）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	12.「奈良女子大学附属小学校所蔵の学校資料の状態について―明治期における資料の劣化状況に着目して」	単	平成30年8月31日	関西教育学会『関西教育学会年報』第42号	1 (5)	本稿では、奈良女附小が開校時より所蔵する学校資料の特徴を明らかにしつつ、学校資料を活用した教育方法についても言及した。附小資料は、経年的な変化のみならず、紙質の問題もあり、劣化が激しく、脱酸性化処理が急務であり補修作業が必要な資料の割合が高いことが確認できた。また、学校資料活用例が蓄積され公開されていくことで、資料の大切さが教職員等に認識されていく可能性についても指摘した。 （pp：1～5）

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

教育課程論（単独）教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	13.「大学生が語る「思い出に残る授業」より見えてきた芸術教育への創意工夫の必要性：教職に関する科目を受講する「初等芸術教育学科」の学生の記述より」	単	平成31年3月23日	大阪芸術大学短期大学部学術研究委員会『大阪芸術大学短期大学部紀要』第43号	117 (12)	本稿では、初等教育の教員を目指す学生を対象に、とくに芸術系の教科において「思い出に残る授業」調査を行うことで、よりよい教育方法・教育課程のあり方について考察することを目指した。その結果、知識偏重ではなく、双方向型・体験型・教科横断型、技能の修得に留まらない教育方法・教育課程が、良い印象として残る傾向にある、ということが確認できた。また同調査は、学生が教職のあり方について考察するきっかけにもなっていた。 （pp：117～128）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	14.「奈良女子大学附属小学校所蔵資料の実物保存にむけての取り組みについて」	単	令和1年6月30日	日本アーカイブズ学会『アーカイブズ学研究』第30号	38 (10)	本稿では、奈良女附小資料保存事業を通じて、資料実物保存の意義と、児童・生徒への教材としてどのような活用方法があるのか、明らかにすることを目指した。附小資料には相当な劣化が生じているが、それは附小だけに留まらず、全国の学校資料においても生じている可能性を指摘し、今後資料保存は、実物保存も視野に入れていくことと、地域資料としても価値の高い学校資料の積極的な活用が促進されることの必要性について指摘した。 （pp：38～46）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	15.「奈良女高師附小との交流の下「新教育」を構築させた公立小学校の一例―奈良県斑鳩尋常高等小学校に着目して」	単	令和2年3月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第15号	21 (9)	本稿では、「新教育」による、子ども達の主体的活動と情操陶冶に力点をおいていた斑鳩小の教育内容や方法に着目することで、現代の主体性教育、道徳教育への示唆を得ることを目的とした。斑鳩小は、近隣の「新教育」実践で高名な奈良女高師附小と交流を重ねることで多大な影響を受けていたが、同校「新教育」が発展した理由は、同校教員に、常に児童を中心に考える教職者としての強い信念があったことも確認できた。（pp：21～29）
教育課程論（単独）教育学概論	16.「新型コロナウイルス感染症による臨時休校時の家庭指導等の状況について―小・中・高校生の保護者へのアンケート結果より」	単	令和3年3月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第16号	89 (9)	本稿では、コロナ禍における特別な教育方法・教育課程のあり方について考察することを目指した。その結果奈良では、コロナ禍の中全国に先駆けてオンライン学習が導入されたが、その利用に戸惑いを感じている保護者が多いこと等が確認できた。すなわち奈良は、オンライン学習の上で恵まれた環境であった半面、数々の問題も抱えていたことが確認できた。今後、非常時に即したよりよい教育方法・教育課程の編成が期待されることを指摘した。

Ⅰ・Ⅱ（単独）						（pp：89～97）
教育課程論（単独）教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	17.学生が考えた奈良女附小資料を活用した学習案の一例	単	令和3年8月31日	関西教育学会『関西教育学会年報』第45号	26（5）	本稿では、奈良女子大学において将来教師を目指す学生が考案した、附小資料を活用した児童・生徒への教育方法について紹介することで、教育方法・教育課程編成のあり方を考察する一つの手がかりとした。本稿検討を通じて、将来教師を目指す学生には、積極的に教育方法やカリキュラムを考案する傾向が確認できた。また本稿では、学校資料活用例を蓄積させることで、より一層学校資料の価値が認識されることについても指摘した。（pp：26～30）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	18.「草創期における奈良女高師附小「特別学級」の特徴と道徳的な教育目標について―附小所蔵資料にも言及して」（「特別寄稿」）	単	令和4年4月25日	奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』第502号（春4月）号	16（6）	本稿では、道徳教育指導法の歴史的検討を行う一環として、奈良女高師附小「特別学級」に着目して、そこでの学力不振・軽度障害を有する子ども達への指導法がどのようなものであったのか、明らかにすることを目指した。附小では、「特別学級」の子ども達は、将来非行や貧困等といった社会問題と密接に繋がりがあるとの認識の下、学習態度や家庭生活での規律面を徹底させる徳育を学校内で行っていたことが確認できた。（pp：16～21）
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	19.「心身症と不登校を呈した男児への生徒指導の一例―心因性視力障害発症から治癒までの経過に着目して」	単	令和4年1月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第17号	75（10）	本稿では、心身症と不登校と呈した男児へのよりよい生徒指導・情操教育のあり方について検討することを目指した。その際、男児の視力障害発症から治癒までの視力の変化に着目した。男児は学校での「いじめ」が原因で同障害を発症させたが、学校における生徒指導・情操教育の改善や、学校―保護者―医療の連携が治癒へと導いていたことが明らかとなった。また、男児の同障害は、発達障害の二次障害である可能性も考えられた。（pp：75～84）
教育課程論	20.「色覚特性に関する教育講演受講後の保育教諭等の意識の変化―園におけるより	単	令和4年6月	『関西教育学会年報』第46号（掲載決定）		本稿では、園児の色覚特性に着目しつつ、園のよりよい色彩環境や保育・教育課程編成のあり方について検討することを目指した。論者が奈良市の認定こども園を対象に実施した教育講演後、アンケート調査を実施したが、

（単独）教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	よい色彩環境や教育のあり方とは―」					その結果、講演受講前後では教諭等の意識が変化していることが明らかとなった。また、教諭養成機関における、色覚特性を含めた特別な配慮が必要な園児に関する学びが充実されることの必要性についても指摘した。
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	21.「園の教諭等の色覚異常に対する認識と今後の課題について―園のカラーユニバーサルデザインの実現にむけて―」	単	令和4年7月	芦屋大学『芦屋大学論叢』第77号（掲載決定）		現在、学校においては、色覚異常を有する児童・生徒のためのさまざまな取り組みがおこなわれつつあるが、色覚検査を実施しない幼稚園等においてはどのような状況にあるのか、論者が講演を行った某認定こども園で実施したアンケート結果を下に分析し、考察することを目指した。その結果、園が文科省作成の資料を活用することや、教諭養成機関の充実、さらに、研修会等での学びを通じて、園のCUD化が進められていく必要性を指摘した。
教育学概論Ⅰ・Ⅱ（単独）	（その他） 1. 「戦前の桜井に花開いた「新教育」」：大学的奈良ガイド（奈良女子大学の大学的地域学「なら学プロジェクト」のメンバーによる連載企画）	単	平成28年1月1日	月刊大和路『ならら　平成28年1月号』	44 (2)	「ならら」は一般向けの情報誌である。奈良女子大学の「大学的地域学」の試みである「奈良学プロジェクト」の一環として、桜井小の「新教育」と「特別学級」に着目し、同校において活発な教育実践が繰り広げられた背景には、桜井の地域性があったことを同誌で紹介した。本検討を通じて、桜井の歴史のみならず、桜井が教育実践・カリキュラム編成において先進的な取り組みを行ってきた地域であったことを、広く認識してもらうことを目指した。

研究業績等に関する事項（5年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1.『「劣等児」特別学級の思想と実践』	単	平成28年12月23日	大空社出版	本書は、戦前の文部省の見解を踏まえつつ、奈良県下の「特別学級」の歴史を明らかにするものである。本書では、奈良の奈良女高師附小、桜井小学校、治道小学校に着目し、当時の「特別学級」や「劣等児」「低能児」の特徴を明らかにした。その結果、当該校には新教育的な理念があり、狭い地域の中で互いに交流を重ねることで、

				教育理念や実践を培っていたこと等が確認できた。本書は「2021 年日本特別ニーズ教育学会文献賞」を受賞した。
2.『「劣等児」「特別学級」の思想と実践』（改訂版）	単	令和3年5月19日	大空社出版	本書は 、2016 年「旧版」にさらなる調査を加えた改訂版である。改訂版ではとくに、奈良女高師附小「特別学級」の実践や理論に着目し、同校理念が京都市の「特別学級」の開設や実践に影響を与えたこと、さらにそれが後の障害児（者）教育へと継承されていった可能性について、より具体的に明らかにすることを目指した。戦前の「特別学級」の検討は、現代の教育問題を考える上でも多くの示唆を与えるものであるということを明確にした。
【学術論文】 1.「通常学級で特別な配慮の必要な子どもたちについて― 視機能の問題に着目して」	単	平成 29 年 3 月（日付明記無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第 12 号	本稿では、特別な支援が必要な子ども達への配慮のあり方と、そのための教育課程編成のあり方を考察する一環として、子どもの視覚的な問題に着目し検討することを目指した。とくに、視力・色覚に問題を抱え、心因性視力障害を発症した子ども達に着目し、どのような教育課程編成・環境構成が必要なのかついて言及した。加えて、学校・家庭・社会・医療の連携が不可欠であることについても指摘した。（pp：99～109）
2.「奈良女子高等師範学校第1期生斎藤よしの経歴について―佐保会での実績にも着目して」	単	平成 29 年 3 月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第 12 号	本稿では、奈良女高師 1 期生であり佐保会を設立したメンバーの一人である齋藤よしに着目し、齋藤の教職者としての実績のみならず、奈良女高師、佐保会での実績、社会貢献、及び佐保女学院での教育実践・教育課程を明らかにすることを目指した。その結果、齋藤は、女子の社会的地位の向上を目指して、学内の実践のみならず、社会的方面でも多くの実績を残していたことが確認できた。（pp：25～34）
3.「「実際生活」に即した滋野尋常小学校特別学級の教育実践―特別学級担任	単	平成29年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人	本稿では、田村一二の滋野小学校時代における教育内容を歴史的に考察することで、現代

田村一二の教育記録に着目して」			間文化研究科年報』第 32 号	の特別支援教育における教育方法・道徳教育のあり方に示唆を得ることを目的とした。その結果田村は、支援の必要な子ども達には「実際生活」に即した教育と徳育が重要であると認識し、教師が良好な教育環境を提供する必要性を主張していた。さらに、子ども達の将来の生活までをも顧慮した職業教育も行っていたことも明らかとなった。（pp：125～135）
4.「小学校から現在までの印象に残る授業―教育課程論を受講する大学生を対象にした調査より」	単	平成 30 年 3 月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第 13 号	本稿では、教職課程を履修する学生が回答した「思い出に残る授業」アンケートの内容を分析することで、今後の教育課程、教育方法及び教職のあり方について考察することを目指した。その結果、教師主体、座学中心の授業ではなく、体験を織り交ぜた授業が理想であり、子どもの興味関心に即した学習環境の整備、総合的な学習の時間の充実が必要であることが明らかとなった。（pp：35～42）
5.「OG によるキャリア教育に学生が期待する講義内容と今後の課題について―奈良女子大学 「専門職論」のアンケート結果から」	単	平成 30 年 3 月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第 13 号	本稿では、今後のよりよい進路指導を考察する一環として、奈良女子大学が開講する「専門職論」における受講生対象のアンケートに着目し、検討することを目指した。とくに将来教職を目指す学生においては、同講義で様々な職種のゲストスピーカーの職業内容・職業観に触れることで、将来教育現場における進路指導のあり方を改めて考察するきっかけとなっていたことが確認できた。 （pp：385～392）
6.「奈良女子大学附属小学校所蔵の学校資料の状態について―明治期における資料の劣化状況に着目して」	単	平成30年8月31日	関西教育学会『関西教育学会年報』第 42 号	本稿では、奈良女附小が開校時より所蔵する学校資料の特徴を明らかにしつつ、学校資料を活用した教育方法についても言及した。附小資料は、経年的な変化のみならず、紙質の問題もあり、劣化が激しく、脱酸性化処理が急務であり補修作業が必要な資料の割合が高いことが確認できた。また、学校資料活用例が蓄積され公開されていくことで、資料の大切さが教職員等に認識されていく可能性についても指摘した。（pp：1～5）

7.「大学生が語る「思い出に残る授業」より見えてきた芸術教育への創意工夫の必要性：教職に関する科目を受講する「初等芸術教育学科」の学生の記述より」	単	平成 31 年 3 月 23 日	大阪芸術大学短期大学部学術研究委員会『大阪芸術大学短期大学部紀要』第 43 号	本稿では、初等教育の教員を目指す学生を対象に、とくに芸術系の教科において「思い出に残る授業」調査を行うことで、よりよい教育方法・教育課程のあり方について考察することを目指した。その結果、知識偏重ではなく、双方向型・体験型・教科横断型、技能の修得に留まらない教育方法・教育課程が、良い印象として残る傾向にある、ということが確認できた。また同調査は、学生が教職のあり方について考察するきっかけにもなっていた。（pp：117～128）
8.「奈良女子大学附属小学校所蔵資料の実物保存にむけての取り組みについて」	単	令和 1 年 6 月 30 日	日本アーカイブズ学会『アーカイブズ学研究』第 30 号	本稿では、奈良女附小資料保存事業を通じて、資料実物保存の意義と、地域を物語る上でも価値のある学校資料活用の意義について明らかにすることを目指した。附小資料には相当な劣化が生じているが、それは附小だけに留まらず、全国の学校資料においても生じている可能性を指摘し、今後資料保存は、実物保存も視野に入れていくことと、地域資料としても価値の高い学校資料の積極的な活用が促進されることの必要性について指摘した。（pp：38～46）
9.「奈良女高師附小との交流の下「新教育」を構築させた公立小学校の一例―奈良県斑鳩尋常高等小学校に着目して」	単	令和 2 年 3 月（日付記載無し）	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第 15 号	本稿では、「新教育」による、子ども達の主体的活動と情操陶冶に力点をおいていた斑鳩小の教育内容や方法に着目することで、現代の主体性教育、道徳教育への示唆を得ることを目的とした。斑鳩小は、近隣の「新教育」実践で高名な奈良女高師附小と交流を重ねることで多大な影響を受けていたが、同校「新教育」が発展した理由は、同校教員に、常に児童を中心に考える教職者としての強い信念があったことも確認できた。（pp：21～29）
10.「新型コロナウイルス感染症による臨時休校時の家庭指導等の状況について―小・中・高校生の保護	単	令和3年3月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第 16 号	本稿では、コロナ禍における特別な教育方法・教育課程のあり方について考察することを目指した。その結果奈良では、コロ

者へのアンケート結果より」				ナ禍の中全国に先駆けてオンライン学習が導入されたが、その利用に戸惑いを感じている保護者が多いこと等が確認できた。すなわち奈良は、オンライン学習の上で恵まれた環境であった半面、数々の問題も抱えていたことが確認できた。今後、非常時に即したよりよい教育方法・教育課程の編成が期待されることを指摘した。 （pp：89～97）
11.「学生が考えた奈良女附小資料を活用した学習案の一例」	単	令和3年8月31日	関西教育学会『関西教育学会年報』第 45号	本稿では、奈良女子大学において将来教師を目指す学生が考案した、附小資料を活用した児童・生徒への教育方法について紹介することで、教育方法・教育課程編成のあり方を考察する一つの手がかりとした。本稿検討を通じて、将来教師を目指す学生には、積極的に教育方法やカリキュラムを考案する傾向が確認できた。また本稿では、学校資料活用例を蓄積させることで、より一層学校資料の価値が認識されることについても指摘した。（pp：26～30）
12.「草創期における奈良女高師附小「特別学級」の特徴と道徳的な教育目標について―附小所蔵資料にも言及して」（「特別寄稿」）	単	令和4年4月25日	奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』第 502 号（春4月）号	本稿では、道徳教育指導法の歴史的検討を行う一環として、奈良女高師附小「特別学級」に着目して、そこでの学力不振・軽度障害を有する子ども達への指導法がどのようなものであったのか、明らかにすることを目指した。附小では、「特別学級」の子ども達は、将来非行や貧困等といった社会問題と密接に繋がりがあるとの認識の下、学習態度や家庭生活での規律面を徹底させる徳育を学校内で行っていたことが確認できた。（pp：16～21）
13.「心身症と不登校を呈した男児への生徒指導の一例―心因性視力障害発症から治癒までの経過に着目して」	単	令和4年1月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第 17 号	本稿では、心身症と不登校と呈した男児へのよりよい生徒指導・情操教育のあり方について検討することを目指した。その際、男児の視力障害発症から治癒までの視力の変化に着目した。男児は学校での「いじめ」が原因で同障害を発症させたが、学校における生徒指導・情操教育の改善や、学校―保護

				者―医療の連携が治癒へと導いていたことが明らかとなった。また、男児の同障害は、発達障害の二次障害である可能性も考えられた。(pp:75～84)
14.「色覚特性に関する教育講演受講後の保育教諭等の意識の変化―園におけるよりよい色彩環境や教育のあり方とは―」	単	令和4年6月	『関西教育学会年報』第46号(掲載決定)	本稿では、園児の色覚特性に着目しつつ、園のよりよい色彩環境や保育・教育課程編成のあり方について検討することを目指した。論者が奈良市の認定こども園を対象に実施した教育講演後、アンケート調査を実施したが、その結果、講演受講前後では教諭等の意識が変化していることが明らかとなった。また、教諭養成機関における、色覚特性を含めた特別な配慮が必要な園児に関する学びが充実されることの必要性についても指摘した。
15.「園の教諭等の色覚異常に対する認識と今後の課題について―園のカラーユニバーサルデザインの実現にむけて―」	単	令和4年7月	芦屋大学『芦屋大学論叢』第77号(掲載決定)	現在、学校においては、色覚異常を有する児童・生徒のためのさまざまな取り組みがおこなわれつつあるが、色覚検査を実施しない幼稚園等においてはどのような状況にあるのか、論者が講演を行った某認定こども園で実施したアンケート結果を下に分析し、考察することを目指した。その結果、園が文科省作成の資料を活用することや、教諭養成機関の充実、さらに、研修会等での学びを通じて、園のCUD 化が進められていく必要性を指摘した。
【その他(講演や発表)】 **(学会等発表)** 1.奈良女子大学附属小学校所蔵資料の現状―学校資料から読み取れる地域の特徴とは	単 独 発表	平成29年3 月 8 日	科学研究費基盤 C「大正～昭和戦前期の新教育学校における学校経営と教育実践の連関に関する総合的研究」第1回科研費報告会(於:奈良女子大学附属小学校)	科学研究費基盤C「大正～昭和戦前期の新教育学校における学校経営と教育実践の連関に関する総合的研究」の報告会において「奈良女子大学附属小学校所蔵資料の現状」について発表報告した。本報告会は、奈良女附小所蔵資料脱酸・補修事業の一環でもある。
2.奈良女子大学附属小学校所蔵の学校資料の状態について―明治期における資料の劣化状況に着目して	単 独 発表	平成29年11 月 11 日	関西教育学会第69回大会(於:大阪市立大学)	本発表では、奈良女附小が開校時より所蔵する学校資料の特徴を明らかにしつつ、学校資料を活用した教育方法についても言及した。附小開校当初の資料は、経年的な変化のみなら

				ず、紙質の問題もあり、劣化が激しく、脱酸性化処理が急務であり補修作業が必要な資料の割合が高いことが確認できた。また、学校資料を活用した各教科等における教育方法がより一層示されていくことで、資料の大切さが教職員等に認識されていく可能性についても指摘した。
3.奈良女子大学附属小学校所蔵資料の劣化の原因―学校資料に記された奈良空襲の記録に着目して	単 独 発表	平成30年3月24日	科学研究費基盤 C「大正～昭和戦前期の新教育学校における学校経営と教育実践の連関に関する総合的研究」第 2 回報告会(於:奈良女子大学)	科学研究費基盤C「大正～昭和戦前期の新教育学校における学校経営と教育実践の連関に関する総合的研究」の報告会において「奈良女子大学附属小学校所蔵資料の劣化の原因」について発表報告した。本報告会は、奈良女附小所蔵資料脱酸・補修事業の一環でもある。
4.奈良女附小資料の特徴について―資料の脱酸・補修について	単 独 発表	平成 30 年 5 月 13 日	第11回学校資料研究会(於:京都府京都文化博物館)	学校資料研究会において発表。タイトル「奈良女附小資料の特徴について―資料の脱酸・補修について」にて、附小資料の特徴と、科研費を獲得することで実施された附小学校資料保存事業の全容を紹介した。
5.H30 年度附小所蔵資料の脱酸補修実施状況について―地域を物語る学校資料の活用方法について	単 独 発表	平成31年3月 18日	科学研究費基盤 C「大正～昭和戦前期の新教育学校における学校経営と教育実践の連関に関する総合的研究」第 3 回報告会(於:奈良女子大学)	本発表では、奈良女子大学において将来教師を目指す学生が考案した、附小資料を活用した児童・生徒への教育方法について紹介することで、教育方法・教育課程編成のあり方を考察する一つの手がかりとした。将来教師を目指す学生には、積極的に教育方法やカリキュラムを考案する傾向が確認できた。また本発表では、学校資料活用例を蓄積させることで、より一層学校資料の価値が認識されることについても指摘した。
6.学生が考えた奈良女附小資料を活用した学習案の一例	単 独 発表	令和 2 年 11 月 16 日～22 日	関西教育学会第72回大会(Web 開催:神戸親和女子大学)	本発表では、奈良女子大学において将来教師を目指す学生が考案した、附小資料を活用した児童・生徒への教育方法について紹介することで、教育方法・教育課程編成のあり方を考察する一つの手がかりとした。将来教師を目指す学生には、積極的に教育方法やカリキュラムを考案する傾向が確認できた。また本発表では、学校資料

				活用例を蓄積させることで、より一層学校資料の価値が認識されることについても指摘した。
7.奈良女附小が所蔵する学校資料の保存と活用について―地域を物語る学校資料	単独発表	令和3年3月7日	第16回学校資料研究会(於:京都府京都文化博物館)	学校資料研究会において発表。タイトル「奈良女附小が所蔵する学校資料の保存と活用について―地域を物語る学校資料」にて、学校資料が児童・生徒の教育において広く活用されるべきであることと、活用例(資料を利用した学習案)の蓄積が目指されるべきであることについて指摘した。
8.色覚特性に関する教育講演受講後の保育教諭等の意識の変化―園におけるよりよい色彩環境や教育のあり方とは―	単独発表	令和3年11月15日～21日	関西教育学会第73回大会(Web 開催:奈良教育大学・奈良女子大学)	本発表では、園児の色覚特性に着目しつつ、園のよりよい色彩環境や保育・教育課程編成のあり方について検討することを目指した。発表者が奈良市の認定こども園を対象に実施した講演後、アンケート調査を実施したが、その結果、講演受講前後では教諭等の意識が変化していることが明らかとなった。また、教諭養成機関における、色覚特性を含めた特別な配慮が必要な園児に関する学びが充実されることが必要であることについても言及した。
(講演等) 1.奈良県「学校保健研修会」講演	単独講演	令和2年1月30日	令和元年度奈良県学校保健研修会(奈良県教育委員会等主催。於:ホテルリガーレ春日野)	奈良県下の教員(養護教諭も含む)、医師、歯科医師、薬剤師等約100名を対象に講演。タイトル「心因性視力障害について―ストレスを抱えた子どもたち」にて、子どもの心身症の問題と今後の教育課程編成や生徒指導のあり方について講演。心因性視力障害の背後に、家庭、学校、社会の問題や、発達障害の問題があることについても紹介した。(奈良県教育委員会、奈良県医師会、奈良県歯科医師会、奈良県薬剤師会主催)
2.幼保連携型認定こども園中登美こども園講演	単独講演	令和3年5月17日	幼保連携型認定こども園中登美こども園教職員研修会(於:認定こども園中登美こども園)	中登美こども園にて、保育士・幼稚園教諭・その他職員33名を対象に講演を行う。タイトル「視力の問題と色覚異常を持つ園児の特徴について―園・家庭・社会・医療が連携する意義と園のよりよい環境構成のあり方について」にて、乳幼児の視

				機能の特性、心因性視力障害と情操教育の充実の必要性について紹介するとともに、色覚異常を有する乳幼児の特性と、園におけるよりよい環境構成(カラーユニバーサルデザイン)について説明した。また、特別な支援が必要な園児に対する指導や教育方法のあり方についても紹介した。
3.社会福祉法人どんぐり「そら保育園」「はな保育園」「うみ保育園」「もり保育園」講演	単独講演	令和3年5月19日	社会福祉法人どんぐり教職員研修会(於:社会福祉法人どんぐり「もり保育園」	社会福祉法人どんぐり「そら保育園」「はな保育園」「うみ保育園」「もり保育園」の保育士並びに看護師、その他職員 40 名を対象に講演。タイトル「視力の問題と色覚異常を持つ園児の特徴について―園・家庭・社会・医療が連携する意義と園のよりよい環境構成のあり方について」にて、乳幼児の視機能の特性、心因性視力障害と情操教育の充実の必要性について紹介するとともに、色覚異常を有する乳幼児の特性と、園におけるよりよい環境構成(カラーユニバーサルデザイン)について説明した。また、特別な支援が必要な園児に対する指導や教育方法のあり方についても紹介した。
4.奈良市保育会【園長会】講演	単独講演	令和 3 年 11 月 10 日	奈良市保育会(Web 開催:社会福祉法人希望の会　こだま保育園)	「奈良市保育会」の「園長会」において、奈良市内における認定こども園及び保育所の園長約43名を対象に講演。タイトル「子どもの視機能と今後の保育・教育課程編成及び環境構成のあり方について」にて、今後の保育におけるよりよい保育・教育課程編成や環境構成のあり方を、乳幼児の視機能に着目して説明した。そこでは、園におけるユニバーサルデザインについても紹介し、すべての園児がすごしやすく、わかりやすい環境を整備することの必要性について紹介した。
5.奈良県「学校保健研修会」講演	単独講演	令和4年3月17日	令和 3 年度奈良県学校保健研修会(奈良県教育委員会等主催。於:奈良県医師会館)	奈良県下の教員(養護教諭も含む)、医師、養護教諭等、約 150 名を対象に講演。タイトル「コロナ禍における子どもの視力の問題―学校における特別な配慮とよりよい環境構成のあり方と

				は」で講演を行う。通常学級における児童・生徒（幼児も含む）の眼の健康を保持するための指導方法、環境構成のあり方について説明しつつ、保護者も含めた啓発活動の重要性について紹介した。（奈良県教育委員会、奈良県医師会、奈良県歯科医師会、奈良県薬剤師会主催）

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　杉 島　威一郎

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要 （共著の場合は全員の著者名を記載） （共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
日本史概論 Ⅰ日本文化史研究 宗教学 社会概論	【著書】 1.和田神社と和田岬	単	平成 27 年 7 月	和田神社	131	本書は和田神社小史、和田岬の歴史と信仰、和田岬を訪れた人々の 3 章からなる。和田神社小史では和田神社が鎮座した年の推定、江戸時代の氏子論争、近代における神社の変容について考察した。和田岬の歴史と信仰と和田岬を訪れた人々では一般読者にわかりやすく郷土の歴史を紹介した。
日本史概論 Ⅰ日本文化史研究 宗教学 社会概論	2（歴史コラム） 神戸市における市民祭の成立と展開	単	平成 25 年 3 月	都市政策	2	公益財団法人神戸都市問題研究所に依頼を受け、研究所の季刊誌である『都市政策』に毎号連載されている歴史コラムに神戸市の市民祭について執筆した。昭和八年に誕生した神戸市の市民祭が戦前、戦中、戦後とどのような変遷を辿ってきたか要点をまとめた。

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【その他（講演や発表）】 1 講演 「みなとの祭」について	単	平成 25 年 9 月	都市問題研究所	都市問題研究所が行っている定例の歴史研究会で、「みなとの祭」を中心に神戸市の市民祭や博覧会について時代背景を踏まえつつ、研究発表を行った。特に戦前の郷土意識の高まりと市民祭の誕生が密接な関係を持つことについて、指摘した。
2【研究発表】 神道にみられる渡来文化の影響～シルクロードの終着点、日本の視点から～	単	平成 29 年 11 月	関西学院大学シルクロード研究センター 国際シンポジウム	古代の神道において、主にシルクドードを経由して伝えられた文化に着目し発表した。日本独自の宗教と考えられる神道が成立期において外来文化の影響を受けていたことを指摘した。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名 竹安 知枝

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
初等教科教育法Ⅸ（体育）	（著書） 1.『これならわかる！健康科学入門』	単	2013 年 6 月	開成出版社（73 頁）	栄養・運動・睡眠・免疫・病気などに関する基礎知識と健康に影響を与える要因について記した書籍である。（全頁数 73 頁） 神戸海星女子学院大学の「健康科学」の科目において、テキストとして使用した。また大阪成蹊短期大学の専門演習Ⅱの科目にて使用した。
	2.『小学校教諭をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク	共	2014 年 4 月	開成出版社（68 頁）	第6章「健康」を担当（pp.55-64）（全頁数68頁、樋口勝一編） 小学校教諭を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。
	3.『子どもの保健と安全』	共	2020 年 3 月	教育情報出版（192 頁）	（再掲のため、略）
	（学術論文） 1.遊びの教育的意義と現状―幼児期の外遊びを中心として―	単	2013 年 7 月	芦屋大学論叢（第 59 号）pp.35-43	教育的観点から、子どもの遊びについて記し、子どもたちの遊びの現状を調査し明らかにすることを通して、現在の子どもたちを取り巻く環境を考察し、子どもにとっての遊びの重要性について記した論文である。
	2.児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共（代表）	2016 年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 13 号）pp.37-41	児童期の遊びの好み（室内遊びが好きだったか・外遊びが好きだったか）が、食習慣と体育や運動に対する好き・嫌いに与える影響について兵庫県下の女子大学生を対象にアンケート調査を実施し考察した。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）

	3. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価（好き・嫌い）に与える影響	単	2018 年 11 月	芦屋大学論叢(第 70 号) pp.23-30.	大阪市内の女子短期大学生を対象に児童期の遊び（外遊びの頻度）と小学校体育やその後（現在）の運動に対する主観的評価（好き・嫌い）に関するアンケート調査を実施した。その結果、外遊びをほぼ毎日している場合、週に1・2回（もしくはほとんどしていない）場合と比較して、小学校体育とその後（青年期）の運動に対して好意的に捉える可能性が高い（p＜0.01）という事が示唆された。
	（教育実践記録等） 1.小学校時代における運動の「好き」・「嫌い」が体力に及ぼす影響について－女子大学生を対象に－	単	2014 年 6 月	兵庫教育大学 嬉野体育研究会『健』（第 36 号）pp.7-14	小学校時代に運動・体育が好きであったかどうかと、中学校・高校時代の運動の習慣との関連について検証し、また体育を好意的に捉えるために重要な要素について考察した。
	2.児童期の遊びの好みがその後の運動に対する主観（好き・嫌い）に与える影響	単	2017 年 6 月	兵庫教育大学 嬉野体育研究会『健』（第 39 号）pp.5-9	（再掲のため、略）
児童体育	（学術論文） 1.遊びの教育的意義と現状―幼児期の外遊びを中心として―	単	2013 年 7 月	芦屋大学論叢（第 59 号）pp.35-43	（再掲のため、略）
	2.児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共（代表）	2016 年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 13 号）pp.37-41	（再掲のため、略）
	3. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価（好き・嫌い）に与える影響	単	2018 年 11 月	芦屋大学論叢(第 70 号) pp.23-30.	（再掲のため、略）
	4.サッカースクールに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	共	2018 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第 10 巻) pp.101-108.	サッカースクール（週２回）に所属する幼児（その他のスポーツは実践していない）を対象に、足趾把持筋力が体力因子（スピード・静的バランス・反応性・敏捷性等）との関連性につい

					て調査した。その結果、足趾把持筋力とスピード・反応性・バランスに関する体力因子との関連性が認められた。（辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・臼井達矢）
	5.障がい者（こども）のスポーツイベントの普及に向けて	単	2019年3月	日本産業科学学会 研究論叢 第24号 pp.51-56.	障がい者（児）スポーツの今後の普及・促進に向け、有効的なイベント・取り組み等を行っていくために重要とされる要素について検討した。障がい者スポーツ施設で実施された、障がい者（こども）のスポーツイベントにおいて 41 名を対象にアンケート調査を実施した。そして、アンケート結果について多角的な観点から考察し、今後の障がい者スポーツのイベント開催に向けて、重要な要素と課題について示した。
	6.児童における姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連	共	2021年4月	大阪成蹊大学研究紀要 第 7 号 P221-225	立つ動作や歩く動作時に必要とされる足趾把持筋力に注目し小学生 2 0 名の足趾把持筋力と姿勢制御能力の指標である重心動揺性を測定した。その 結果から足趾把持筋力と姿勢制御能力との関連について検討した。この結果より、姿勢制御能力向上のために、足趾把持筋力を強化することが有効であることが示唆された。（松尾貴司・辻慎太郎・永井伸人・織田恵輔・竹安知枝・臼井達矢）
	（教育実践記録等） 1.小学校時代における運動の「好き」・「嫌い」が体力に及ぼす影響について－女子大学生を対象に	単	2014年6月	兵庫教育大学 嬉野体育研究会『健』（第 36 号） pp.7-14	（再掲のため、略）
幼児体育	（学術論文） 1.幼稚園児を対象に体力の向上を目的とした運動遊びに関する一考察	共（代表）	2012年3月	神戸海星女子学院大学研究紀要（第50 号）pp.61-67	幼児の体力向上に寄与する運動遊びについて多種多様な運動遊びを実践し、運動介入前後に体力測定（筋力・巧緻性・柔軟性など）を実施し、考察した論文である。（竹安知枝・山本忠志・岡田隆造）
	2.幼児の運動能力	単	2013年1月	芦屋大学論	幼児期における各運動能力

	の要素間における関連性についての一考察			叢（第 58 号）pp.43-54	（筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など）の要素間の関連（相関関係）について体力測定を行い、結果について男女別に考察した。
	3.幼児の運動能力の性差に関する一考察	単	2013 年 3 月	神戸海星女子学院大学研究紀要（第 51 号）pp.39-44	幼児（年長児を対象）の運動能力（筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など）において、各要素の性差について調査し考察を行なった論文である。
	4.体力の向上を目的とした幼児の運動遊びに関する研究―縄跳び遊びを通して―	単	2013 年 9 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究（第 5 巻）pp.29-38	効率的に短期間で、幼児の運動能力を伸ばす運動遊びを検討した研究である。縄跳び遊びに着目し、短期間（約 40 日間）での縄跳び遊びの効果について検証した論文（原著）である。
	5.幼児の外遊びに関する一考察	単	2014 年 3 月	神戸海星女子学院大学研究紀要（第 52 号）pp.25-29	幼児期における遊びの重要性と子どもの遊びの現状（室内遊びを中心としているか外遊びを中心としているか）について考察し、遊びと社会性の発達の観点からも考察した論文である。
	6.幼少期の遊びがその後の運動習慣・体力に与える影響についての一考察	単	2014 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究（第 6 巻）pp.43-51	幼少期の遊び（室内遊び・外遊び）の習慣が、その後の運動習慣にどのように影響を与え、またどのような体力要素（筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など）に影響を与えるかについて検証した論文（原著）である。
	7.遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察－年長児を対象に－	共（代表）	2016 年 4 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究（第8巻）pp.7-13	幼児期の遊びの好みが運動能力に及ぼす影響について、また子どもの居住環境（都市部と農村部）と体格との関連について考察した論文（原著）である。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司
	8.都市部と農村部における幼児の運動能力の比較 ～大阪市と姫路市の年長児を対象に	共（代表）	2017 年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 14 号）pp.81-84	都市部と農村部の幼児を対象に運動能力テストと保護者を対象にアンケート調査を実施た。その結果、農村部に居住している幼児は都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い水準であることが示唆された。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）

	9.サッカースクールに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	共	2018年3月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究（第10巻）pp.101-108.	（再掲のため、略）
	10.幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	共（代表）	2019年9月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究（第11巻第2号） pp.1-7.	大阪市内の短期大学の1年生236名を対象に幼少期の遊びに関するアンケート調査を実施し、遊びの好み（外遊び・室内遊び）と、遊びがその後の人格形成（性格・社会性）や体力に与える影響について考察し、幼少期の遊びの重要性について示した。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
保育内容Ⅰ（健康）	（著書） 1.『これならわかる！健康科学入門』	単	2013年6月	開成出版社（73頁）	（再掲のため、略）
	2.『幼稚園教諭・保育士をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク』	共	2013年9月	開成出版社（96頁）	第5章「子どもの健康」を担当（pp.75-90）（全頁数96頁、樋口勝一編）幼稚園教諭・保育士を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。
	3.『生活事例からはじめる－保育内容－健康』	共	2016年3月	青踏社（208頁）	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章1節「遊びの実際」（pp.58-70）と2節「健康な生活習慣の自立とリズム」（pp.79-95）担当（全208頁中、計30頁）。「保育内容健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。（徳安敦他編著 著者竹安知枝 他）
	4.『保育・教職実践演習 ―わたしを見つめ、求められる保育者になるために―』	共	2017年10月	ミネルヴァ書房（190頁）	保育内容の全領域から、保育における現在の課題に至るまで、具体的に示した書籍であり、複数の大学で（保育・教職実践演習の科目において）テキストとして採択されている。 保育内容「健康」の領域について（pp.20-21）担当した。（全頁数190頁、寺田恭子・榊原志保・高橋一夫編著）

	5.『生活事例からはじめる－保育内容－健康』	共	2018年3月	青踏社 （222頁）	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章「健康な生活習慣」pp.90-106（17頁）を担当。「保育内容　健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。全222頁。（近藤幹夫監修著者竹安知枝　他）
	6.『子どもの保健と安全』	共	2020年3月	教育情報出版 （192頁）	（再掲のため、略）
	（学術論文） 1.遊びの教育的意義と現状―幼児期の外遊びを中心として―	単	2013年7月	芦屋大学論叢（第59号）pp.35-43	（再掲のため、略）
	2.幼少期の遊びがその後の運動習慣・体力に与える影響についての一考察	単	2014年3月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究（第6巻）pp.43-51	（再掲のため、略）
	3.遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察－年長児を対象に－	共（代表）	2016年4月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究（第8巻）pp.7-13	（再掲のため、略）
	4.幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	共（代表）	2019年9月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究（第11巻第2号） pp.1-7.	（再掲のため、略）
	（教育実践記録等） 1.「子どもの頃の体験が大人になってどのような影響を及ぼすか」に関する調査 ～未来へはばたく子どもたちのために～	共	2013年3月	兵庫県青少年団体連絡協議会（全32頁）	（再掲のため、略）
	2.環境が幼児の運動能力に与える影響　～幼児の居住環境に着目して～	単	2018年6月	兵庫教育大学 嬉野体育研究会『健』（第40号）	大阪市の都市部と姫路市の農村部に居住する幼児を対象に、運動能力テストと保護者を対象としたアンケート調査を実施た。その結果、農村部に居住する幼児は、都市部に居住している幼児と比べて運動能

					力が高い傾向にあることが示唆された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1.『共感と思いやりの心理』	共	2013 年 4 月	開成出版社	第2章(2)「子どもの身体による感情表現」を担当（pp.8-11）（全頁数56頁、 澤田瑞也、竹安知枝編）援助職を目指す人のための心理（共感と思いやり）についての指導本である。神戸海星女子学院大学の心理系科目においてテキストとして採用されている。
2.『これならわかる！健康科学入門』	単	2013 年 6 月	開成出版社	栄養・運動・睡眠・免疫・病気などに関する基礎知識と健康に影響を与える要因（主に飲酒・喫煙など）について記した書籍である。（全頁数 73 頁） 神戸海星女子学院大学の「健康科学」の科目において、テキストとして使用した。また大阪成蹊短期大学の専門演習Ⅱの科目にて使用した。
3.『幼稚園教諭・保育士をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク』	共	2013 年 9 月	開成出版社	第5章「子どもの健康」を担当（pp.75-90）（全頁数96頁、樋口勝一編） 幼稚園教諭・保育士を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。
4.『小学校教諭をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク』	共	2014 年 4 月	開成出版社	第6章「健康」を担当（pp.55-64）（全頁数68頁、樋口勝一編）小学校教諭を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。
5.『レジリエンスの心理』	共	2014 年 9 月	開成出版社	第 9 章「レジリエンスと運動」を担当。（pp.35-38）（全頁数 42 頁、澤田瑞也、中植満美子編）トラウマや重い病気からの精神的回復や運動が精神に与える影響などについて記したテキストである。神戸海星女子学院大

				学の心理系科目においてテキストとして採用されている。
6.『生活事例からはじめる－保育内容－健康』	共	2016 年 3 月	青踏社	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第 4 章 1 節「遊びの実際」（pp.58-70）と2節「健康な生活習慣の自立とリズム」（pp.79-95）担当（全 208 頁中、計 30 頁）。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。（徳安敦他編著 著者：竹安知枝 他）
7.『保育・教職実践演習 ―わたしを見つめ、求められる保育者になるために―』	共	2017 年 10 月	ミネルヴァ書房	保育内容の全領域から、保育における現在の課題に至るまで、具体的に示した書籍であり、複数の大学で（保育・教職実践演習の科目において）テキストとして採択されている。 保育内容「健康」の領域について（pp.20-21）担当した。（全頁数 190 頁、寺田恭子・榊原志保・高橋一夫編著）
8.『生活事例からはじめる－保育内容－健康』	共	2018 年 3 月	青踏社	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第 4 章「健康な生活習慣」pp.90-106（17 頁）を担当。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。全 222 頁。（近藤幹夫監修 著者：竹安知枝 他）
9.『大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共（ 編著）	2019 年 4 月	開成出版社	大学生対象（教育系学部所属の学生用）の初年次教育科目で使用するテキストである。幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援教諭・保育士を目指すための重要な要素に関すること、また基礎学力を身に付けるための内容となっている。全 75 頁。Ⅰ－1、Ⅱ－1、Ⅱ－3 計 16 頁担当。（笠原清次・渡康彦 監修、石田愛子・竹安知枝 編著）
10.『子どもの保健と安全』	共	2020 年 4 月	教育情報出版	子どもの心身の健康（生理機能・運動機能の発達など）と保健（病気の予防と手当・感染症対策・保健指導）、安全管理等に関する事柄について記された書籍であり、「子どもの保健」関連科目の大学生用のテキストとして、複数の大学において使用予定。（全 192 頁）第 1 章 3 節と

				第 6 章 1 節の計 4 頁を担当。（高内正子編著、著者：竹安知枝他）
【学術論文】 1.幼稚園児を対象に体力の向上を目的とした運動遊びに関する一考察	共（代表）	2012 年 3 月	神戸海星女子学院大学研究紀要（第 50 号）pp.61-67	幼児の体力向上に寄与する運動遊びについて多種多様な運動遊びを実践し、運動介入前後に体力測定（筋力・巧緻性・柔軟性など）を実施し、考察した論文である。（竹安知枝・山本忠志・岡田隆造）
2.幼児の運動能力の要素間における関連性についての一考察	単	2013 年 1 月	芦屋大学論叢（第 58 号）pp.43-54 **査読あり**	幼児期における各運動能力（筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など）の要素間の関連（相関関係）について体力測定を行い、結果について男女別に考察した論文（調査報告書）である。
3.幼児の運動能力の性差に関する一考察	単	2013 年 3 月	神戸海星女子学院大学研究紀要（第 51 号）pp.39-44	幼児（年長児を対象）の運動能力（筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など）において、各要素の性差について調査し考察を行なった論文である。
4.遊びの教育的意義と現状―幼児期の外遊びを中心として―	単	2013 年 7 月	芦屋大学論叢（第 59 号）pp.35-43 **査読あり**	教育的観点から、子どもの遊びについて記し、子どもたちの遊びの現状を調査し明らかにすることを通して、現在の子どもたちを取り巻く環境を考察し、子どもにとっての遊びの重要性について記した論文である。
5.体力の向上を目的とした幼児の運動遊びに関する研究―縄跳び遊びを通して―（**原著論文**）	単	2013 年 9 月	日本幼児体育学会幼児体育学研究(第 5 巻)pp.29-38 **査読あり**	効率的に短期間で、幼児の運動能力を伸ばす運動遊びを検討した研究である。縄跳び遊びに着目し、短期間（約 40 日間）での縄跳び遊びの効果について検証した論文（原著）である。
6.運動の好き嫌いと体力の関連性についての一考察	単	2014 年 1 月	芦屋大学論叢（第 60 号）pp.63-72 **査読あり**	運動に対する主観的評価（好き・嫌い）と体力（筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など）との関連性について、103 名を対象に体力測定とアンケート調査を実施し考察した論文（調査報告）である。
7.幼児の外遊びに関する一考察	単	2014 年 3 月	神戸海星女子学院大学研究紀要(第 52 号) pp.25-29	幼児期における遊びの重要性と子どもの遊びの現状（室内遊びを中心としているか外遊びを中心としているか）について考察し、遊びと社会性の発達の観点からも考察した論文である。

8.幼少期の遊びがその後の運動習慣・体力に与える影響についての一考察（原著論文）	単	2014 年 3 月	日本幼児体育学会幼児体育学研究(第 6 巻)pp.43-51 査読あり	幼少期の遊び（室内遊び・外遊び）の習慣が、その後の運動習慣にどのように影響を与え、またどのような体力要素（筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など）に影響を与えるかについて検証した論文（原著）である。
9.子どもの頃の体験がその後に及ぼす影響について －遊びの体験を中心に－	単	2014 年 7 月	芦屋大学論叢（第 61 号）pp.77-86 査読あり	20～60 歳代の男女 250 名を対象に「子どもの頃の体験が現在どのような事に役立っているか」についてアンケート調査を行い、子どもの頃の遊びの効用について考察を行った論文（研究ノート）である。
10.運動ストレスが及ぼす口腔内抗菌性ペプチドおよび虫歯菌への影響	共	2014 年 12 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 24 号 pp.1-4 査読あり	運動ストレスに伴う口腔内免疫機能の変化と虫歯菌活性との関連について検討したものであり、唾液抗菌性ペプチド群である HBD-2 濃度は、運動終了 6 時間後、24 時間後に減少し、虫歯菌に対する唾液抗菌能力が低下することが示唆された。（臼井達矢・辻慎太郎・織田恵輔・竹安知枝）
11.スポーツの重要性と普及に関する一考察 ―テニスに着目して―	共（代表）	2015 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 12 号）pp.31-34	スポーツの重要性と普及に関して、生涯スポーツであるテニスに着目し、大学生を対象にアンケート調査を実施し、考察を行なった。結果、テニスの普及のために重要な要因について示唆された。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎）
12.高強度長時間運動に伴う口腔内膜免疫および虫歯菌活性度の変化	共	2015 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 12 号）pp.14-19	高強度長時間運動に伴う口腔内免疫の変化と虫歯菌活性の関連性について検討した論文である。（臼井達矢・辻慎太郎・織田恵輔・竹安知枝）
13.体力と注意機能の関係性	共	2015 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 12 号）pp.20-24	体力（運動を行い体力を高めること）と注意機能との関連性について検討した論文である。（織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・臼井達矢）
14.遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察－年長児を対象に－（原著論文）	共（代表）	2016 年 4 月	日本幼児体育学会幼児体育学研究(第 8 巻) pp.7-13 査読あり	幼児期の遊びの好みが運動能力に及ぼす影響について、また子どもの居住環境（都市部と農村部）と体格との関連について考察した論文（原著）である。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵

				輔・辻慎太郎・松尾貴司）
15.児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共（代表）	2016 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 13 号）pp.37-41	児童期の遊びの好み（室内遊びが好きだったか・外遊びが好きだったか）が、食習慣と体育や運動に対する好き・嫌いに与える影響について兵庫県下の女子大学生を対象にアンケート調査を実施し考察した。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
16.6 ヶ月間の中等度運動トレーニングが口腔内粘膜免疫および虫歯菌活性に及ぼす影響	共	2016 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 13 号）pp.1-5	中等度のトレーニングを6ヶ月間実施し、それが口腔内の免疫と虫歯菌の活性にどのような影響を与えるかについて調査した。その結果 6 ヶ月間の定期的な運動実践はこれらに影響を与えることが示唆された。（臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・織田恵輔・竹安知枝）
17.加齢による TrailMaking Test の変化	共	2016 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 13 号）pp.13-18	Trail Making Test（TMT）は注意の探索性、選択や転換性を評価する尺度として用いられており、加齢と注意力との関連性について、これを用いて調査した。その結果、TMT の測定値は加齢と共に延長すること（これらの関係性について）が示唆された。（織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾貴司・臼井達矢）
18.長距離マラソンランナーにおける唾液抗菌性ペプチドと虫歯菌および上気道感染症との関連	共	2016 年 12 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 26 号 pp.1-4 査読あり	マラソントレーニングを行っているアスリートを対象に唾液 HBD－2 濃度を測定するとともに、その上清の存在下で培養した場合の菌の発育程度と上気道感染の発生頻度を調べ、それらの関連性について考察した。（臼井達矢・永井伸人・辻慎太郎・竹安知枝）
19.都市部と農村部における幼児の運動能力の比較～大阪市と姫路市の年長児を対象に～	共（代表）	2017 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要（第 14 号）pp.81-84	都市部と農村部の幼児を対象に運動能力テストと保護者を対象にアンケート調査を実施した。その結果、農村部に居住している幼児は都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い水準であることが示唆された。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
20.高強度運動による口腔内抗菌性ペプチドの変化と	共	2018 年 3 月	教育医学第 63 巻 3 号 査読あり	唾液抗菌性ペプチドに対する一過性の高強度運動の影響と

神経内分泌応答との関連				ストレスホルモンとの関連性について検討した。その結果、一過性の高強度運動は唾液抗菌性ペプチドを有意に増加させるが、ストレスホルモンであるコルチゾールの分泌に伴い、その分泌が抑制されることが示唆された。（臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝）
21.障がい者スポーツの普及促進に向けた取り組みに関する一考察 ～「近畿アンリミテッド・パラ陸上（ナイター）」における国内初の試みに着目して～	共（代表）	2018 年 3 月	芦屋大学論叢（第 69 号）pp.49-60. 査読あり	国内初の 3 つの試み（障がいの有無に関わらず参加が可能・夏のナイターでの開催・民間からの出資 100%により実施）により開催された「近畿アンリミテッド・パラ陸上」に着目し、参加選手に大会の有用性について調査を実施した結果、この3つの試みにおける大会の有用性について示唆され、今後の障がい者スポーツを普及促進させるための一助を得ることができた。（竹安知枝・北林直哉・織田恵輔）
22.サッカースクールに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	共	2018 年 3 月	日本幼児体育学会幼児体育学研究（第 10 巻） pp.101-108. 査読あり	サッカースクール（週 2 回）に所属する幼児（その他のスポーツは実践していない）を対象に、足趾把持筋力が体力因子（スピード・静的バランス・反応性・敏捷性等）との関連性について調査した。その結果、足趾把持筋力とスピード・反応性・バランスに関する体力因子との関連性が認められた。 （辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・臼井達矢）
23.子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価（好き・嫌い）に与える影響	単	2018 年 3 月	芦屋大学論叢（第 70 号）pp.23-30. 査読あり	大阪市内の女子短期大学生女子 236 名を対象に児童期の遊び（外遊びの頻度）と小学校体育やその後（現在）の運動に対する主観的評価（好き・嫌い）に関するアンケート調査を実施した。その結果、外遊びをほぼ毎日している場合、週に 1・2 回（もしくはほとんどしていない）場合と比較して、小学校体育とその後（青年期）の運動に対して好意的に捉える可能性が高い（$p<0.01$）という事が示唆された。
24.中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共	2019 年 2 月	スポーツサイエンス第 13 号（1） pp.17-32. 査読あり	中学生女子バレーボール選手を対象に、スパイク速度と身体特性や体力測定を行い、身体特性や体力がスパイク速度に与

				える影響について検討した。その結果、体重および BMI とスパイク速度との間に有意な相関が認められた。また、体力とスパイク速度との連については、立幅跳びとスパイク速度との間に有意な相関が認められ、立ち幅跳びがスパイク速度に影響を及ぼす重要な体力因子であることが示唆された。（青木敦英・石川俊・竹安知枝）
25.障がい者（こども）のスポーツイベントの普及に向けて	単	2019 年 3 月	日本産業科学学会研究論叢 第 24 号 pp.51-56. **査読あり**	障がい者スポーツの今後の普及・促進に向け、有効的なイベント・取り組み等を行っていくために重要とされる要素について検討した。障がい者スポーツ施設で実施された、障がい者（こども）のスポーツイベントにおいて41 名を対象にアンケート調査を実施した。そして、アンケート結果について多角的な観点から考察し、今後の障がい者スポーツのイベント開催に向けて、重要な要素と課題について示した。
26.大学の特徴を生かした教員への就職支援に関する一考察－芦屋大学での教員採用試験対策講座をもとに－	共	2019 年 7 月	芦屋大学論叢（第 71 号）pp.21-30. **査読あり**	小規模大学（定員 1000 名）の大学における教員採用試験対策講座への参加を促す方策について取り上げ、考察することで、小規模大学における教員就職支援のための取り組み方法について検討した。（笠原清次・竹安知枝・森谷享・青木敦英・若杉祥太・石川峻・辻尚志・雄倉春来）
27.幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	共（代表）	2019 年 9 月	日本幼児体育学会幼児体育学研究（第 11 巻第 2 号） pp.1-7. **査読あり**	大阪市内の短期大学の1年生 236 名を対象に幼少期の遊びに関するアンケート調査を実施し、遊びの好み（外遊び・室内遊び）と、遊びがその後の人格形成（性格・社会性）や体力に与える影響について考察し、幼少期の遊びの重要性について示した。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
28. 障がい者のスポーツイベント関する一考察	共（代表）	2019 年 12 月	アダプテッド体育・スポーツ学研究 第 5 号 pp.18-21	民間出資 100％で実施された国内初の障がい者スポーツイベントに関して、協賛企業やボランティアから見た有用性についてアンケート調査を実施し考察し

				た。その結果、今後の障がい者スポーツイベントを活性化させる手がかりを得ることができた。（竹安知枝・青木敦英・石川峻）
29.要支援・要介護高齢者の運動機能改善に向けたRedcoRd 運動の効果について	共	2019 年 12 月	神戸医療福祉大学研究紀要 20 巻(1) pp.41-4	RedcoRd を用いた運動療法が要介護高齢者の運動能力に与える影響について検討した。調査方法は、41 名の要介護者 41 名を対象に 1 回 60 分の RedcoRd を用いた運動を週に 2 回 1 年間実施した。そして、介入前後に運動機能を評価した結果、この運動は運動機能の改善に効果的であることが示された。（辻慎太郎・織田恵輔・永井伸人・竹安知枝・臼井達矢・涌井忠昭）
30.1 年間の中等度運動トレーニングの実践が口腔内粘膜免疫 および虫歯菌活性に及ぼす影響	共	2020 年 2 月	日本教育医学会 65 巻 3 号 pp.184-190. **査読あり**	中等度強度の運動トレーニングの実践が口腔内局所免疫機能に及ぼす影響について検討した。その結果、唾液 HBD-2 は 35.9±7.4 から 60.4±8.7 pg/mL と有意に増加し、虫歯菌に対する菌抑制効果は介入後に有意に高まった。1年間の中等度強度での運動トレーニングの実践は安静時の唾液 HBD-2 濃度を高め、さらに虫歯菌抑制効果が有意に高まることが示唆された。（臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔）
31.ミニテニスのイメージに関する調査－大学生を対象に－（調査報告）	共（代表）	2020 年 3 月	芦屋大学第論叢第 72 号） pp.79-88 **査読あり**	ミニテニスの普及・活性化に向けての手がかりを得ることを目的に、大学生 103 名を対象に認知度とイメージに関するアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスの認知度に関しては、低い結果であったが、このスポーツに関して肯定的なイメージを持っている人の割合が多いことがわかった。また、「健康的」「楽しい」「ルールが簡単」の 3 つのキーワードが普及につながる可能性があると考えられた。（竹安知枝・青木敦英・臼井達矢）
32.ミニテニスの意識に対する調査－経験者を対象に－	共（代表）	2020 年 9 月	芦屋大学論叢（第 73 号） pp.97-105 **査読あり**	ミニテニスの経験者男女 55 名（40～80 歳代）を対象に、このスポーツに対する意識についてアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスに対して「健康

				に良く安全に実施でき、かつ経済的である」と捉えている人が大半を占めていることが明らかになり、今後の我が国における生涯スポーツの一つとして、ミニテニスが普及していくことが望ましいと考えられる。 （竹安知枝・青木敦英・石川峻・臼井達矢）
33.バスケットボール競技におけるクォーターごとの得点傾向と勝敗との関係 ー関西学生バスケットボールリーグを対象としてー	共	2020 年 9 月	芦屋大学論叢（第 73 号）pp.1-7 査読あり	バスケットボール競技における試合の「流れ」について、4 つのクォーターの得点傾向から明らかにすることを目的として調査を実施した。その結果、バスケットボールの競技特性として 2Q＜4Qの得点傾向となることを明らかにするとともに、競技レベルによって勝敗と関係するクォーターが異なることが示唆された。これらの知見は今後の試合に活かすことで勝率を高めることが期待できる。 （青木敦英・石川峻・竹安知枝）
34.中年女性におけるオーラルフレイル予防に向けた水中運動トレーニングの有効性（原著論文	共	2021 年 3 月	日本教育医学会 第 66 巻 3 号 pp.202-210, 査読あり	口腔内免疫機能を高めると考えられる水中運動トレーニングに焦点を当て、口腔局所免疫機能およびストレプトコッカスミュータンス増殖阻害効果に対する水中運動トレーニングの影響を調査した。 （臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔）
35.テニスの UTR(Universal Tennis Ratings）システムについて	単	2021 年 3 月	日本産業科学学会研究論叢 第 26 号 pp.71-74 査読あり	テニスの UTR(Universal Tennis Ratings）システム（テニスのレーティングシステム、いわゆる選手の「格付け」を示すものであり、アメリカを中心にヨーロッパに広まっている。日本を含むアジアでは、まだあまり認知されていない）について取り上げ、国内の普及に向けた課題について考察した。
36.男子大学生における足趾把持筋力と動作遂行能力の関係 ： 走力、跳躍力、敏捷性およびバランス能力に着目して	共	2021 年 3 月	関西大学大学院人間健康研究科院生協議会 人間健康研究論集(4)pp.1-20	足趾把持筋力と動作遂行能力である、走力および跳躍力、敏捷性との間に有意な相関が認められた。以上の結果から、男子大学生における足趾把持筋力は、動作遂行能力である走力、跳躍力および敏捷性と関連があることが明らかとなり、スポ

				一ツにおいて欠かせない体力の一つであることが確認された。（辻慎太郎・臼井達矢・松尾貴司・竹安知枝・織田恵輔・涌井忠昭）
37.児童における姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連	共	2021 年 4 月	大阪成蹊大学研究紀要第 7 号 P221-225	立つ動作や歩く動作時に必要とされる足趾把持筋力に注目し小学生 20 名の足趾把持筋力と姿勢制御能力の指標である重心動揺性を測定した。その結果から足趾把持筋力と姿勢制御能力との関連について検討した。この結果より、姿勢制御能力向上のために、足趾把持筋力を強化することが有効であることが示唆された。（松尾貴司・辻慎太郎・永井伸人・織田恵輔・竹安知枝・臼井達矢）
【その他（講演や発表）】 （学会発表） 1.運動能力の向上を目指した運動遊びに関する研究	共（代表）	2011 年 8 月	日本幼児体育学会第 7 回大会 研究発表抄録集 p.62	幼児においての多種目（鉄棒・縄跳び・ミニハードル・ボール遊びなど）による運動遊びが、どのように運動能力の向上に寄与するかについての実践研究である。（竹安知枝・岡田隆造）
2.年長児における調整力・筋力・柔軟性の関係について	単	2012 年 8 月	日本体育学会 第 63 回大会 大会予稿集 p.289	幼児の運動能力の要素間における関連性について（筋力・瞬発力・調整力・柔軟性などの相関関係において検討した）調査し、考察した。
3.幼児の運動能力と体格の関連性についての一考察	単	2012 年 8 月	日本教育学会 第 71 回大会 大會研究発表要項 pp.322-323	幼児の体格（BMI）と運動能力（筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など）の関連性について調査し、考察した。
4.体力の向上を目指した幼児の運動遊びに関する研究	単	2012 年 9 月	日本幼児体育学会第 8 回大会 研究発表抄録集 pp.42-43	短期間での縄跳び遊びの実践が運動能力（筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など）に与える影響について検討した。
5.祖父母との世代間交流と女子大学生の生活・運動習慣	共（代表）	2012 年 10 月	日本世代間交流学会 第 3 回大会 全国大会要旨集 pp.17-18	兵庫県下の女子大学生を対象に、現在の生活習慣と祖父母との関係（世代間における交流）について調査を行い、考察した。（竹安知枝・樋口勝一）
6.未来へはばたく子どもたちのために	共	2013 年 5 月	兵庫県青少年団体連絡協議会・兵庫県青少年本部（青少年フォーラム）	子どもの頃の体験が、その後の生活習慣、人間形成に与える影響についての調査報告会である。（速水順一郎・清水勲夫・

				樋口勝一・竹安知枝）
7.保育士養成校における学習支援の試み（1）	共	2013 年 9 月	全国保育士養成協議会第 52 回研究大会研究発表論文集 pp.542-543	保育士を目指す学生に対して、一般教養を習得させるための試みについて、兵庫県下の女子大学生を対象とした研究である。（中田尚美・浅井由美・尾﨑秀夫・竹安知枝・樋口勝一）
8.保育者養成におけるリメディアル教育の取り組み事例	共	2014 年 3 月	第 20 回大学教育研究フォーラム	保育者養成に関わる科目において、一般教養や子どもに関する基礎知識の習得を目指した、授業の内容について検討を行なった。
9.児童期の体験とその効用について －遊びを中心に－	単	2014 年 8 月	日本幼児体育学会第 10 回大会 研究発表抄録集 p.80	兵庫県下全域において成人を対象に、児童期の様々な体験が、その後の社会性にどのような影響を及ぼしているかについて、アンケート調査を実施し、考察を行なった。
10.6 ヶ月間の運動トレーニングが一過性の運動ストレス時の口腔内免疫機能の低下を予防するか？	共	2014 年 8 月	日本教育医学会 第 62 回大会	一過性の運動ストレス時の唾液免疫機能の低下を予防するために、6 ヶ月間の運動トレーニングを行い、定期的な運動実践がストレス時の唾液免疫機能の低下を抑制するかどうかを検討した。（臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎）
11.運動に対する主観的評価と運動能力との関連 －小学校体育に着目して－	共（代表）	2014 年 9 月	日本体力医学 第 69 回大会 予稿集 p.181	運動に対する主観的評価（好き・嫌い）と運動能力との関連、また小学校体育に対する主観がその後の運動の対する主観及ぼす影響についての研究である。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎）
12.運動ストレスに伴う口腔内免疫機能と虫歯菌活性との関連	共	2014 年 9 月	日本体力医学会 第 69 回大会 予稿集 p.228	運動によるストレスが、口腔内の免疫機能と虫歯菌の活性に与える影響に関する研究である。（臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎）
13.要支援・要介護高齢者における 3 分間パネル運動の有効性の検討	共	2014 年 9 月	日本体力医学会 第 69 回大会 予稿集 p.179	要支援・要介護高齢者に対し、3 分間のパネル（座位姿勢による足踏み動作）による運動を行い、その有効性について検討した。（辻慎太郎・臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝）
14.テニスの普及に関する重要な要素について	共（代表）	2014 年 12 月	日本テニス学会第 26 回大会抄録集 pp.100-101	生涯スポーツとしてテニスに注目し、テニスの普及に関して重要な要素についてアンケート調

				査を実施し考察を行なった。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎）
15.短期間の Terrasensa を用いた運動介入が要支援・要介護高齢者の転倒因子に及ぼす影響	共	2015 年 1 月	日本体力医学会第 29 回近畿地方大会	短期間における Terrasensa を使用した運動介入が、要支援・要介護高齢者の運動能力にどのように寄与し、その結果、転倒因子に与える影響について調査した研究である。（辻慎太郎・臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝）
16.運動ストレス時の口腔内免疫機能の低下を6ヶ月間の定期的な運動トレーニングで予防できるか？	共	2015 年 1 月	日本体力医学会第 29 回近畿地方大会	6 ヶ月間の定期的な運動トレーニングが、運動ストレス時の口腔内免疫機能の低下に対して、どのような効果を発揮するのかについて調査した研究である。（臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎）
17.きんたくん健幸体操が中高齢者の体力因子に及ぼす影響～川西市地域活性プロジェクト～	共	2015 年 8 月	日本教育医学会 第 63 回大会	川西市地域活性プロジェクトとして考案された、きんたくん健幸体操（ストッチ編・ウォーキング編・転倒予防編にてDVD作成担当）の実施により、この体操が中高齢者のバランス能力・注力の向上・反射神経の改善に効果であることが示唆された。（辻慎太郎・臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝）
18.現在の体力レベルに幼児期の外遊びが与える影響	共 （代表）	2015 年 9 月	日本体力医学会 第 70 回大会 予稿集 p.211	幼児期の外遊びがその後の運動習慣（中学校・高校時代の運動部の所属経験）と現在（大学）における運動能力に与える影響について、兵庫県下の女子大学生 103 名を対象に体力測定とアンケート調査を実施し考察した。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎）
19.中高齢者における敏捷性と注意機能との関連	共	2015 年 9 月	日本体力医学会 第 70 回大会 予稿集 p.214	50～70 歳代の男女 70 名を対象全身反応および注意課題測定（trail making test（TMT））を実施し考察を行なった結果、体力（敏捷性）注意機能に相関が認められた。このことから運動により敏捷性を向上させることは中高齢者の注意機能の改善・向上に効果的であることが示唆された。（織田恵輔・臼井達矢・竹安知枝・辻慎太郎）

20.1 年間のレッドコード運動が要支援・要介護高齢者の体力因子に与える影響	共	2015 年 9 月	日本体力医学会 第 70 回大会 予稿集 p.245	要支援・要介護高齢者男女計 41 名を対象にレッドコード運動を実施した。そして介入前後に体力測定を実施した。その結果その下肢筋力および歩行能力の項目において有意に改善されたことから、レッドコード運動が動的バランス能力の改善に有効であることが示された。（辻慎太郎・織田恵輔・竹安知枝・松尾貴司・臼井達矢）
21.週 1 回の実践でも運動ストレス時の口腔内免疫の低下を予防できるか？	共	2015 年 9 月	日本体力医学会 第 70 回大会 予稿集 p.271	一般家健常者 14 名を対象に調査を行なった（運動介入群 7 名（自転車運動を 1 回 60 分、週1回、6 ヶ月間）とコントロール群 7 名）。その結果、週 1 回の運動実践は、運動ストレス時の口腔内免疫を高め、翌日においてもその低下を予防することが示唆された。 （臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・上田真也・桂良寛・辻慎太郎・松尾貴司）
22.きんたくん健幸体操が注意機能及び全身反応時間・重心動揺性に及ぼす影響～家庭用エクササイズ DVD を用いた運動効果の検証～	共	2016 年 2 月	日本体力医学会第 30 回近畿地方会予稿集 p.5	地域高齢者において身近で継続できる運動を実践することが望まれている。そこで川西市で地域活性プロジェクトとして健康寿命の延伸に向けた運動プログラムを我々と共同開発し、その有効性について調査を行ない検証（重心動揺性・全身反応時間・TMT テストにより）したものである。その結果、それらの向上に有効であることが示唆された。（辻慎太郎・織田恵輔・竹安知枝・松尾貴司・臼井達矢）
23.高齢者における注意機能と体力の関係について	共	2016 年 2 月	日本体力医学会第 30 回近畿地方会予稿集 p.6	高齢者が転倒する要因は体力低下だけではなく、認知機能の1つである注意機能の低下や記憶力の低下なども関係していると考えられている。そこで注意機能の向上・改善のためにどのような運動が効果的かについて検討した。その結果 TMT と垂直跳び及び TMT と全身反応時間において相関関係が認められた。（織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾貴司・臼井達矢）
24.小学生の姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連	共	2016 年 2 月	日本体力医学会第 30 回近畿地方会予稿集 p.18	姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連性について探るために、小学生を対象に重心動揺

				生を測定し考察を行った。その結果、姿勢制御能力向上のためには足趾把持筋力の強化が有効である可能性が示唆された。（松尾貴司・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・臼井達矢）
25.児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する主観に与える影響	共（代表）	2016 年 5 月	兵庫体育・スポーツ科学学会 第 27 回大会発表抄録集 p.13	女子大学生 236 名を対象に、児童期に関するアンケート調査（遊びの好みと食習慣と運動に対する主観的評価について）を実施した。その結果、遊びと食習慣との関連性については明らかにできなかったが、児童期の遊びの好みがその後の運動対する主観に影響を与えている可能性が示唆された。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
26.長距離マラソンランナーにおける唾液抗菌ペプチドと虫歯菌および上気道感染症との関連	共	2016 年 6 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会第 26 回大会 抄録集 p.17	長距離マラソンランナーに着目し、高強度高頻度の運動トレーニングの実践が口腔内免疫環境に及ぼす影響について調査を実施し検討したものである。その結果、オーバートレーニングは口腔内の局所免疫機能を低下させることが示唆された。
27.中高年女性における 1 年間の運動実施頻度と口腔内局所免疫との関連 ～週1回の運動実践でもストレス時の口腔内免疫低下を予防できるか？～	共	2016 年 8 月	日本教育医学会 第 64 回大会 大会抄録集 p.62	口腔内免疫機能を高める有効な運動頻度明らかにするために女性 73 名を対象に唾液免疫成分および 1 年間の上気道感染症の罹患回数を測定した。その結果、高強度での運動実践は、口腔内免疫機能を低下させ、上気道感染症の罹患回数増加につながることが示唆された。（臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾貴司）
28.小学生における足趾把持筋力と走能力および重心動揺性との関連	共	2016 年 8 月	日本教育医学会第 64 回大会 大会抄録集 p50	小学生における足趾把持筋力が重心動揺（両足たち・片足立ち）および走能力（25m・50m）との関連について検討した結果、足趾把持筋力と走能力およびバランス能力において関連性が認められた。（辻慎太郎・松尾貴司・竹安知枝・織田恵輔・臼井達矢）
29.中学校・高校時代の運動部の所属経験とその後の体力との関連	共（代表）	2016 年 9 月	日本体力医学会 第 71 回大会 大会抄録集 p.130	思春期の運動経験がその後の体力に与える影響について 103 名の女子大学生を対象に体力測定とアンケート調査を実施し

				考察した。その結果、筋力と筋持久力の要素については、思春期の運動習慣が影響を与えている可能性が高いことが示唆された。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
30.1 年間の運動トレーニングが口腔内免疫機能および虫歯菌抑制に与える影響	共	2016 年 9 月	日本体力医学会 第 71 回大会 大会抄録集 p.257	1 年間の運動トレーニングが口腔内免疫機能および虫歯菌活性に及ぼす影響について検討した結果、1 年間の定期的な運動トレーニングの実践は、安静時の唾液 HBD-2 濃度を高め、さらに虫歯菌に対する筋の阻止能力が有意に高まることが示唆された。（臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾貴司・上田真也・桂良寛）
31.要支援・要介護高齢者の運動機能および日常生活動作能力の改善に向けた Redcord を用いた運動療法について	共	2016 年 9 月	日本体力医学会 第 71 回大会 大会抄録集 p.164	要支援・要介護高齢者の運動機能および日常生活動作能力の改善に向けたRedcordを用いた運動療法の有効性びついて検討した結果、Redcord を用いた運動プログラムは、介護予防の運動療法として有効なプログラムであることが示唆された。（辻慎太郎・松尾貴司・竹安知枝・織田恵輔・臼井達矢）
32.オーバートレーニングが口腔内局所免疫と虫歯菌増加に及ぼす影響	共	2017 年 8 月	日本教育医学会 第 65 回大会	大学陸上部に所属している長距離選手 20 名と比較対象として非アスリート 20 名を対象に安静時に唾液採取を行い口腔内免疫機能に関して調査を実施した結果、オーバートレーニングは口腔内局所免疫機能を著しく低下させることが示唆された。（臼井達矢・永井伸人・辻慎太郎・竹安知枝）
33.サッカークラブに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	共	2017 年 8 月	日本教育医学会 第 65 回大会	大阪府のサッカースクールに所属する幼児 20 名を対象に対体力測定や重心動揺（バランス能力）のテストを実施し、体力因子と足趾機能との関連性について検討した。その結果、足趾把持筋力が強い者ほどバランス能力・脚力が高いことが示された。（辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・臼井達矢）
34.幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	共 （代	2017 年 10 月	日本子ども学会第 14 回大会抄録集 p.37	幼少期の遊びの好み（外遊び・室内遊び）がその後の人格形

	表）			成（集中力・創造力・注意力・社会性など）に与える影響について大阪市内の女子大学生 236 名を対象にアンケート調査を実施し、遊びの好みと社会性との関連性について考察した。（竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
35.幼児期におけるキッズバイクの使用経験と運動能力との関連	共	2018 月 2 月	日本体力医学会第 32 回近畿地方会	幼児期のキッズンバイクの使用が運動能力に与える影響について、調査し考察した。その結果、キッズバイクの経験年数が多い者は、経験年数が少ない者と比較して、走能力や足趾機能・全身反応性などにおいて有意に高い水準であることが示唆された。（織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾貴司・臼井達矢・木村晴尚）
36.障がい者（こども）のスポーツイベントの普及に向けて	単	2018 月 8 月	日本産業科学学会第 24 回全国大会発表抄録集 pp.35-36.	障がい者（こども）のスポーツイベントの参加者 41 名（無作為抽出、保護者が回答）を対象にイベントに参加する際に重要視する事柄について調査を実施した。その結果、「身体を動かす内容」「自然遊び」「初心者でも楽しめる内容」「教育や発達に影響を与える内容」などについて重要視している保護者が多いということが明らかになった。
37.児童期における外遊びの多寡がその後の運動に対する主観的評価に与える影響	共（代表）	2018 月 9 月	日本体力医学会 第 73 回大会 大会抄録集 p.185	児童期の外遊び（頻度）と青年期の運動に対する主観的評価（好き・嫌い）との関連性について、女子大学生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、外遊び（頻度）が小学校体育に対する主観的評価に影響を与えていることが示唆され（p＜0.01）、またその後（青年期）の運動に対する主観的評価にも影響を与える可能性が高いということが示唆された（p＜0.01）。（竹安知枝・青木敦英・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
38.高齢者におけるオーラルフレイル予防に向けた運動療法の有効性の検討	共	2018 月 9 月	日本体力医学会 第 73 回大会 大会抄録集 p.178	地域在宅高齢者（女性 48 名）に対する週 1 回（3 ヶ月間）の健康運動教室がオーラルフレイル（口腔機能低下）予防に有効であるか検討した。その結果、自律神経バランスが整えられ、口

				腔内免疫機能が高まることが確認され、週１回の健康運動教室の開催は、オーラルフレイル予防に有効であることが示唆された。（臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔）
39.地域在宅高齢者に対する健康増進活動はオーラルフレイル予防に有効か？	共	2019 年 8 月	日本教育医学会第 67 回大会	地域在宅高齢者に対する週 1 回の健康増進活動（健康に関する学習・健康体操等を実施）がオーラルフレイル（口腔機能低下）に予防に有効であるかについて検討した。その結果、この実践は自律神経バランスを整えるとともに、口腔免疫機能や口腔機能を高めることが示され、オーラルフレイル予防に有効であることが示唆された。（臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔）
40.男子大学生における足趾把持筋力と動作遂行能力の関係－走力、跳躍力および敏捷性に着目して－	共	2019 年 8 月	日本教育医学会第 67 回大会	男子大学生の足趾把持筋力と動作遂行能力である走力、跳躍力および敏捷性の関係について、検討した。その結果、男子大学生（18～19 歳、23 名）において、足趾把持筋力と動作遂行能力（跳躍力・敏捷性）との間に有意な相関関係が認められた。（辻慎太郎・臼井達矢・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔・涌井忠昭）
41.障がい者のスポーツイベントに関する一考察	共（代表）	2019 年 9 月	日本体育学会 第 70 回大会 大会予稿集 p.138	国内初の 3 つの取り組み【［障害の有無に関係なく実施］［夏のナイター開催］［民間出資 100％］）】により行われた「パラ陸上」に着目し、ボランティア・スポンサー企業の視点より、大会の有用性について検討を行った。その結果、ボランティア・スポンサー企業の両者にとって好意的に捉えられ、さらにボランティアだけでなく協賛企業にとっても価値のあるイベントである可能性が高いということが推察された。（竹安知枝・青木敦英・石川峻）
42.バスケットボールにおける「流れ」と勝敗の関係―関西学生バスケットボール２部リーグについて―	共	2019 年 9 月	日本体育学会 第 70 回大会 大会抄録集 p.113	関西バスケットボール連盟 2 部リーグを対象にピリオドごとの得点の変化に着目し、その違いについて検討を行った。対象となった2部リーグの全試合（90 試合）についてピリオドごとの得

				点、得失点差を記録し、勝ちチームと負けチームで比較を行った。その結果、バスケットボール競技において「流れ」をつかむために、ハーフタイム以降のピリオドにおいて得点を積み重ねることが重要であると考えられた。（青木敦英・石川峻・竹安知枝）
43.ミニテニスの普及に関する一考察	共（代表）	2019 年 9 月	日本体力医学会 第 74 回大会 予稿集 p.281	「年齢・性別を問わず誰でも楽しめる」特徴を持ったスポーツである「ミニテニス」に着目し、このスポーツの認知度やイメージについて、大学生 103 名を対象に調査を行った。その結果、15％の人にしか認知されていないが、約 9 割の人は好意的なイメージを持っているということがわかった。今後は、学校体育や社会的なスポーツイベントで積極的に取り上げられることが普及に向けて効果的であると思われる。（竹安知枝・青木敦英・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）
44.中年女性におけるオーラルフレイル予防に向けた水中運動トレーニングの有効性	共	2019 年 9 月	日本体力医学会 第 74 回大会 予稿集 p.309	中年女性に対する水中トレーニングがオーラルフレイル（口腔機能低下）の予防に有効であるかを検討（唾液免疫成分・口腔内機能・自律神経活動の測定の実施により）した。その結果、週1回（計 12 回）の水中運動トレーニングの実践は、自律神経のバランスを整え、口腔機能を高めることが示唆され、オーラルフレイル予防に有効であることが示唆された。（臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔）
45.中高年女性の足趾把持筋力と体力因子の関係	共	2019 年 9 月	日本体力医学会 第 74 回大会 予稿集 p.294	中高年女性 40 名（60～89 歳）を対象に足趾把持筋力と体力因子（注意機能（TMT）・重心動揺・全身反応時間・垂直跳び）との関連性について調査した。その結果、中高年女性の足趾把持筋力と体力因子において、有意な相関関係が認められた。転倒防止に関係するバランス機能を高めるには、足趾把持へのアプローチが効果的であると考えられる。（辻慎太郎・臼井達矢・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔・涌井忠昭）

46.ミニテニスの意識に対する調査－経験者を対象に－	共	2020 年 6 月	兵庫体育・スポーツ科学学会 第 31 回大会 発表抄録集 p.8	ミニテニスの経験者男女 55 名（40～80 歳代）を対象に、このスポーツに対する意識についてアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスに対して「健康に良く安全に実施でき、かつ経済的である」と捉えている人が大半を占めていることが明らかになり、今後の我が国における生涯スポーツの一つとして、ミニテニスが普及していくことが望ましいと考えられる。（竹安知枝・青木敦英・石川峻・臼井達矢）
47.片脚および両脚のプライオメトリックトレーニングの効果に関研究 －大学バレーボール選手を対象として－	共	2020 年 6 月	兵庫体育・スポーツ科学学会 第 31 回大会 発表抄録集 p.1	関西学生バレーボール連盟 1 部に所属する女子バレーボール選手を対象に、片脚と両脚のそれぞれのプライオメトリックトレーニングを行うグループを設定し、トレーニング前後のジャンプ能力、パワー発揮能力の変化を調査し、いずれのトレーニング方法が効果的であるのか検証を行った。その結果、バレーボール選手のプライオメトリックトレーニングにおいて、片脚でのトレーニングを積極的に取り入れるべきであることが示唆された。（青木敦英・石川峻・竹安知枝）
48.テニスの UTR(Universal Tennis Ratings）システムについて	単	2020 年 8 月	日本産業科学学会 令和 2 年度 第 1 回関西部会 発表概要集 p.21	テニスの UTR(Universal Tennis Ratings）システム（テニスのレーティングシステム、いわゆる選手の「格付け」を示すものであり、アメリカを中心にヨーロッパに広まっている。日本を含むアジアでは、まだあまり認知されていない）について取り上げ、国内の普及に向けた課題について考察した。
49.女子大学生における低体重および痩せ願望と口腔内局所免疫機能との関連	共	2021 年 2 月	日本体力医学会第 35 回近畿地方会抄録集 p.6	女子大学生の低体重や痩せ願望と口腔内局所免疫機能との関連について検討した。その結果、女子大学生において低体重および痩せ願望が強い場合は心理的ストレスが高くなり、口腔内局所免疫機能である唾液 HBD-2 が低下していることが示された。（臼井達矢・竹安知枝・永井伸人・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）

50.テニピン（テニス型の教材）の普及に関する一考察	単	2021 年 3 月	日本幼児体育学会第 16 回大会研究発表抄録集 pp.56-57	テニピン（テニス型の教材）が、最近、小学校の体育授業で注目されてきている。現在は、関東を中心に小学校体育の授業において取り入れられてきている。そこで、テニピンのこれまでの実施状況をふまえ、今後の普及（全国の小学校体育授業での）に向けて考察した。
51. シニアテニス国際大会の参加者における運動継続に関わる実態調査	共（代表）	2021 年	日本体力医学会 第 74 回大会予稿集 p.263.	テニスに着目し、今後国内のスポーツ発展に向けた手がかりを得ることを目的とし調査した。その結果、今後の我が国における中・高年層のスポーツの発展に向けて、「楽しさ」「健康」「友達・仲間づくり」という要素を重視し、各種イベントを企画・運営していくことが有効であることを示唆した。（竹安知枝・青木敦英・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司）

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　三浦（前川） 正樹

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
教育心理学（単独）	（著書） 1.発達と教育の心理学	共	平成 26 年 3 月	八千代出版	44 （193）	教育心理学の中の、特に発達と学習分野を中心にまとめた教科書。教職課程履修者を意識し心理学の初学者にも理解できるように、また教育現場に資するように編集された。発達や学習の過程について記述するとともに、心身の障害についても特に特別支援教育の章を独立してもうけ記述した。 （執筆担当部分：第 1 章「教育心理学とは何か」pp. 1-16、第 10 章「学習意欲」pp.137-151 第 11 章「学習の諸相」pp.153-165） 著者：三浦正樹、共同執筆、高木典子、三溝雄史、石王敦子
	2.心理学概論	共	平成 23 年 4 月	ナカニシヤ出版	11 （201）	新しい授業形式である協同学習を意識し、協同学習に対応できるように編集された心理学の概論的教科書。 （執筆担当部分：第 8 章「感情と動機づけ」pp.86-96 担当。動機づけ研究の基礎、動機づけ研究の新しい流れ、情動研究の基礎、情動研究の新しい流れ、情動と動機づけ研究の応用についてまとめた。） 著者：小野寺孝義、小川俊樹、磯崎三喜年、共同執筆、鈴木由起生、櫻井研三、大藤弘典、石崎千景、高木典子、北川歳昭、並川努、三浦正樹、岡林春雄、古澤照幸、伊藤宗親、石川幹人、相川充
	（学術論文等） 1.感情の言語化についての心理学的考察（5）－心理教育プログラムと感情の言語化－	単	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢、第 75 号 pp.71-82	12 （12）	筆者はこれまで一連の論文で、感情の言語化のメカニズム、その効用、個人差について検討してきたが、教育場面に目を転じると児童生徒の社会性の育成のために感情の言語化と関係深いソーシャルスキルトレーニングや社会性と情動の学習（SEL）などの心理教育プログラムが盛んに行われている。今

						回の論文では「感情の言語化」の実践例として学校での心理教育プログラムについてみた。まず、心理教育プログラムについてまとめ、それらの中で感情の言語化はどのように取り扱われているか考察した。次に心理教育プログラムの現状や課題、効果の検証などについてまとめた。そして「感情の言語化」の観点からプログラムがより実効性を持つためにどのようにすればいいのか提言を行った。
	2.発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討	共	令和元年7月	芦屋大学論叢、第71号 pp.45-56	6 (12)	発達特性質問紙は、発達障害の4領域（注意欠陥障害、多動性障害、自閉症スペクトラム障害、学習障害）の重複およびスペクトラムを見る質問紙である。これまでに、臨床場面や教育場面で使用してきたが、今回、質問紙としての信頼性、妥当性について検討した。因子分析の結果、4因子構造が確認された。また信頼性も十分なものであった。論文ではいくつかの事例について検討した。ただし、項目として妥当でないものも見られたため、今後いくつかの項目を見直し、改訂版を作ることが課題となった。 （執筆担当部分：信頼性、妥当性の検討、因子分析について担当） 著者：林知代、三浦正樹）
	3.感情の言語化についての心理学的考察（4）－神経心理学の視点から－	単	平成30年3月	芦屋大学論叢、第69号 pp.77-88	12 (12)	これまで感情の言語化のメカニズム、その効用、個人差について検討してきたが、それらについてみる際、神経心理学的視点が必要になってくる。感情の理論はジェームズのはじめから生物学的色彩が濃かったが、近年の脳科学の発展により、かなり詳細なことがわかってきている。感情処理の神経メカニズム、あるいは感情と言語の相互作用のメカニズムについてみた。次に、言語化そのものの神経学的メカニズム解明のため、失語症を手がかりに言語化についてまとめた。さらに、左右半球機能差と言語・感情の関係について神経心理学的にみた。これらを通じて情動処理の認知モデルと神経心理学モデルを関係させながら、感情の言語化について考察した。
	4.感情の言語化についての心理	単	平成29年7月	芦屋大学論叢、第67号	12 (12)	本稿では、感情の言語化について、感情の理論、感情についての

	学的考察（3）－再び感情心理学の視点から－			pp.35-46		著作、最近の感情心理学のトピックから考察した。感情の言語化には、認知的側面から見た情動の情報処理モデル（情動処理モデル）がそのメカニズムの、感情制御研究がその機能・効果の解明に直接関わると思われる。感情の言語化の障害であるアレキシサイミアの神経心理学的仮説として、左右半球の連絡不全説がある。バックの総合理論でも、感情の認知的評価とラベルづけ過程の統合には 2 つの半球の統合が必要であると述べている。感情の言語化についての説明には「情動処理モデル」「神経心理学的感情理論」「左右半球の連絡モデル」が必要になってくるであろう。
	5. 半球間相互作用の個人差に関する実験研究 ― 両視野提示課題を用いて ―	単	平成 28 年 1 月	芦屋大学論叢、第 64 号 pp.49-60	12 (12)	本論文では、半球間相互作用の個人差をみるために、両側提示課題を用いて、個別実験と集団実験を行った。その結果、性差は認められなかったが、キメラ課題との関連が示され、左半球覚醒者の方が全体として成績が良くなるという相関が見られた。アレキシサイミア傾向との関連もみられ、とくに下位因子である感情伝達困難が高くなるほど両側提示条件の成績が悪くなるという相関が示された。これらのことから、半球間相互作用の個人差研究において両側提示課題というパラダイムが有効であることが示された。性差も含め、さまざまな個人差指標との関連が予想されることから、今後このパラダイムを用いてさらに研究を進める必要があろう。
	6.感情の言語化についての心理学的考察（2）－感情心理学の視点から－	単	平成 23 年 6 月	芦屋大学論叢、第 55 号 pp.97-106	10 (10)	感情の言語化の問題を考察するにあたって、感情心理学の視点からその前提条件を探った。感情表出のタイプでは内在化と外在化の概念が示され、これが今後言語化を考察する際参考になると思われた。感情の分類にはさまざまなものがあるが、ルイスによる 1 次的感情／2 次的感情の区別が有効である。2 次感情とは内省あるいは自己言及という要素が関与し自己意識的感情とよばれている。2 次感情の方がより言語的関与が大きいと思われる。ここで、2 次感情と感情の個人間調節機能の対応が議論された。感情の理論ではジェームズ

						以前のデカルト、スピノザに遡りみた。彼らは感情を心身問題としてとらえており、その現代的意義が示された。今後の課題として引き続き感情の理論、自己意識感情について、あるいは新たに感情制御の問題について検討する必要がある。
発達心理学（単独）	（著書） 1.発達と教育の心理学	共	平成26年3月	八千代出版	44 （193）	（再掲のため、略）
	2.心理学概論	共	平成23年4月	ナカニシヤ出版	11 （201）	（再掲のため、略）
	（学術論文等） 1.感情の言語化についての心理学的考察（5）－心理教育プログラムと感情の言語化－	単	令和3年7月	芦屋大学論叢、第75号 pp.71-82	12 （12）	（再掲のため、略）
	2.発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討	共	令和元年7月	芦屋大学論叢、第71号 pp.45-56	6 （12）	（再掲のため、略）
	3.感情の言語化についての心理学的考察（4）－神経心理学の視点から－	単	平成30年3月	芦屋大学論叢、第69号 pp.77-88	12 （12）	（再掲のため、略）
	4.感情の言語化についての心理学的考察（3）－再び感情心理学の視点から－	単	平成29年7月	芦屋大学論叢、第67号 pp.35-46	12 （12）	（再掲のため、略）
	5.半球間相互作用の個人差に関する実験研究 ― 両視野提示課題を用いて ―	単	平成28年1月	芦屋大学論叢、第64号 pp.49-60	12 （12）	（再掲のため、略）
	6.感情の言語化についての心理学的考察（2）－感情心理学の視点から－	単	平成23年6月	芦屋大学論叢、第55号 pp.97-106	10 （10）	（再掲のため、略）

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　石川 峻

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　要 （共著の場合は全員の著者名を記載） （共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
スポーツ指導演習A	（学術論文） 1. 小学校体育授業におけるバスケットボールの指導に関する課題の検討：初任期，未経験教員に着目して	共	令和 3 年 10 月	運動とスポーツの科学第 27 号 1 巻	（抽出不可）（10）	本研究では，バスケットボールの授業における学習指導要領で求められている各項目について、小学校教員が有する指導の自信や、指導する上での課題を明らかにし、今後の教員研修の内容や授業プログラム開発の一助とすることを目的とした。今後はドリブル、キャッチ、守備の個人技能が向上でき、これらの技能を用いて、少ないゴールでも実施できるルールの工夫したゲームについての教員研修の実施や授業プログラムの開発が必要であると考えられた。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・村上佳司
	（教育実践記録等） 1. 教員養成課程の学生における体育授業観の変容に関する考察：模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業前後に着目して	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	（抽出不可）10	本研究では、教員養成の初期段階でどのような体育授業観を保持しているのか、模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業前後で、体育授業観がどのように変容するのかを明らかにすることを目的とした。その結果、下記の 3 点が明らかになった。 (1)学生が保持している体育授業観は「授業の目標」と「授業の実践」の大きく 2 つのカテゴリーに別けられた。 (2)教科教育法の授業後は、「授業の実践」に関する授業観を多く獲得した。 (3)大きく変容がみられた授業観の項目は、「安全面に配慮した授業」、「生徒が意欲的に取り組む授業」、「分かりやすい授業」であった。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・川口諒
	2. 教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察−体育実技科目「バスケットボール」を対象として−	共	令和 2 年 9 月	芦屋大学論叢第 73 号	（抽出不可）（12）	今日は体育実技の授業であっても、単に各スポーツ種目の技能や知識を習得するだけでなく、より一層教科指導に関する側面もカリキュラムに含んでいくことが重要であると考えられている。そのような中で、教員養成課程で実施されている体育実技のバスケットボールの授業を対象に、授業内で模擬授業を含んだカリキュラムを計画、実施し、模擬授業後

						のリフレクションシートの分析から、学生のリフレクションの実態について明らかにした上で、今後の授業改善への示唆を得た。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・川口諒・上田毅
中等教科教育法Ⅱ（保健体育）	（教育実践記録等） 1. 教科教育法（保健体育）のより良い授業のあり方について：過去2年の振り返りから	単	令和4年3月	芦屋大学臨床教育学部教育ジャーナル第2号	7	本稿では 2020 年度、2021 年度での過去 2 年間の本学における中等教科教育法Ⅱ（保健体育）の授業を、授業者である筆者が振り返り、今後の課題を整理、検討することを目的とした。その結果、学生の実態に関する課題として、「説明、指示」、「モニタリング、フィードバック」、「ゲームの指導」が、授業設計に関する課題として、「実施回数」、「実施種目」、「ICT を用いた指導法」が考えられた。
	2. 教員養成課程の学生における体育授業観の変容に関する考察：模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業前後に着目して	共	令和3年7月	芦屋大学論叢第 75 号	（抽出不可）（10）	（再掲のため、略）
	3. 教育実習前後の模擬授業（体育）の変容に関する事例研究：教育実習を経験した大学生の模擬授業から	共	令和3年7月	芦屋大学論叢第 75 号	（抽出不可）（5）	本研究は保健体育科で教育実習を実施した本学学生1名を対象に、教育実習の前後に実施した模擬授業について、授業場面の時間割合、フィードバックの回数、授業評価の3つの観点から比較分析を行い、教育実習で身につけた実践的指導力について検討することであった。教育実習を経験することで授業場面が効率よく配分できるようになることが伺えたが、大学内での模擬授業においても時間配分や具体的なフィードバックについての知見を活かすとともに、模擬授業の意義や実施方法について再考する必要があると考えられた。 (共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能) 著者：青木敦英・降幡幸奈・石川峻・森田玲子
	4. 教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察−体育実技科目「バスケットボール」を対象として−	共	令和2年9月	芦屋大学論叢第 73 号	（抽出不可）（12）	（再掲のため、略）

	5. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察－芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－	共	令和元年 8 月	芦屋大学論叢第 71 号	（抽出不可）（10）	本研究では、小規模な教員養成系大学における教採受験学生の傾向・実態を踏まえ、効果的な支援の在り方に着目した。①年間通した受験対策講座の設定、②講座を継続受講できるための有効な支援方策、③講座受講生の力を高める講師団編成の在り方について、それぞれ仮説を立て 3 年間にわたって実践研究し、考察した。受験生との協議をもとに、ニーズを踏まえた対策講座の設定や、少人数教育の成果を生かした指導・支援の継続、学内教員を核にした講師団編成等が受験対策に有用であることが示唆された。 （共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能） 著者：笠原清次・竹安知枝・盛谷亨・青木敦英・若杉祥太・石川峻・辻尚士・雄倉春来
体力測定と評価	（学術論文） 1. ミニバスケットボール選手における相対的年齢効果についての検討：誕生月，試合出場時間，身長の関係性に着目して	共	令和 4 年 3 月	発育発達研究第 93 号	（抽出不可）（10）	本研究では、ミニバスケットボール選手における誕生月分布、出場時間、身長に関する RAE を明らかにし、今後の育成システムや指導法の示唆を得ることを目的とした。研究対象者は 2021 年 3 月に開催された第 52 回全国ミニバスケットボール大会出場チームの選手である。指導者は体格が優れている、相対年齢の高い選手を試合に多く起用していることが示唆された。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・村上佳司
	（教育実践記録等） 1. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共	平成 31 年 2 月	スポーツサイエンス第 13 巻第 1 号	（抽出不可）（16）	本研究では、中学生女子バレーボール選手 11 名を対象に体格データ7項目（身長、体重、BMI、体脂肪率、指極、比指極、指尖高）と体力測定データ6項目（垂直跳び、最高到達地点、立ち幅跳び、背筋力、握力、全身反応時間）とスパイク速度との関係について検討を行った。中学生においてはスパイク速度に体格や体力が影響を及ぼしており、とくに体力ではジャンプ力がスパイクの速度に影響を与えていることが示唆された。 （共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能） 著者：青木敦英・石川峻・竹安知枝
	2. バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究-Offensive	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢第 69 号	（抽出不可）（8）	本研究では、OE を活用しての個人パフォーマンスの評価と分析を勝敗別に試みた。その結果、以下の知見が明らかになった。1)本学のウイングは得点源となっているが、より良い判断をして、確率の高いシュートを打つこと、オフェンスリバウンドの獲得に積極的に参加することが

	Efficiency 算出の試み-					必要である。2)効率の良いプレーを安定して発揮できる選手を育成していく必要がある。3)選手全員の OE の平均では、勝ち試合が有意に高く、勝ち試合の方が効率良くオフェンスできていることが推察されるとともに、OE が有効評価指標となり得ることがわかった。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・青木敦英・別當和香
	3. 大学男子バスケットボール競技における選手評価の検討：指導者と選手の評価の差に着目して	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	（抽出不可）(8)	本研究の目的は、大学男子バスケットボール選手のスキル面とパーソナリティ面における指導者と選手の評価の差を明らかにし、今後のチームビルディングの方策を検討することである。本研究を通して、監督と選手の評価に違いがあることが明らかになった。これらの評価の差を改善するために、スキル面ではこれまでの数値と目標とする数値を明確に提示すること、VTR を用いてできていない場面を指導者と選手が一緒に確認し、戦術や指導者の考えを確認することを提案した。パーソナリティ面では、選手との会話を増やすこと、学生スタッフやトレーナー、他の教職員との連携を密にすること、バスケットボール以外の活動を行うことを提案した。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・青木敦英
体育実技B（バスケットボール）	（学術論文） 1. 小学校体育授業におけるバスケットボールの指導に関する課題の検討：初任期，未経験教員に着目して	共	令和 3 年 10 月	運動とスポーツの科学第 27 号 1 巻	（抽出不可）(10)	（再掲のため、略）
	2. 小学生年代のバスケットボールにおける 3 人制と 5 人制の比較：ポジション別の触球数に着目して	共	令和 3 年 3 月	広島体育学研究第 47 巻	（抽出不可）(7)	本研究では小学生年代において、3 人制と 5 人制のポジションごとの 1 人当たりの触球数の違いを明らかにし、練習方法の留意点について検討することを目的とした。本研究の結果から、次のことが示唆された。1）3 人制は個人技能の改善に有効な可能性がある。2）C や低い技能レベルの子のボール触球数が少なくなる可能性があることをコーチが理解する必要がある。3）練習においてすべての選手の触球数を高めるためには、人数を減らすだけではなく、さらなるルール設定の工夫も必要である。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・上田毅・橋本真
	3. 小学生年代のバスケットボー	共	令和 2 年 11 月	バスケットボール研究第 6 号		本研究の目的は、3 人制と 5 人制のバスケットボールの試合の違いを明らかにす

	ルにおける 3 人制と 5 人制の比較－生体負担度,技能・戦術,ゲーム後の主観的評価から－				（抽出不可）（10）	ることであった。生体負担および主観的運動強度、技能・戦術的指標、そして主観的評価指標を比較した。2 つのゲームタイプがほぼ同一の生体負担および主観的運動強度をもたらすことがわかった。技能・戦術的な指標に関しては、3 人制は 5 人制よりも攻撃頻度と攻撃完了率が高かった。さらに、3 人制は、5 人制よりも 1 人あたりの触球数やショット数が多くなった。触球数に関するプレイヤーの主観的評価も、5 人制よりも 3 人制の方が高かった。したがって、5 人制よりも 3 人制の方が参加者にとって満足のいくものと思われる。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・上田毅・橋本真
	（教育実践記録等） 4. 教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察-体育実技科目「バスケットボール」を対象として-	共	令和 2 年 9 月	芦屋大学論叢第 73 号	（抽出不可）（12）	（再掲のため、略）
	5. バスケットボール競技におけるクォーターごとの得点傾向と勝敗との関係－関西学生バスケットボールリーグを対象として－	共	令和 2 年 9 月	芦屋大学論叢第 73 号	（抽出不可）（7）	本研究は平成 30 年度関西学生バスケットボールリーグの 1 部リーグおよび 2 部リーグの 173 試合を対象として、バスケットボールの 4 つのクォーターの得点傾向について、勝敗別およびリーグ（競技レベル）別に比較し、得点傾向と勝敗との因果関係について検討を行った。その結果、クォーターごとの得点傾向として1部リーグおよび2部リーグともに 2Q＜4Q となっていることを明らかにした。さらに、得点差の大きな試合（20 点差以上）では 1Q＞2Qの有意な差が認められ、1Qに大きな得点差がついていること、接戦となった試合（19 点差以内）では1部リーグでは 3Q，2部リーグでは 1Qが勝敗に影響すると考えられ、競技レベルで勝敗に影響するクォーターが異なっていることが推察された。 (共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能) 著者：青木敦英・石川峻・竹安知枝
	6. 大学生男子バスケットボール競技におけるゲーム分析－本学における関西学生バスケットボール 2 部リーグ戦か	共	令和 2 年 3 月	芦屋大学論叢第 72 号	（抽出不可）（7）	本研究では過去 3 年間の 2 部リーグ戦での戦いにおいて、BOX SCORE から算出できる各スタッツについて勝ち試合と負け試合で比較を行い、勝利するために重要と思われる客観的な視点について検討を行った。その結果、① 80 点以上の得点と80 点未満の失点が勝利するための目安、②3P シュートを確率よく決

	らの検討-					めること、③チームとして高確率のショットを狙えるシチュエーションについて今後検討する必要があること、④リバウンドについては獲得率で相手を上回ること勝利につながる可能性が高いことが明らかになった。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・青木敦英
	7. バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究-Offensive Efficiency 算出の試み-	共	平成30年3月	芦屋大学論叢第69号	（抽出不可）(8)	（再掲のため、略）
	8. バスケットボールにおけるポジション別にみたリバウンド獲得状況と勝敗との関係	共	平成29年10月	芦屋大学論叢第68号	（抽出不可）(8)	本研究では、公式試合のBOX SCOREからポジション別のリバウンド獲得状況を調査し、勝ち試合と負け試合の差について分析を行い、今後の指導の一助となることを目的とした。ビッグマンがインサイドプレイヤーの仕事であるDRの獲得をすることが勝利につながると示唆された。また、ビッグマンがリバウンドを獲得できない場合は、他のプレイヤーが獲得する必要があると考えられる。 （執筆担当分：全体） 著者：石川峻・青木敦英

研究業績等に関する事項（5年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1. ミニバスケットボール選手における相対的年齢効果についての検討：誕生月、試合出場時間、身長の関係性に着目して	共	令和4年3月	発育発達研究第93号	（再掲のため、略）
2. 小学校体育授業におけるバスケットボールの指導に関する課題の検討：初任期、未経験教員に着目して	共	令和3年10月	運動とスポーツの科学第27号1巻	（再掲のため、略）
3. 小学生年代のバスケットボールにおける3人制と5人制の比較：ポジション別の触球数に着目して	共	令和3年3月	広島体育学研究第 47巻	（再掲のため、略）
4. 小学生年代のバスケットボールにおける 3 人	共	令和2年11月	バスケットボール研究第6号	（再掲のため、略）

制と5 人制の比較－生体負担度,技能・戦術,ゲーム後の主観的評価から－				
5. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察	共	平成 31 年 4 月	アダプテッド体育・スポーツ学研究第 5 巻第 1 号	「近畿アンリミテッ ド・パラ陸上」(2017)に着目し、ボランティア・スポンサー企業の視 点より、大会の有用性について検 討を行った。その結果、このような新しい取り組みは、ボランティア・スポンサー企業の両者にとって好意的に捉えられ、さらにボランティアだけでなく協賛企業にとっても価値のあるイベントである可能性が高いということが推察された。 著者:竹安知枝・青木敦英・石川峻
6. わが国のバスケットボールにおける競技者育成システム構築のための基礎的研究－地域クラブと学校運動部の二重登録に焦点を当てて－	単	平成 30 年 3 月	広島体育学研究第 44 号	本研究の目的は、愛知ジュニアバスケットボール連盟の事例から、今後の競技者育成システムを構築する上での課題を得ることである。本研究の成果は次の通りである。クラブ員は指導者や仲間から自由にクラブを選択している。登録制度に関しては、今後も二重登録を望むクラブ員が多く、連盟理事もメリットと考えている。しかし、二重登録が故のトラブルも多い。さらに、出場できる大会が少なく、この状況に不満な者もいる。今後のシステムを構築する上で、二重登録や出場できる大会数などの問題を解決することが考えられる。
【教育実践記録等】 1. 教科教育法(保健体育)のより良い授業のあり方について:過去 2 年の振り返りから	単	令和 4 年 3 月	芦屋大学臨床教育学部教育ジャーナル第 2 号	(再掲のため、略)
2. 小学生におけるバスケットボール競技のルールに関する一考察:スペインとの比較を通して	単	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢第 76 号	本稿では、これまでの研究や資料から世界トップレベルのスペインと日本におけるミニバスケットボールのルールを比較した上で、今後の日本のミニバスケットボールのルールに関して検討することを目的とした。その結果、今後の日本のミニバスケットボールには、1)出場機会の均等化、2)3 ポイントショット、3)少人数ゲームに関するルールの導入を検討する必要があると考えられた。
3. 教員養成課程の学生における体育授業観の変	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	(再掲のため、略)

	容に関する考察：模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業前後に着目して				
4.	教育実習前後の模擬授業（体育）の変容に関する事例研究：教育実習を経験した大学生の模擬授業から	共	令和３年７月	芦屋大学論叢第 75 号	（再掲のため、略）
5.	コロナ禍の部活動自粛による、競技に対するモチベーションへの影響に関する一考察	共	令和３年７月	芦屋大学論叢第 75 号	本稿では本学の部活動禁止措置による長期間の部活動停止状況が、運動部所属学生の部活動へのモチベーションや自主トレーニングに、どのような影響を与えているのか調査を実施した。そしてこの分析結果から、長期間の部活動の活動停止においても選手個人の競技へのモチベーションやパフォーマンスに有用な対策を講じるための一助とすることを本研究の目的とした。 著者：武田光平・別當和香・伊藤武徳・金相煥・番平守・石川峻
6.	大学男子バスケットボール競技における選手評価の検討：指導者と選手の評価の差に着目して	共	令和３年３月	芦屋大学論叢第 74 号	（再掲のため、略）
7.	教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察：体育実技科目「バスケットボール」を対象として	共	令和２年９月	芦屋大学論叢第 73 号	（再掲のため、略）
8.	バスケットボール競技におけるクォーターごとの得点傾向と勝敗との関係―関西学生バスケットボールリーグを対象として―	共	令和２年９月	芦屋大学論叢第 73 号	（再掲のため、略）
9.	大学生男子バスケットボール競技におけるゲーム分析－本学における関西学生バスケットボール２部リーグ戦からの検討－	共	令和２年３月	芦屋大学論叢第 72 号	（再掲のため、略）
10.	日本プロバスケットボール選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果について－2018-19 シーズンの場合－	共	令和元年８月	芦屋大学論叢第 71 号	本研究では、2018-19 シーズン B リーグ選手の誕生月分布に関する RAE について調査し、今後の選手育成を検討するための基礎的資料を収集することを目的とし

				た。Bリーグ選手にはRAEが認められた。今後、とくに成長期の育成に関わる指導者がRAEについて理解し、早生まれの選手だけでなく、将来的な可能性を持った晩熟型の選手を見逃さないこと、さらに早生まれの選手をドロップアウトさせない仕組みの構築が必要であることが示唆された。 著者：石川峻・青木敦英
11. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察－芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－	共	令和元年8月	芦屋大学論叢第71号	（再掲のため、略）
12. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共	平成31年4月	スポーツサイエンス第13巻第1号	（再掲のため、略）
13. わが国のバスケットボールにおける競技者育成システムの動向に関する一考察	単	平成31年2月	芦屋大学論叢第70号	これまでの研究、報告から諸外国と従来の日本の選手育成システムを比較すると共に、今後の日本のバスケットボールにおける選手育成システムについて考察することを目的とした。諸外国では地域クラブで普及、強化されており、様々なメリットがある。日本では学校運動部が中心であったが、地域クラブが増え、Bクラブ U-15チームの活動も活発になってきた。今後は諸外国の良い部分を取り入れながら、ルールの創意工夫も含めた日本ならではの選手育成システムの構築を期待したい。
14. バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究-Offensive Efficiency 算出の試み-	共	平成30年11月	芦屋大学論叢第69号	（再掲のため、略）
【その他（講演や発表）】 1. ミニバスケットボール選手における相対的年齢効果についての検討－ポジションに着目して	共	令和4年5月	第33回兵庫体育・スポーツ科学学会	本研究では、ミニバスケットボール選手におけるポジションごとの誕生月分布、出場時間、身長に関する RAE について、以下の 3 点が明らかになった。①誕生月と選手数に関しては、男子の F にのみ、有意な負の相関が認められた。②誕生月と出場時間、誕生月と身長に関しては、男子の F にのみ、有意な差が認められた。相対年齢が高い選手は試合に多く出場していた。また、相対年齢が高い選手は身長が高かった。

				③出場時間と身長に関しては、男子のF、女子のすべてのポジションで有意な正の相関が認められた。 （石川峻・村上佳司）
2. 小学生における3人制と5人制の比較	単	令和3年12月	日本バスケットボール学会第8回学会大会シンポジウム	小学生におけるバスケットボールの3人制と5人制の違いを、生体負担、技能的指標、ゲーム後の主観的評価の観点から実験結果を紹介するとともに、育成年代にとって、3 人制の活用がなぜ有効なのかを提言した。
3. ミニバスケットボール選手における相対的年齢効果についての検討：全国大会出場チームを対象にー	共	令和3年9月	日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会	本研究では、ミニバスケットボールの全国大会における登録選手の誕生月分布、出場時間、身長に関するRAEを明らかにし、今後の育成システムや指導法の示唆を得ることを目的とした。本研究では、以下の3点が明らかになった。男女ともにベンチ登録選手の誕生月では 1-3 月が少ないものの優位な差は認められなかった。男女ともに4-6月に生まれた選手は、1-3 月生まれの選手よりたくさん試合に出場しており、出場時間に RAE が存在する。男子では身長にRAEが認められた。また、男女ともに身長と試合出場には優位な相関が認められた。 （石川峻・村上佳司）
4. バスケットボールの魅力・楽しさを伝える効果的な方法	単	令和3年8月	令和 3 年度 教員免許更新講習（芦屋大学）	前半はバスケットボールという素材を、授業で扱う教材に再構成する際のポイントを、バスケットボールの歴史や競技特性と関連付けながら解説した。後半は、近年注目されている 3x3 バスケットボールを受講者に体験してもらった。
5. 球技（ゴール型）の効果的な指導	単	令和2年8月	令和 2 年度 教員免許更新講習（芦屋大学）	前半は球技（ゴール型）の中でバスケットボールを例にとり、初心者や苦手な児童、生徒でも取り組みやすいルールの工夫について解説した。後半は、近年注目されている 3x3 バスケットボールを受講者に体験してもらった。
6. 片脚および両脚のプライオメトリックトレーニングの効果に関する研究ー大学バレーボール選手を対象としてー	共	令和2年6月	第31回兵庫体育・スポーツ科学学会	本研究では女子バレーボール選手を対象に、片脚と両脚のそれぞれのプライオメトリックトレーニングを行うグループを設定し、トレーニング前後のジャンプ能力、パワー発揮能力の変化を調査し、いずれのトレーニング方法が効果的であるのか検証を行った。

				結果は、バレーボール選手のプライオメトリックトレーニングにおいて、片脚でのトレーニングを積極的に取り入れるべきであることが示唆された。 （青木敦英・石川峻・竹安知枝）
7. ミニテニスの意識に対する調査：経験者を対象に	共	令和 2 年 6 月	第 31 回兵庫体育・スポーツ科学学会	ミニテニスの経験者男女 55 名（40～80 歳代）を対象に、この スポーツに対する意識についてアンケート調査を実施した。 その結果、ミニテニスに対して「健康に良く安全に実施でき、かつ経済的である」と捉えている人が大半を占めていることが明らかになり、今後の我が国における生涯スポーツの一つ として、ミニテニスが普及していくことが望ましいと考えられる。 （竹安知枝・青木敦英・石川峻・臼井達矢）
8. 小学生年代のバスケットボールにおける 3 人制と 5 人制の比較ーポジション別の触球数に着目してー	共	令和元年 9 月	第 70 回日本体育学会	本研究では小学生年代において、3 人制と 5 人制のポジションごとの触球数の違いを明らかにし、練習方法の留意点について検討することを目的とした。3 人制では G と F の個人の触球数が増加するので個人技能の改善に有効であること、人数に関わらず C の触球数が少なくなる可能性があることを指導者が理解する必要があること、すべての選手の触球数を高めるルールの設定が必要であることが示唆された。 （石川峻・上田毅・橋本真）
9. バスケットボールにおける「流れ」と勝敗の関係ー関西学生バスケットボール 2 部リーグについてー	共	令和元年 9 月	第 70 回日本体育学会	本研究では関西バスケットボール連盟2部リーグを対象にピリオドごとの得点の変化に着目し、その違いについて検討を行った。対象となった 2 部リーグの全試合（90 試合）についてピリオドごとの得点，得失点差を記録し、勝ちチームと負けチームで比較を行った。バスケットボール競技において「流れ」をつかむために、ハーフタイム以降のピリオドにおいて得点を積み重ねることが重要であると考えられた。 （青木敦英・石川峻・竹安知枝）
10. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察	共	令和元年 9 月	第 70 回日本体育学会	本研究では 2017 年に開催された国内初の 3 つの取り組み【「障がいの有無に関係なく実施」「夏のナイター開催」「民間出資」】により行われた「近畿アンリミテッド・パラ陸上」に着目し、この大会の有

				用性について、ボランティアとスポンサー企業の視点より検討・考察を行った。この大会のような新しい取り組みは、ボランティアやスポンサー企業の両者にとって好意的に捉えられ、さらにボランティアだけでなく協賛企業にとっても価値のあるイベントである可能性が高いことが推察された。 （竹安知枝・青木敦英・石川峻）
11. 中学生バレーボール選手のスパイク速度に及ぼす体格と体力の影響	共	平成 30 年 8 月	第 69 回日本体育学会	本研究では、中学生女子バレーボール選手 11 名を対象に体格データ7項目（身長、体重、BMI、体脂肪率、指極、比指極、指尖高）と体力測定データ6項目（垂直跳び、最高到達地点、立ち幅跳び、背筋力、握力、全身反応時間）とスパイク速度との関係について検討を行った。 中学生においてはスパイク速度に体格や体力が影響を及ぼしており、とくに体力ではジャンプ力がスパイクの速度に影響を与えていることが示唆された。 （青木敦英・石川峻）

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　伊藤 武徳

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
学校安全及び救急法	（学術論文） 1. 芦屋大学学生を対象にした「熱中症」に関する調査	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	10	本研究では、本学学生を対象とした熱中症についての意識調査を行い、1992 年の大学生を対象とした熱中症についての調査結果と比較するとともに、本学学生の熱中症に関する知識等の習得状況を確認し、本学における熱中症対策の課題を探り今後の指導における基礎的資料の収集を目的とした。得られた結果は以下の通りである。 (1)本学学生のほとんどが熱中症教育を受けていたが、その一方で熱中症になった経験があると回答した学生も 34%いた事から、熱中症の予防知識を実際に活かすようにすることが必要であると考えられた。 (2)熱中症の予防に関して基本的な知識の習得は伺えたが、暑熱順化などの知識が理解されていない可能性があると考えられた。 (3)暑熱環境下でのスポーツ対策について学生が熱中症の危険性について自主的に判断できるような指導体制が必要であると考えられた。 今後以上のことを踏まえ、本学での熱中症予防についてのより深い理解を学生に促す指導の必要性が示唆された。 著者：伊藤武徳
	2. 芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢第 76 号	（抽出不可）（10）	本研究は、芦屋大学の運動部に所属する学生 200 名を対象に、スポーツ傷害の発生状況について種目または男女の性差が影響しているのかについて分析・検討をした。本学では教育学科にて、保健体育科の教員免許が取得できるだけでなく、スポーツ指導の資格について取得できる課程を整

						えているが、これら傷害の発生状況に関する知見を学生に還元することが最も重要である。専門外種目における傷害の知識や経験の把握。種目によって異なるスポーツ指導の安全上の留意点。これらの点を踏まえて、様々な種目についてのスポーツ指導ができる指導者を養成するという目的に調査を行った。得られた結果は以下の通りである。 1．スポーツ傷害の経験が 80％以上の学生あること。さらに小学校時から高校時にかけてスポーツ傷害の受傷割合が増加する傾向を示した。 2．球技系種目と格闘技系種目でのスポーツ傷害の内容を比較し、格闘技系種目では骨折、腱・靭帯損傷といった重傷な傷害の発生割合が球技系種目と比べて高くなっている傾向を示した。 3．男女別にスポーツ傷害の内容について比較したところ、男子の方が女子よりも骨折の割合が高く、女子では男子よりも捻挫の割合が高くなっていたが、受傷部位については大きな男女差はみられなかった。 今後の本研究で得られたスポーツ傷害の知見について詳細なデータを収集するとともに、スポーツ指導者を目指す学生に対して、少しでもスポーツ傷害の発生を防ぐこと、また練習時間や運動頻度などに留意してスポーツの指導に当たることを指導していくことが必要である。 著者：伊藤武徳、西光哲治、金相煥、別當和香、武田光平、石川峻、番平守、青木敦英（計 8 名）
武道 B 剣道	（学術論文） 1．コロナ禍の部活動自粛による，競技に対するモチベーションへの影響に関する一考察	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	（抽出不可） （10）	本稿では本学の部活動禁止措置による長期間の部活動停止状況が、運動部所属学生の部活動へのモチベーションや自主トレーニングに、どのような影響を与えているのか調査を実施した。そしてこの分析結果から、長期間の部活動の活動停止においても選手個人の競技へのモチベーションやパフォーマンスに有用な対策を講じるための一助とすることを本研究の目的とした。

	2. 芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成 29 年 7 月	芦屋大学論叢 第 67 号	（抽出不可）（12）	現代社会では、高齢化やライフスタイルの多様化などから派生する様々な問題が指摘されている。このような社会をより良く生き抜くためには、個々が内面的な充実感を高め、生活の質の向上や自己実現の機会拡充に向けた取り組みを模索し行動していくことが重要であると考える。本研究では、2011 年から 2014 年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討をおこおない、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後のの授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。 著者:西光哲治、金相煥、別當和香、 伊藤武徳、武田光平
	【教育実践記録等】 1.剣道の打突向上について～振り上げ動作の意識に関する指導法の一考察～	単	令和元年 5 月	日本産業科学学会関西部会	5	本研究では、剣道の振り上げ動作時に力みのある起こり（隙に繋がる）がある本学学生を対象に、異なるサイズのボールを活用しスムーズな振り上げ動作意識を構築する目的として調査を実施した。そしてこの結果から、適度な柔軟さを保持しながら肘屈曲を可能にするには、テニスボール程度のサイズ・弾力が振り上げ動作と類似性があり、スムーズな振り上げ動作を意識させる指導場面での一助となることが考えられた。 著者:伊藤武徳

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1. 芦屋大学学生を対象にした「熱中症」に関する調査	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	（再掲のため、略）
2. 芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢第 76 号	（再掲のため、略）
3. コロナ禍の部活動自粛による，競技に対するモチベーションへの影響に関する一考察	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	（再掲のため、略）

4. 芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成 29 年 7 月	芦屋大学論叢第 67 号	（再掲のため、略）
【教育実践記録等】 1. 剣道の打突向上について～振り上げ動作の意識に関する指導法の一考察一	単	平成 30 年 3 月	日本産業科学学会関西部会	（再掲のため、略）
【その他（講演や発表）】 1. 剣道の魅力・楽しさを伝える効果的な方法	単	令和 3 年 8 月	令和 3 年度 教員免許更新講習（芦屋大学）	前半は武道という素材を、授業で扱う教材に再構成する際のポイントを、武道の歴史や競技特性と関連付けながら解説した。後半は、武道における対人動作と簡易教材を使用して受講者に体験してもらった。
2. 武道（剣道）の効果的な指導	単	令和 2 年 8 月	令和 2 年度 教員免許更新講習（芦屋大学）	前半は武道の中で剣道を例にとり、初心者や苦手な児童、生徒でも取り組みやすい授業展開の工夫について解説した。後半は、を受講者に体験してもらった。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　金　　相煥

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
体育実技 C サッカー	（研究ノート） 1. 育成年代における監督の一考察	単	平成 24 年 3 月	芦屋大学論叢 56 号	育成年代の高校生と中学生のデータをとり、理想像の違いを研究した。 中学生も高校生も理想の指導者像で最低限必要な要素はサッカーの知識と指導のわかりやすさであり、それに加えて中学生年代には楽しみの要素を多く含み、高校生年代は選手をコントロールするモチベーションが不可欠であることがわかった。
スポーツ演習Ⅱ（フットサル・サッカー指導法）	（教育実践報告） 1. 二部昇格への軌跡（チームアプローチ）	単	平成 25 年 7 月	芦屋大学論叢 59 号	芦屋大学サッカー部が創部 48 年目、監督に就任してから 3 年目での 2 部昇格を果たした経緯と実践してきた活動を報告した。
	2. スペインのサッカーコーチにみる指導法についての一考察	単	平成 26 年 7 月	芦屋大学論叢 61 号	世界でも有数のサッカー王国スペインから 2 名の指導者を招聘し、クリニックを行った活動を報告。スペインのサッカー観と指導方法に着目して考察した
	（論文） 3. 大学におけるスポーツ教育に関する一試論～課外クラブ活動を積極的に意味付ける A 大学の事例を通して～	単	令和 1 年 8 月	兵庫教育大学	教育の 3 本柱である体育におけるスポーツ教育のあり方を問いただし、いかに学生に教養と実践を追求した大学カリキュラム（課外活動も含め）を実践するべきかを考察する。
	＜修士論文＞ （研究ノート） サッカー競技における戦術のメソッド化とフィジカル測定の成果と課題～関西学生サッカー	単	令和2年 9 月	芦屋大学論叢 73 号	サッカー部の成果が出た要因に「戦術の言語化」を行い、メソッド化したこと、その戦術を発揮するためのフィジカル面でのデータ化をしたことが1つ上位のカテゴリーに上がれる要因になったことを記した。

	2部Aリーグ昇格へのアプローチ～				
スポーツ社会学	（実践報告） 1．地域密着型サッカークラブ設立について～三宮フットボールクラブジュニアユースの機能と役割～	単	平成25年1月	芦屋大学論叢58号	日本サッカー界はめまぐるしい発展を遂げているが、都市部においては十分なサッカー環境が与えられていない生徒が存在する。その生徒たちにサッカー環境を与え、サッカークラブとして活動する場を提供した実践活動報告。
	2．地域密着型サッカークラブについて～三宮フットボールクラブジュニアユースの発展と課題～	単	平成27年7月	芦屋大学論叢63号	3年間で85名の選手にサッカー活動環境を与えた「三宮フットボールクラブジュニアユース」を設立して、 今年で10年を経過した。5年目以降からの生徒たちのサッカークラブへのニーズの変化に対応し、サッカー面と学習面において新たなる発展を試みたクラブの実践報告である。
	3．芦屋学園サッカースクール設立について～芦屋学園の地域貢献事業～	単	平成30年	芦屋大学論叢70号	芦屋学園の地域貢献事業として立ち上げた芦屋学園サッカースクールの設立経緯や趣旨を報告する。芦屋地域の子供たちのスポーツ活動の現状をより豊かにする目的がある。
	（論文） 4、課外活動における一貫指導システム構築の現状と課題～芦屋学園サッカー部門の改革事例から～	共	令和3年	芦屋大学論叢74号	芦屋学園サッカー部門の一貫指導システムにおける募集人数増加と学校経営安定の成功に至った経緯と今後の一貫指導システムをより効率よく展開するための課題を明らかにし、サッカー競技を含む課外活動における一貫指導システム構築のための有用な知見を得ることを目的とした。
	コロナ禍の部活動自粛による、競技に対するモチベーションの影響に関する一考察	共	令和3年7月27日	芦屋大学論叢75号 武田・別當 伊藤・番平 石川	
	芦屋大学運動部所属学生のスポー	共	令和4年3月24日	芦屋大学論叢76号	

	ツ傷害・外傷の発生に関する調査 球技系スポーツ選手におけるパーソナリティに関する検討～芦屋学園ジュニアユース・芦屋学園高等学校を対象として～	 共		伊藤・西光 別當・武田 石川・番平 青木 芦屋大学論叢 77 号 金・別當 山口	

研究業績等に関する事項（5 年以内）				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【その他（講演や発表）】 1 サッカーにおけるコオディネーショントレーニングの実践と効果 2	共	2013 年 12 月	ユーハイムスポーツフォーラム	サッカーは様々なプレッシャー環境下の中での動きが要求される。コオディネーショントレーニングは、ジュニア期の選手に必要な基礎的な運動能力を効果的に身につけることが出来、潜在能力を高める効果があることを立証した

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　西 光 哲 治

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
スポーツ演習Ⅳ(護身術・スポーツチャンバラ)	(学術論文) 1.格技・日本拳法の指導技術研究論(その1)「初心者に対する指導法と物理学的見地から考察した技術解説（拳突技を中心に）」	共	平成26年8月	日本産業科学学会全国大会	10	格技は近世に入り欧米ではスポーツとして確立し身体能力を科学的に研究するという分野に着目し指導法と技術開発が成されてきた。しかし、我が国の格技は武道という精神文化が先行し、根性論や各指導者経験値から判断されてきた。そこで本研究は格技の技術の中で最初に指導される『撃ち技』で、『拳の撃ち出し速度』を生むために技術研究してきたことを実験検証のもと科学的論証行うことで今後のスポーツ演習Ⅳ及び拳法(部活)指導の役立つ知見を得ることを目的とした。
武道論2	(学術論文) 1.格技・日本拳法の指導技術研究論(その 2)「拳突技の撃ち出し速度を未経験者と経験者で比較し指導方法と技術解説の確立	共	平成 27 年 8 月	日本産業科学学会全国大会	6	前号(その 1)で「拳の撃ち出し速度」を上げるための技術について考察・検証し、指導方法を確立するための研究であった。我々が考察した指導方法を格技未経験者対象に検証を行った所、予想以上に拳の速さを生み出す結果が得られた。そこで本稿では、格技(ボクシング・空手・日本拳法)を対象として未経験者と同様の検証を行い、どのような結果が得られるかを知ることにより今後のスポーツ演習Ⅳ及び拳法(部活)指導の役立つ知見を得ることを目的とした。
水泳実習(前期)及びスキー実習(後期)	(学術論文) 1.芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成 29 年7月	芦屋大学論叢第 67 号	8	近年、4 年間の学生生活で全く運動・スポーツを行わずに卒業する学生が多く、厚生労働省の国民健康・栄養調査結果(H27 年度)からも年齢階級別で 20 歳代の運動習慣が最も低い割合となっており大学生の体力低下が確認でき、大学現場での学生の健康づくりの方策・効果的な健康教育の実践が必要であると言える。現在、芦屋大学では一年次に「体育の実技と講義」の授業を開講しており、運動動不足の解消と体力の維持・増進、自己の健康状態の把握や改善、心身の健康づくりなど、獲得することを

						目的として授業展開している。また実技の授業では現状の大学1年生の体力状況を把握することを目的に体力測定を継続的に実施している。そこで本研究は2011 年から 2014 年の新体力ﾃｽﾄの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討を行い、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「水泳実習・スキー実習」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。
水泳実習（前期）及びスキー実習（後期）	（学術論文） 1.芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和4年3月24日	芦屋大学論叢第76号		芦屋大学においては運動部所属学生の割合は多く、関西地区では上位を争う部活動もあり運動部の活動は盛んであるが、これまでに傷害発生状況についての調査がなされたことはない。そこで本研究は芦屋大学の運動部に所属する学生の外傷に着目しスポーツ傷害の発生状況について調査を行い、クラブ活動での安全な指導や今後のスポーツ指導者を目指す学生への資料として゜と活用することを目的とした。

研究業績等に関する事項（5年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1.芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成29年7月	芦屋大学論叢 第67号	近年、4年間の学生生活で全く運動・スポーツを行わずに卒業する学生が多く、厚生労働省の国民健康・栄養調査結果（H27 年度）からも年齢階級別で20歳代の運動習慣が最も低い割合となっており大学生の体力低下が確認でき、大学現場での学生の健康づくりの方策・効果的な健康教育の実践が必要であると言える。現在、芦屋大学では一年次に「体育の実技と講義」の授業を開講しており、運動動不足の解消と体力の維持・増進、自己の健康状態の把握や改善、心身の健康づくりなど、獲得することを目的として授業展開している。また実技の授業では現状の大学1年生の体力状況を把握することを目的に体力測定を継続的に実施している。そこで本研究は 2011 年から 2014 年の新体力ﾃｽﾄの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討を行い、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「水泳実習・スキー実習」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

【学術論文】 1.芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和 4 年 3 月 24 日	芦屋大学論叢 第67号	芦屋大学においては運動部所属学生の割合は多く、関西地区では上位を争う部活動もあり運動部の活動は盛んであるが、これまでに傷害発生状況についての調査がなされたことはない。そこで本研究は芦屋大学の運動部に所属する学生の外傷に着目しスポーツ傷害の発生状況について調査を行い、クラブ活動での安全な指導や今後のスポーツ指導者を目指す学生への資料として、活用することを目的とした。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　武田 光平

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要 （共著の場合は全員の著者名を記載） （共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
健康スポーツ科学概論 健康スポーツ科学実習	（学術論文） 芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成 29 年 7 月 18 日	芦屋大学論叢第 67 号	10	著者：西光哲治、金相煥、別當和香、伊藤武徳、武田光平 本研究では、2011年から2014年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討をおこおない、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「健康スポーツ科学実習」実技項目改善及び1年次後期に開講される「健康スポーツ科学概論」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【教育実践記録等】 1.女性の雇用問題と政策に関する一考察-女性を取り巻く社会環境-	共	平成 30 年 11 月 21 日	芦屋大学論叢　第 70 号	著者：池田聡、押田美穂、清水真、武田光平 本研究では、現代の働く女性の労働環境及び女性の子育て等の問題点を明らかにする。そのため、労働基準法と育児休業法に焦点をあて現行の制度の仕組みやそれがどのように機能しているのか、また働く女性にとって有益であるものなのか検討した。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　石田（住本）愛子

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要 （共著の場合は全員の著者名を記載） （共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
器楽 ⅠⅡ ⅢⅣ	（著書） 1.大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版	6 (75)	幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のための、大学生活の心構え、一般教養、実習関連、免許状取得までのプロセスについてまとめた指南書。（執筆担当部分：Ⅰ心構え、Ⅲ実習に向けて）第Ⅲ章において、ピアノ実技についてどのような事前準備が必要か、楽譜の取扱いや選曲のポイントなどを解説した。 著者：笠原清次、渡康彦、石田愛子（編著）、竹安知枝、他、全 11 名
	（教育実践記録等） 1.《研究ノート》 学生の主体的な学びを支える指導 －ピアノ個別指導の場合－	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢 第 69 号	（抽出不可） (10)	ピアノ演奏実技の習得には日々の練習が不可欠であり、教員免許取得希望学生には授業時間外の主体的な練習が求められる。ピアノ学習経験が乏しい学生に対して、主体的な取り組みを促すには何が必要か、どのような指導が効果的か。「器楽」履修学生の実態と、「器楽」担当教員 7 名による指導の工夫、日々の具体的な指導方法や学生とのコミュニケーションの取り方について紹介し、望ましい個別指導のあり方について考察している。 著者：石田愛子、稲葉修子、井上邦子、岩崎智早、柿本久美子、野尻智子、三宅澄子
	2.《実践報告》 オンデマンドによるピアノ実技指導の試み－LMS「Pholly」を用いて－	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢 第 75 号	8 (10)	コロナ禍における教職課程のピアノ実技指導として、動画によるオンデマンドレッスンを総括し、その効果と問題点を考察した。隔週での対面レッスンと併用とした場合との比較、学生の意識調査等を通して、学生の主体的な取り組みを促す点において、動画のやりとりによるオンデマンドレッスンにも一定の効果が期待できることが確認された。しかし、対面でなければ指導が難しいケースも多く、特に初心者に対しては、初期段階での対面指導が非常に重要であることが明らかになった。 著者：石田愛子、稲葉修子、岩崎智早、柿本久美子、野尻智子、三宅澄子

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

初等教科教育法Ⅵ（音楽）	（教育実践記録等） 1.《研究ノート》 小学校音楽科指導に対する苦手意識克服のための試み	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢第 62 号	11	小学校教員を目指す本学学生の多くが音楽に苦手意識を持ち、小学校での指導に不安を感じている。その要因として、ピアノや歌唱の技術不足、音楽全般の知識と経験の不足、自分自身が音楽好きでない、などが挙げられる。「初等教科教育法（音楽）」では、ピアノの苦手意識で委縮することなく前向きに音楽科指導に取り組めるように工夫し、リコーダー実技や器楽合奏などピアノ以外の要素の向上をはかっている。その実践を通して見えてくる学生の実態と課題を明らかにするとともに、今後の指導の在り方について考察した。
保育内容Ⅵ（表現-音楽リズム）	（学術論文） 1.幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察－芦屋大学附属幼稚園での実践を通して－	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢第 71 号	8 (11)	鍵盤ハーモニカは、小学校低学年の器楽指導に使用されることが一般的であるが、小学校での音楽学習にスムーズに移行できるようにとの期待もあり、幼稚園における器楽活動にも広く採用されるようになっている。本稿では、芦屋大学附属幼稚園での実践を通して、就学前教育としての望ましい鍵盤ハーモニカ指導のあり方と、年長児を対象とした効果的な教材や具体的指導法、また指導上の課題や対応策について考察した。 著者：石田愛子、安藝雅美
	2. 幼稚園における課外活動についての一考察－鍵盤ハーモニカ指導の場合－	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	8 (11)	芦屋大学論叢第 71 号「幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察－芦屋大学附属幼稚園での実践を通して－」の続編である。鍵盤ハーモニカ指導の課外活動について 2019 年と 2020 年の実践を比較し、その変更点（教材の選び方や指導の工夫、外部講師と幼稚園教員の連携、課外活動と日常の保育の関連づけ等）について効果を検証した。（執筆担当部分：第 1、3～6 章）著者：石田愛子、安藝雅美
	（教育実践記録等） 1.《授業実践》 実践的な音楽力を養うために －「保育内容Ⅵ（表現-音楽リズム）」での試み－	単	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢第 68 号	11	保育者に求められる確かな音楽スキルと豊かな音楽性、実践的な音楽力を身につけるために，平成 29(2017)年度前期の「保育内容Ⅵ（表現－音楽リズム）」では、これまでの学びを活かし、関連づけるような授業内容を展開した。保育のためのピアノ演習、ソルフェージュ、［音楽リズム、製作、言葉など］の融合と模擬保育、などの授業実践を報告し、本学学生の到達度と実態、課題と今後の指導のあり方について考察した。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

研究業績等に関する事項（5 年以内）				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1.大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版	（再掲のため、略）
【学術論文】 1.幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察－芦屋大学附属幼稚園での実践を通して－	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢第 71 号	（再掲のため、略）
2. 幼稚園における課外活動についての一考察－鍵盤ハーモニカ指導の場合－	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	（再掲のため、略）
【教育実践記録等】 1.《授業実践》 実践的な音楽力を養うために－「保育内容Ⅵ（表現-音楽リズム）」での試み－	単	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢第 68 号	（再掲のため、略）
2.《研究ノート》 学生の主体的な学びを支える指導－ピアノ個別指導の場合－	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢第 69 号	（再掲のため、略）
3.《実践報告》 オンデマンドによるピアノ実技指導の試み－LMS「Pholly」を用いて－	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	（再掲のため、略）
【その他（講演や発表）】 （演奏会、公開講座における演奏）				
1.京都市立芸術大学音楽学部第 35 期生はんなりコンサート	共	平成 28 年 8 月	堀江アルテ	ヘンデル《ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ イ長調 Op1-3 HWV361》、モーツァルト《フィガロの結婚》より、チェンバロ／オルガン演奏
2.藤原台コール・カリヨン 30 周年記念コンサート	共	平成 28 年 9 月	ありまホール	合唱曲ピアノ伴奏、 ドビュッシー《ヒースの茂る荒れ地》ピアノ独奏
3.ザ・ハープシコード・カンパニー コンサート No.20	共	平成 28 年 9 月	アクア文化ホール音楽室	J.S.バッハ《ゴルトベルク変奏曲 BWV988》より、チェンバロ独奏、曲目解説、マンチーニ《リコーダーと通奏低音のためのソナタ ト短調》通奏低音
4.特別授業（児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験）「3 拍子の舞曲を踊ってみよう」	共	平成 29 年 2 月	兵庫県立西宮高校音楽科	チェンバロ演奏、講師・共演：樋口裕子（バロックダンス）
5.ザ・ハープシコード・カンパニー コンサート No.21	共	平成 29 年 9 月	アクア文化ホール音楽室	J.S.バッハ《半音階的幻想曲とフーガ BWV903》チェンバロ独奏、曲目解説、ベッリンツァーニ《リコ

				ーダーと通奏低音のためのソナタハ短調》通奏低音
6.特別授業（児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験）「バロック時代のダンス」	共	平成 30 年 2 月	兵庫県立西宮高校音楽科	チェンバロ演奏、講師・共演：樋口裕子（バロックダンス）
7.エルンスト・ザイラー先生追悼コンサート	共	平成 30 年 6 月	京都府立府民ホールアルティ	シューマン、ブラームスの歌曲ピアノ伴奏、共演：島村泰子（ソプラノ）
8.ザ・ハープシコード・カンパニー　コンサート No.22	共	平成 30 年 9 月	アクア文化ホール音楽室	J.S. バッハ《フランス序曲 BWV831》より、チェンバロ独奏、曲目解説、J.S.バッハ《リコーダーと通奏低音のためのソナタ　ホ長調　BWV1035》通奏低音
9.指導者研修（中級研修）「ー感性を磨くーコンサート」	共	平成 30 年 12 月	加佐ノ岬倶楽部音楽療法研究所主催、神戸ホテルフルーツフラワー	メンデルスゾーン《無言歌集》より〈甘い思い出〉〈狩りの歌〉〈ベネチアの舟歌〉他、ピアノ独奏、歌曲・合唱曲ピアノ伴奏
10.藤原台コール・カリヨン水無月コンサート	共	令和 1 年 6 月	ありまホール	合唱曲ピアノ伴奏、ブラームス《ワルツ》、ビゼー《メヌエット》ピアノ独奏

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名 渡 康彦

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概 要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
理科概論	1. アクトグラフを用いたタマネギバエの自然条件下での歩行活動の記録－小学校理科教育での応用の可能性－	共	平成 27 年 6 月	芦屋大学論叢 63 号	（抽出不可）（9）	野外に近い条件下でのタマネギバエの成虫の歩行活動リズムを明らかにするとともに、得られたデータを実験室（矩形波光周期・一定温度）で得られたデータと比較することで、自然界において時々刻々と変化する照度や温度が本種の活動リズムにおよぼす影響を示した。これらの実験結果の概要を報告するとともに、小学校理科の現場でのアクトグラフの利用可能性や問題点についても検討した。 著者 渡康彦、齋藤治、田中一裕
	2. 温度と湿度がキイロショウジョウバエの羽化におよぼす影響－小学校理科教育での応用の可能性－	共	平成 28 年 6 月	芦屋大学論叢 67 号	（抽出不可）（6）	キイロショウジョウバエは高温で死亡率が高くなり、30℃ではほとんど羽化しない。ところが、湿度を高くすると死亡率は減り、羽化率は高くなった。これらの実験結果の概要を報告するとともに、簡単な装置で出来ることから、小学校理科の現場での同様な実験を行う可能性や問題点についても検討した。 著者 渡康彦、森田健一、田中一裕
	3. 小学校理科教育における活動記録装置の導入検討報告 ―簡易ミニ電卓を用いた計装カウンタの教員免許更新講習講座での利用事例―	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 74 号	（抽出不可）（6）	昆虫の活動記録装置を安価で作ることによって小学校理科の現場での使用可能性を探り、令和 2 年 8 月に行われた芦屋大学での免許更新講習で先生たちに使用してもらい感想を聞いた。 著者：齋藤治、黒木出、渡康彦

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
【著書】 1 大学生活入門（共著）	共	平成 31 年 4 月	開成出版	幼・小・特別支援、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン。大学生活の心構え、必要な一般常識、教育実習に向け

				ての諸注意などを示したもの。 分担執筆　安藝雅美他 11 名 本人担当部分(P25-P30)P75
【学術論文】 1 Day-to-day variations in the amplitude of the soil temperature cycle and impact on adult eclosion timing of the onion fly	共	平成 29 年 6 月	International Journal of Biometeorology Vol. 61, 1011-1016	タマネギバエは、土中の温度較差が小さいほど羽化を早める。自然界では土中の温度較差は日々変異し、変異幅は深さによって異なるが、それらの変異は温度較差反応にあまり影響しないことがわかった。 著者:Tanaka and Watari(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
4　温度と湿度がキイロショウジョウバエの羽化におよばす影響－小学校理科教育での応用の可能性－	共	平成 29 年 6 月	芦屋大学論叢 67 号 47-52	(再掲のため、略)
5　Dependence of phase setting on temperature amplitude in the circadian eclosion rhythm of the onion fly Delia antiqua	共	平成 30 年 9 月	Physiological Entomology Vol43. 346-354.	タマネギバエの蛹を 1℃較差から 20℃較差までの矩形波と正弦波の温度周期(平均温度 20℃と 25℃)に置いて羽化を比較した。 共著:Miyazaki, Tanaka and Watari(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
6 Northward expansion of the bivoltine life cycle of the cricket over the last four decades	共	平成 30 年 11 月	Global Change Biology Vol.24, 5622-5628.	日本各地からシバスズを採集し頭幅を測った結果、40 年前(Masaki, 1978)と比較してノコギリ型のクラインが北に移動していることが分かった。これは温暖化の影響と考えられる。 Matsuda 他 7 名(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
7　Robustness of latitudinal life-cycle variations in a cricket *Dianemobius nigrofasciatus* (Orthoptera: Trigonidiidae) in Japan against climate warming over the last five decades	共	令和元年 11 月	Applied Entomology and Zoology Vol.54, 349-357.	日本各地からマダラスズを採集し頭幅を測った結果、50 年前と比較してノコギリ型のクラインに統計的な差がなかった。これは温暖化に対してクラインが北に移動したシバスズの結果と異なるが、マダラスズの成長速度の光周反応がシバスズのそれと違うことによるのかもしれない。 Matsuda 他 7 名(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
8 Circadian rhythm in locomotor activity of the common house	共	令和 2 年 6 月	Acta Arachnologica, Vol.69, 31-35.	ゲジを明暗サイクルに置くと暗期前半にピークをもつ歩行活動リズム示した。全暗、全明にお

centipede, Thereuonema tuberculata (Scutigeromorha: Scutigeridae)				いては、自由継続リズムを示し、スケルトン光周期にも同調した。Tanaka and Watari(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
9 小学校理科教育における活動記録装置の導入検討報告 ―簡易ミニ電卓を用いた計装カウンタの教員免許更新講習講座での利用事例―	共	令和3年3月	芦屋大学論叢74号	(再掲のため、略)
10 Clock-controlled arylalkylamine N-acetyltransferase (aaNAT) regulates circadian rhythms of locomotor activity in the American cockroach, *Periplaneta americana*, via melatonin/MT2-like receptor.	共	令和3年9月	Journal of Pineal Research, Vol.71, 19pp.	メラトニンがワモンゴキブリの歩行活動に及ぼす影響を調べた。メラトニン濃度が増加するにつれて、明暗サイクルでのゴキブリの活動リズムはより同調した。メラトニンとその合成酵素である aaNAT は、PDF システムに関連して、歩行活動の少なくとも 1 つの概日出力経路を構成していると推測された。 A. S. M. Kamruzzaman, 他8名(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
11 トビイロケアリ新女王における異なるコロニー発達パターン ―コロニー創設時期と気温の影響について―	共	令和4年9月	芦屋大学論叢第76号 63-70	野外条件下でトビイロケアリを飼育し、コロニーの発達を調べた。結婚飛行を終えたトビイロケアリ新女王の間でも、コロニー創設時期の違いによって1年目のコロニー発達のパターンが変化することが分かった。 著者:黒木出、渡康彦、中村圭司(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

様式第４号（教員個人に関する書類）

教育研究業績書

氏名　　安藝　雅美

担当授業科目に関する研究業績等

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要
子ども人間関係（単独）	（学術論文） 『子育て支援における縦割り懇談会の試み ー保育内容領域「人間関係」の示唆に向けてー』	単	平成 30 年 4 月	芦屋大学論叢 69 号	10 (98)	現代社会における幼児を取り巻く環境課題として人間関係があげられ、一般的な懇談会では保護者の子育てに関する個々の悩み・相談の吸い上げが難しい。よって、他学年の保護者を交え複数名で懇談会をする縦割り懇談会を実施した。各保護者が抱える課題･悩みを体系的に捉えられ、メンタルヘルスケアの効果もあると考察できる。
	（学会発表） 幼稚園における「2歳児保育」の在り方についての一考察	共	平成 26 年 5 月	日本保育学会第 67 回大会発表論文集 pp. 597	1 (1058)	2 歳児保育を導入している 2 園に対して、保育計画の精査、実践事例に対する保育者、保護者へのアンケート調査、子どもへの聞き取りを行い比較、検討をした。結果として、保護者への育児支援によるストレス軽減、家庭内環境向上と子どもへの自立援助につながっていることが示された。 （共著者：安藝雅美、益岡時美、山村悦子）
	子どものつぶやきから捉えた言葉の育ち	単	平成 29 年 11 月	関西教育学会 69 回	1 (68)	子どもの「つぶやき」を冊子にしている幼稚園があり、その内容を米田の分類を用いて「言葉遊び」「比喩」「理屈」の 3 分類にすることを試みた。また「つぶやき」が多かった年齢は対象者 1015 名に対し、3 歳が 284 名、4 歳 251 名、5 歳 167 名と、幼稚園に当たる年齢が多かった。男女別での違いも検討し、そこから浮かび上がる言葉、言葉による人間関係構築を考察した。

様式第４号（教員個人に関する書類）

	絵本を通して心の育ちを考える－絵本読みの新たな試みを通して－	単	平成31年3月	兵庫県私立幼稚園協会教員研修大会	5 （106）	絵本の読み聞かせの新たな取り組みとして、１ヶ月間同じ絵本の読み聞かせを行った。効用としては多岐に渡る反面、同じ絵本を繰り返し読むことの懸念事項もあった。 実施後のアンケート結果を踏まえ、集中力や記憶力、想像力に効果が見られたが、中には飽きてしまう子もいた。加えて、保育者の読み聞かせ方によって子ども達の反応に違いが出るなど、１つの絵本をきっかけに非日常的有限コミュニティが創出された。
	「幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察」	共	令和元年7月	芦屋大学論叢71号	11 （88）	小学校教育への円滑な接続の一環として大学附属幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカの実践指導を行った。園児が集団での演奏をする中で「幼稚園教育要領」にある、協同性、道徳性、規範意識の芽生え、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現において育ちが見られた。
	「幼稚園における課外活動についての一考察-鍵盤ハーモニカ指導の場合-」	共	令和３年３月	芦屋大学論叢 74 号	12 （132）	附属幼稚園にて年長児へ鍵盤ハーモニカの実践指導を行った。前回との相違としては、保育室に楽器が常備されること、クラス担任が同席することである。子どもが担任に音出しクイズをする場面では教科書には無い音を子ども独自で奏でる場面もあった。「音を自由に鳴らして遊ぶ」ことがコミュニケーションツールの１つとして活用されていた。 (共著者：石田愛子、安藝雅美)
	カラータイプ理論を用いた思考の癖の検討②－大学生の希望進路の違いによる分析を通して -	共	令和3年3月	日本発達心理学会第33回大会WEB開催研究発表		カラータイプ理論を用いて、保育者と子どもの心理状態を可視化することにより、保育者と子どものコミュニケーションや関係性をスムーズにするための援助となることを考察できた。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名 大 谷 彰 子

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概 要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
子どもと環境（単独）	（著書） 1.『教職を目指す人のための教育用語・法規』	共	平成 25 年 3 月 （改訂平成 29 年 3 月）	ミネルヴァ書房	4 （297）	教員志望者等の学生・一般が対象であるため平易な用語解釈を基本とする教育に関する法規とそれに関する用語解説書である。資料として、「教育ニ関スル勅語」や日本および西洋の教育史年表等も巻末に掲載されている。 以下の用語を解説した。「保育士」「児童福祉法」「児童権利宣言」「幼保一元化」「保育制度」「平和教育」 共著者：広岡義之、猪田裕子、大谷彰子 計 17 名
	2.『新しい幼児教育方法・指導法』改訂	共	平成 25 年 3 月 （改訂平成 29 年 3 月）	ミネルヴァ書房	6 （197）	学生や保育者を対象にした幼児の教育方法や指導法についてのテキスト。 具体的な事例を交え、保育現場における保育の環境や幼児教育方法の理論と保育の展開を分かりやすく解説している。子どもの主体的な活動や子ども同士の関わりが深まるような環境、自発的・積極的に関わりたくなる環境などやその構成について言及している。 （全 12 章） 以下の項目を執筆。 第 2 章 保育方法の本質 1 節 保育の方法とは何か 共著者：広岡義之、大谷彰子他 5 名
	3.『子どもの権利との対話から学ぶ保育内容総論』	共	令和 4 年 4 月	北大路書房	12 （169）	子どもの権利を保障する保育内容について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキストです。子どもたちは環境に能動的に関わり、試したり工夫することで新たな発見をし、考える力や探究心を養うという学びの姿を具体例を交え解説している。また、遊びこみや探求につながる保育環境や保育所等の「子どもに最もふさわしい生活の場」としての環境を保障することの責務等についても言及している。 （全 13 章） 以下の項目を執筆。 第 2 章 子どもの育ちに驚き、保育内容との関係性を学ぶ 第 1 節～第 3 節 共著者：森真理、猪田裕子、大谷彰子

						他 7 名
	（学術論文） 1. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力－保護者アンケートによる既存園との比較より－	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	15 （15）	森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力の特性を既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちは、《がんばる力》《自己主張》に優れ、《協調性》《自己抑制》に弱さがあることが明らかとなった。《がんばる力》は、自然環境に関わる時間に影響を受け、森（自然）を主たる生活の場所とし 1 日 4 時間以上身を置く場合に育まれており、園舎がないことで、逃げ場のない自然環境に身を置き続けることが《がんばる力》の育ちにつながっている。
	2. 森のようちえんの園児の社会情動的スキルの育ちに影響を与える要因 －園での生活経験と保護者のかかわりに焦点を当てて－	単	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢第 76 号	12 （12）	森のようちえんに通う子どもの社会情動的スキルの育ちと、その育ちに影響を与える要因を「園での生活経験」と「母親のかかわり」の観点から明らかにした。森のようちえんは自然環境のなかでの自由活動が 8 割以上を占め、既存園と比較し、社会情動的スキルが高い。その要因として、玩具などのない自然環境で「遊びに自分なりの工夫を加える」や「好きなことや得意なことをいかして遊ぶ」といった経験と保護者の子どもの意思を尊重し、受容的に関わることが挙げられた。
	（その他）学会発表 1. 森のようちえんの保育者意識が子どもの育ちに与える影響	単	令和 4 年 5 月	日本保育学会第 75 回大会研究発表論文集	2 （2）	森のようちえんの保育者の意識を検証し、子どもの育ちに与える影響を、既存園の保育者との比較から明らかにした。森のようちえんの保育者が保育で重視していることの 1 位は「自然と触れ合う」であり、「遊びの中で興味を持ったものやこと」などから「豊かな情操や感性」「健康な身体」「人への思いやり」を育み、自然体験を通して主体者としての子どもを育てることに力を入れている。一方、既存園では、「基本的な生活習慣」を身につけ、「友だちを大事に協力」するといった集団の中で協調性のある子どもを育てることに力を入れている。
保育内容総論（単独）	（著書） 1.『教職を目指す人のための教育用語・法規』	共	平成 25 年 3 月 （改訂平成 29 年 3 月）	ミネルヴァ書房	4 （297）	教員志望者等の学生・一般が対象であるため平易な用語解釈を基本とする教育に関する法規とそれに関する用語解説書である。資料として、「教育ニ関スル勅語」や日本および西洋の教育史年表等も巻末に掲載されている。 保育者としての基本用語である以下の用語を解説した。「保育士」「児童福祉法」「児童権利宣言」「幼保一元化」「保育制度」「平和教育」について、解説している。 共著者：広岡義之、猪田裕子、大谷彰子　計 17 名

	2.『新しい幼児教育方法・指導法』改訂	共	平成 25 年 3 月 （改訂平成 29 年 3 月）	ミネルヴァ書房	6 （197）	学生や保育者を対象にした幼児の教育方法や指導法についてのテキスト。 子どもを主体者とした保育のねらいや目標、保育者の姿勢について触れ、子ども観や保育観を構築できるよう解説している。また、保育方法の歴史的変遷について、日本初の幼稚園誕生の時期からの保育内容の変遷を概観し、これからの多様な子どもの個性や差異を尊重し、保育者も含めた育ち合う共同体を築いていく保育の方法について言及している。 （全 12 章） 以下の項目を執筆。 第 2 章　保育方法の本質 1 節　保育の方法とは何か 共著者：広岡義之、大谷彰子他 5 名
	3.『子どもの権利との対話から学ぶ保育内容総論』	共	令和 4 年 4 月	北大路書房	12 （169）	子どもの権利を保障する保育内容について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキスト。保育者として子どもを理解する心持ちやまなざし、保育は子どもからはじまるという基本原則について言及している。また、子どもの発達や生活に即した保育内容、遊びこみや探求につながる保育内容、生きる力を育む保育内容、差異を認め合い育ち合う保育内容について、実例をあげ解説している。動画の QR コードを付け子どもの遊びを通した学びについてグループワーク等で検証できるよう工夫している。 （全 13 章） 以下の項目を執筆。 第 2 章　子どもの育ちに驚き、保育内容との関係性を学ぶ 第 1 節～第 3 節 共著者：森真理、猪田裕子、大谷彰子他 7 名
	（学術論文） 1. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力－保護者アンケートによる既存園との比較より－	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	15 （15）	森のようちえんの自然を通した保育方法での、子どもの生活習慣や学びに向かう力などの育ちの特性を、既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちは、《がんばる力》《自己主張》に優れ、《協調性》《自己抑制》に弱さがあることが明らかとなった。《がんばる力》は、自然環境に関わる時間に影響を受け、森（自然）を主たる生活の場所とし 1 日 4 時間以上身を置く場合に育まれており、園舎がないことで、逃げ場のない自然環境に身を置き続けることが《がんばる力》の育ちにつながっている。
	2. 森のようちえんの園児の社会情動的スキルの育ちに影	単	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢第 76 号	12 （12）	森のようちえんに通う子どもの社会情動的スキルの育ちと、その育ちに影響を与える要因を「園での生活経験」と「母親の

	響を与える要因 －園での生活経験と保護者のかかわりに焦点を当てて－					かかわり」の観点から明らかにした。森のようちえんは自然環境のなかでの自由活動が８割以上を占め、既存園と比較し、社会情動的スキルが高い。その要因として、玩具などのない自然環境で「遊びに自分なりの工夫を加える」や「好きなことや得意なことをいかして遊ぶ」といった経験と保護者の子どもの意思を尊重し、受容的に関わることが挙げられた。
	（その他）学会発表 1. 森のようちえんの保育者意識が子どもの育ちに与える影響	単	令和４年５月	日本保育学会第 75 回大会研究発表論文集	2 (2)	森のようちえんの保育者の意識を検証し、子どもの育ちに与える影響を、既存園の保育者との比較から明らかにした。森のようちえんの保育者が保育で重視していることの 1 位は「自然と触れ合う」であり、「遊びの中で興味を持ったものやこと」などから「豊かな情操や感性」「健康な身体」「人への思いやり」を育み、自然体験を通して主体者としての子どもを育てることに力を入れている。一方、既存園では、「基本的な生活習慣」を身につけ、「友だちを大事に協力」するといった集団の中で協調性のある子どもを育てることに力を入れている。
保育内容Ⅳ言葉（単独）	（学術論文） 1. 学生・赤ちゃん相互の言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験－母親・学生の子ども理解の視点比較から－	単	平成 31 年３月	芦屋学園短期大学紀要 45 号	21 (21)	乳幼児ふれあい体験を通し、学生の非言語メッセージ理解の深化と、赤ちゃんの母親以外の人とのふれあいが、言葉の育ちに繋がるのかを検証することであった。赤ちゃんは、学生と関わる際、信用できる人かを母親の様子を見て、相手を見極めている。そして、目を合わせ、学生に働きかけを促すきっかけ行動、誘いかけをおこない、非言語メッセージを意図的道具性として使用し、そのサインに学生との間で通用する協約性を感じ、その子独自の原言語を使用し、共感し、愛着・安心できる関係を築いている。
	2. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力－保護者アンケートによる既存園との比較より－	単	令和３年３月	芦屋大学論叢第 74 号	15 (15)	森のようちえんの自然を通した保育方法での、子どもの生活習慣や学びに向かう力などの育ちの特性を、既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちの言葉に関する育ちについて、挨拶やお礼を言える力、自分がしたいことや、してほしいことを大人に頼める力、人の話を聞く力、言葉遊びの力、自分の言葉で順序立ててわかりやすく話す力に優れ、文字を書いたり読んだりする力に弱さがあることが明らかとなった。
	（その他）学会発表 1.言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験	単	平成 30 年５月	日本保育学会第 71 回発表要旨集	2 (2)	乳幼児ふれあい体験を通して、赤ちゃんの言語、非言語メッセージを学生と母親はどのような視点で「聞き」理解しているのか検証した。学生は非言語メッセー

						ジを丁寧に読み取り、赤ちゃんの「笑顔」を目指して不安な感情に共感、代弁し言葉の育ちの基礎としての心の通い合いが認められた。しかし、笑顔になることを目標とした課題解決型の援助になっており、泣くことを自己表現と肯定的に捉え、関係構築を成長とみる学生は少数であった。一方、母親は赤ちゃんが親以外の他者との関係を成長と捉え喜びとしている。 （執筆担当部分:研究目的、研究方法、結果、考察。企画、データ収集、執筆を担当し、内容の検討、考察を共同研究として行った。） 共著者:大谷彰子、木下隆志、大江まゆ子、岸本朝予
保育内容指導法（オムニバス）	（著書） 1.『新しい幼児教育方法・指導法』改訂	共	平成25年3月 （改訂平成29年3月）	ミネルヴァ書房	6 （197）	学生や保育者を対象にした幼児の教育方法や指導法についてのテキスト。 子どもを主体者とした保育のねらいや目標、保育者の姿勢について触れ、子ども観や保育観を構築できるよう解説している。また、保育方法の歴史的変遷について、日本初の幼稚園誕生の時期からの保育内容の変遷を概観し、これからの多様な子どもの個性や差異を尊重し、保育者も含めた育ち合う共同体を築いていく保育の方法について言及している。 （全12章） 以下の項目を執筆。 第2章　保育方法の本質 1節　保育の方法とは何か 共著者:広岡義之、大谷彰子他5名
	2.『子どもの権利との対話から学ぶ保育内容総論』	共	令和4年4月	北大路書房	12 （169）	子どもの権利を保障する保育内容について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキスト。保育者として子どもを理解する心持ちやまなざし、保育は子どもからはじまるという基本原則について言及している。また、子どもの発達や生活に即した保育内容、遊びこみや探求につながる保育内容、生きる力を育む保育内容、差異を認め合い育ち合う保育内容について、実例をあげ解説している。 （全13章） 以下の項目を執筆。 第2章　子どもの育ちに驚き、保育内容との関係性を学ぶ 第1節～第3節 共著者:森真理、猪田裕子、大谷彰子他7名
	（学術論文） 1. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力－	単	令和3年3月	芦屋大学論叢第74号	15 （15）	森のようちえんの自然を通した保育方法での、子どもの生活習慣や学びに向かう力などの育ちの特性を、既存園と比較

	保護者アンケートによる既存園との比較より－					することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちは、《がんばる力》《自己主張》に優れ、《協調性》《自己抑制》に弱さがあることが明らかとなった。《がんばる力》は、自然環境に関わる時間に影響を受け、森（自然）を主たる生活の場所とし１日４時間以上身を置く場合に育まれており、園舎がないことで、逃げ場のない自然環境に身を置き続けることが《がんばる力》の育ちにつながっている。
	（その他）学会発表 1. 森のようちえんの保育者意識が子どもの育ちに与える影響	単	令和４年５月	日本保育学会第 75 回大会研究発表論文集	2 （2）	森のようちえんの保育者の意識を検証し、子どもの育ちに与える影響を、既存園の保育者との比較から明らかにした。森のようちえんの子どもは、既存園の子どもと比較し非認知能力の育ちに優れている。その森のようちえんの保育者が保育で重視していることの 1 位は「自然と触れ合う」であり、「遊びの中で興味を持ったものやこと」などから「豊かな情操や感性」「健康な身体」「人への思いやり」を育むことをねらいとした保育を行っており、主体者としての子どもを育てることに力を入れている。一方、既存園では、「基本的な生活習慣」を身につけ、「友だちを大事に協力」するといった集団の中で協調性のある子どもを育てることを重視した保育を行っている。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　福山 恵美子

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
特別支援教育総論	（著書） 1.特別支援教育総論	共	平成 26 年 10 月	風間書房	本書は、特別支援教育の全容を理解しやすくするために、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、言語障害、発達障害、情緒障害、重複障害のそれぞれの障害ごとにその歴史、心理、・生理・病理、教育課程・指導法、検査法を体系的にまとめたものである。筆者は知的障害教育の歴史を執筆した。 編著：守屋國光 分担執筆：山本晃、金森裕治、中村貴志、杉田律子、西山健、井坂行男、福山恵美子、藤田裕司、吉田昌義、武部綾子、小田浩伸、徳永亜希雄、行本舞子、平賀健太郎、横田雅史、上村逸子、小坂美鶴、山下光、小西嘉朗、高田昭夫、須田正信、冨永光昭、氏間和仁 pp.133-143（498 項）
	（学術論文） 2.知的障がい特別支援学校におけるティーム・ティーチングに関する実践的な研究－授業分析とATの支援に焦点をあてて－」第Ⅰ報～第Ⅲ報	単	第Ⅰ報 平成 26 年 9 月	大阪教育大学紀要第Ⅳ部門 教科教育 63 巻第 1 号	ティーム・ティーチングの歴史や課題を踏まえ、より効果的な「ATの支援評価」表及び「長所項目」表を作成した。 pp.155 -169
		単	第Ⅱ報 平成 27 年 9 月	大阪教育大学紀要第Ⅴ部門 教科教育 第 64 巻第 1 号	特別支援学校の授業をこれらの表を活用し、授業の中で効果的なティーム・ティーチングが行われていることを明らかにした。 pp.85-98
		単	第Ⅲ報 平成 28 年 3 月	大阪教育大学紀要第Ⅴ部門教科教育	授業分析し、授業の特徴、「ATの支援評価」表を活用してその変容を探った。 pp.75-91

				第 64 巻第 2 号	
	（著書） 3.保育と表現	共	平成 27 年 4 月	嵯峨野書院	第1章から第 12 章で成り立っている。筆者は、第 11 章、1 節、2 節において、聾重複児が指文字や簡単な手話を使用して、ことばを獲得した事例について述べた。（編著：石上浩美 分担執筆：矢野正、吉井英博、小松正史、長尾牧子、藤崎亜由子、藤井真理、手良村昭子、澤田真弓、渕田陽子、宮前佳子、福山恵美子、池永真義） pp.90-94（108 項） 第 11 章 1 節～2 節
	（学術論文） 4. 特別支援教育におけるティーム・ティーチングに関する一考察―知的障害特別支援学校におけるティーム・ティーチングの長所項目表と AT の支援評価表作成を通して―	単	平成 30 年 3 月	大阪総合保育大学紀要 第 12 号	第Ⅰ章では、ティーム・ティーチングの定義・歴史を述べた。第Ⅱ章では、知的障害の特別支援学校のティーム・ティーチングの課題について検討した。第Ⅲ章では、先行研究からティーム・ティーチングの長所項目表の作成の過程、第Ⅳ章では、AT の支援評価表の作成の経緯を述べた。 pp.111-132
	5.特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究―共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探って―	単	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院 博士学位論文	特別支援教育の現状に鑑み、通常学級及び特別支援学校の授業における T・T の実態と課題、専門スタッフ、外部人材が参画している T・T の実態と課題を明らかにするとともに、授業における T・T から多様な人材が教育活動に参画する T・T へと視点を広げ、共生社会を見据えた T・T のあり方を探った。
	6.高等教育における障害学生支援-先行研究から見出された支援に着目して-	単	令和 2 年 12 月	発達人間学研究 生涯発達科学会 第 20 巻 第 2 号	高等教育における障害学生支援に関する先行研究では、当事者の課題、家庭や地域社会の課題等を挙げ、大学においても適切な支援の提供や対応が今後の課題であると指摘している。このことを踏まえ、本研究では先行研究から見出された支援を、「支援する者」「支援のあり方」「支援の場」に整理し、障害学生支援について検

					討した。特に私立小規模大学においては、小規模ならではの細やかで顔が見える支援の実施が明らかになった。さらに多様な学生一人一人の教育的ニーズに応えるべく、大学も変わっていかなければならないことの新たな気づきを得た。 pp.45-60

研究業績等に関する事項（5 年以内）				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1.大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	令和元年 4 月	開成出版株式会社	大学生として必要な心構え、一般常識、実習に向けて及び教員として働くための基礎知識を簡潔に記載している。筆者は特別支援学校での教育実習、現場で使え割れる用語について担当した。p.48,49,51,57,61,62（75 項） 監修：笠原清次,渡康彦 編者：石田愛子,竹安知枝 著者：安藝雅美,大江まゆ子,大谷彰子,木下隆志,種田香,丹下秀夫,福山恵美子
【学術論文】 1. 特殊教育から特別支援教育への転換ーその歴史的背景と近年の動向ー （査読付）	単	平成 29 年 3 月	大阪総合保育大学紀要第 11 号	第Ⅰ章では、ノーマライゼーションの理念ニィリエのノーマライゼーションの思想と国連及び日本におけるノーマライゼーション実現のための動向について述べた。第Ⅱ章では、国際連合及び日本における障害者施策について述べた。第Ⅲ章では、障害の概念の変遷として、ICIDH から ICF への転換の経緯、 ICF の各要素について述べた。第Ⅳ章では、教育の場に注目しながら特別支援教育に至るまでの歴史的経緯について述べた。 pp.91-113
2. 聾重複児のコミュニケーション指導の事例 （査読付）	単	平成 30 年 2 月	発達人間学研究 生涯発達科学会 第 18 巻第 1 号	聾重複児のコミュニケーション指導をテーマに、ことばの発達、発達の観点、聾重複児のコミュニケーション指導とは、ティーム・ティーチング、聾重複児の実際のコミュニケーション指導を通して考察した。 山中矢展、上村逸子、福山恵美子、小田多佳子

				pp.27-34
3.特別支援教育におけるティーム・ティーチングに関する一考察―知的障害特別支援学校におけるティーム・ティーチングの長所項目表とATの支援評価表作成を通して― （査読付）	単	平成30年3月	大阪総合保育大学紀要　第12号	第Ⅰ章では、T・Tの定義と歴史を述べた。第Ⅱ章では、知的障害特別支援学校のT・Tの課題について先行研究等を通して考察した。第Ⅲ章では、先行研究からT・Tの長所を検討した。第Ⅳ章では、先行研究及び授業分析を通して、AT の支援評価表作成の経緯について述べた。 pp.111-132
4.特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究―共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探って―	単	平成31年3月	大阪総合保育大学大学院　博士学位論文	特別支援教育の現状に鑑み、通常学級及び特別支援学校の授業における T・T の実態と課題、専門スタッフ、外部人材が参画しているT・Tの実態と課題を明らかにするとともに、授業における T・T から多様な人材が教育活動に参画する T・T へと視点を広げ、共生社会を見据えたT・Tのあり方を探った。 pp.1-271
5.高等教育における障害学生支援-先行研究から見出された支援に着目して- （査読付）	単	令和2年12月	発達人間学研究 生涯発達科学会　第20巻　第2号	高等教育における障害学生支援に関する先行研究では、当事者の課題、家庭や地域社会の課題等を挙げ、大学においても適切な支援の提供や対応が今後の課題であると指摘している。このことを踏まえ、本研究では先行研究から見出された支援を、「支援する者」「支援のあり方」「支援の場」に整理し、障害学生支援について検討した。特に私立小規模大学においては、小規模ならではの細やかで顔が見える支援の実施が明らかになった。さらに多様な学生一人一人の教育的ニーズに応えるべく、大学も変わっていかなければならないことの新たな気づきを得た。 福山恵美子、遠藤愛・若林上総、瀧本一夫、古川紀子 pp.45-60

①　教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　毛 利　康 人

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
生活概論（単独）	（著書） 1. 奈良市副読本「奈良と自然」	共5名	平成 17 年 3 月	奈良市教育委員会	34 (67)	奈良市小学校で配布する副読本（総合的な学習や生活科・理科で使用）。 奈良の身近な自然・生き物や奈良のまちの紹介を執筆。 共著：毛利康人、崎山泰彦、梅田真寿美、竹原康彦、森下良介
	2. 奈良市副読本「奈良大好き世界遺産学習」	共14名	平成 26 年 6 月改定	奈良市教育委員会	18 (76)	奈良市立学校で使用する副読本（総合的な学習や生活科・理科で使用）。奈良の身近な自然や生き物、奈良の地域、文化、文化財の紹介を執筆。 共著：河合摩香、大西浩明、勝谷征彦、菊山清美、本車田達郎、森井祐幸、西口美佐子、関東利幸、的場宏純、深澤吉隆、水上雅裕、上田喜彦、毛利康人、中澤静雄
	（学会誌） 1. ESDを視野に入れた奈良市世界遺産学習（奈良市版 ESD）	単	平成 23 年 6 月	理科の教育 日本理科教育学会	3 (71)	理科の教育 2011/06/Vol.60/No.707 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 奈良市立学校で推進している ESD の全体構想について執筆。
	2. SDGS 達成のためのESD ー小学校における実践例―	単	令和元年 10 月	理科の教育 日本理科教育学会	4 (65)	理科の教育 2019/10/Vol.68/No.807 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 奈良市立飛鳥小学校における SDGs達成のための具体的な学習実践事例（生活科・理科・社会科・総合的な学習の時間）について執筆。
	（教育実践記録） 1. 博報賞受賞報告	単（団体代表）	令和 2 年 10 月	博報堂教育財団	1 (20)	奈良市立飛鳥小学校で取り組んでいる「ESDの視点を踏まえた世界遺産学習・地域学習」の実践報告。小学校6年間の学習計画を学習内容とSDGsの達成目標を関連づけた指導計画を作成。生活科、理科、社会科、総合的な学習の時間を中心として、地域の豊かな自然やまちの様子、文化財などを主体的に調べる学習。6年生は

						飛 鳥 地 域 から世 界 をより良 くするために自 分 たちにできることを考 え実行 する、「飛 鳥 スマイル・キッズ（ボランティア活 動 ）」を６年 間 の学 習 の総 仕 上 げとしている。
初等教科教育法Ⅳ【理科】（単独）	（著書） 1. 奈良市副読本「奈良と自然」 2. 奈良市副読本「奈良大好き世界遺産学習」 （学会誌） 1. ESDを視野に入れた奈良市世界遺産学習（奈良市版 ESD） 2. SDGS 達成のためのESD －小学校における実践例―	共5名 共14名 単 単	平成 17 年 3 月 平成 26 年 6 月改定 平成 23 年 6 月 令和元年 10 月	奈良市教育委員会 奈良市教育委員会 理科の教育 日本理科教育学会 理科の教育 日本理科教育学会	34 （67） 18 （76） 3 （71） 4 （65）	再掲（生活科概論） 再掲（生活科概論） 再掲（生活科概論） 再掲（生活科概論）
	3. 令和時代の教育のスタンダード －1人1台タブレット先行実施の最先端の教育状況―	単	令和 3 年 8 月	理科の教育 日本理科教育学会	4 （70）	理科の教育 2021/08/Vol.70/No.829 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 GAGA スクール構想により小学校に 1 人1台のタブレットが配置され、令和時代の教育は大きく変革した。タブレットを活用した最先端の教育状況について報告。

初等教科教育法Ⅴ【生活】（単独	（著書） 1. 奈良市副読本「奈良と自然」	共5名	平成 17 年 3 月	奈良市教育委員会	34 (67)	再掲（生活科概論）
	2. 奈良市副読本「奈良大好き世界遺産学習」	共14名	平成 26 年 6 月改定	奈良市教育委員会	18 (76)	再掲（生活科概論）
	（学会誌） 1. ESDを視野に入れた奈良市世界遺産学習（奈良市版 ESD）	単	平成 23 年 6 月	理科の教育 日本理科教育学会	3 (71)	再掲（生活科概論）
	2. SDGS 達成のためのESD －小学校における実践例―	単	令和元年 10 月	理科の教育 日本理科教育学会	4 (65)	再掲（生活科概論）
	（教育実践記録） 1. 博報賞受賞報	単	令和 2 年 10 月	博報堂教育財団	1 (20)	再掲（生活科概論）
教職論【初等】（単独）	（教育実践記録・研究紀要） 1. 平成 27 年度奈良県小・中学校研究紀要	単	平成 27 年	奈良県小中学校長会	3 (53)	管理職として、教育の今日的な課題を踏まえ、教員の専門性を効果的に活かした校務を分担し、チームとして組織的な学校運営実践、学校が校外の専門家や家庭、地域とより連携するために、法的根拠のある学校運営協議会（コミュニテイ・スクール）設置し、「地域とともにある学校づくり」の実践を執筆。
	2. 第 72 回全国小学校長会研究協議会京都大会	単	令和 2 年	全国連合小学校長会研究協議会	4 (209)	変化が激しい社会、Society5.0 の社会で求められる学校像・教師像を追求し、学校長として取り組んでいる特色ある教育（小中一貫教育、コミュニティ・スクール、世界遺産学習・地域学習、キャリア教育）、そして、誰もが経験したことのない非常事態（新型コロナウイルス禍）における学校運営についての実践研究。
	3.令和時代の教育のスタンダード　－1 人 1 台タブレット先行実施の最先端の教育状況―	単	令和 3 年 8 月	理科の教育 日本理科教育学会	4 (70)	理科の教育 2021/08/Vol.70/No.829 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 GAGA スクール構想により小学校に 1 人1台のタブレットが配置され、令和時代の教育は大きく変革した。タブレットを活用した最先端の教育状況について報告。
	4. 特色ある教育の推進と奈良市小学校校長会　～奈良で学んだことを誇らしげに語る子どもの育成を目指して～	単	令和 3 年 10 月	奈良県教育振興会 やまと		やまと 513 号 奈良市立小学校長会長として、コロナ禍における教育、学校経営の在り方について提言。

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【その他(講演や発表)】 教育講演会 1.保護者研修	単	平成 28 年	PTA 主催	「幼稚園と子育て」
2.コーディネーター研修	単	平成 29 年	奈良市教育委員会主催	「コミュニティ・スクール」
3. 保護者研修	単	令和元年	PTA 主催	「子どもの学び」
4. 家庭教育講座	単	令和 2 年 12 月	奈良県教育振興会主催	「未来を見据えた子育て」
5. 学童保育保護者研修	単	令和 3 年 5 月	学童保育保護者会主催	「子どもの成長を楽しもう！」

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名 武並 朋美

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概 要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
【その他（講演や発表）】	講師	平成 28 年 9 月	「障碍者への権利擁護」住み慣れた街で自分らしくいきていくために	
	講師	平成 28 年 10 月	コスモス兵庫「高齢者・障害者の虐待防止と対応について」	
	講師	平成 29 年 1 月 2 月 3 月	芦屋市生活支援型訪問サービス従事者研修「高齢者の尊厳の保持」	
	講師	平成 30 年 1 月	障害者・高齢者のための意思決定支援フォーラム	
	講師	平成 30 年 1 月	権利擁護支援としての成年後見制度	
	講師	平成 30 年 5 月	芦屋市生活支援型訪問サービス従事者研修「高齢者の尊厳の保持」	
	講師	平成 30 年 9 月	芦屋市老人会連合会「成年後見制度とは～権利擁護で暮らしを支える～」	
	講師	平成 31 年 3 月	通所部会「高齢者虐待と権利擁護」	
	講師	令和 1 年 9 月	「適切な支援」ってどんな支援？～虐待防止と権利擁護～	
	講師	令和 1 年 11 月	「虐待防止と権利擁護～養介護施設従事者等による高齢者虐待の防止」	
	講師	令和 1 年 12 月	「高齢者の権利擁護支援と虐待について考える」	
	講師	令和 2 年 10 月	芦屋川カレッジ「権利擁護と成年後見制度」	
	講師	令和 3 年 8 月	兵庫県介護支援専門員協会 生涯研修課程コース研修	
	講師	令和 3 年 10 月	兵庫県介護支援専門員協会 生涯研修課程コース研修	
	講師	令和 4 年 2 月	ママズケア研修「対人援助職が知っておくべき ICF の基本」	

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　丹下 秀夫

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
中等教科教育法（英語）Ⅰ・Ⅱ	（著書） 1. 大学生活入門	共	令和元年 4 月	開成出版株式会社	8 （75）	幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザインとして児童教育学科の学生の基礎学力及び一般常識の基礎を培うための学習書である。 一般常識の英単語・英語表現として小学校教諭に必要な教室英語に関する基本単語や表現を記載した。 （執筆担当分：知っておきたい英単語・英語表現）
	2. 教育実習ハンドブック	共	令和 2 年 4 月	芦屋大学	4 （71）	本学の学生が教員免許状を取得するにあたり必要な基礎知識や資質向上に必要な内容を織り込んだものである。 筆者は中学校英語科学習指導案（例）として現行教科書単元を取り上げ、教材観・生徒観・指導観、評価規準、単元計画、本時指導案などの具体例を記載した。
教職論（中等）	（実践報告） 1.芦屋大学特別支援教育冬季研修会報告 「保護者とのつながりを求めて」	単	平成 29 年 7 月	芦屋大学	9 （61）	本学特別支援教育冬季研修会での講義内容をまとめた。 筆者の学校現場で扱った事例を紹介しながら、「保護者との良好な人間関係の構築」に必要なものを整理した。 校長、教頭、教諭など様々な立場に課せられた課題対応の役割も整理している。 「学校教育の抱える矛盾との共存」や「義務教育の役割」を見つめ直す機会とした。
	2.英語教育における小中連携	共	平成 29 年 12 月	芦屋大学	12 （111）	小中学校学習指導要領の特徴を整理し外国語教育における小中の接続の重要性」、「絵本や子供向けの歌」などを扱い方」、「聞く力、話す力（やり取り）（発表）、読む力、書く力」の4技能5領域を育

						てる効果的な指導の在り方をまとめている。加えて、「小学校外国語教育の変遷」、「これまでの小学校外国語活動の成果と外国語教育における小中連携」、「新学習指導要領の特徴を背景に様々な指導環境に対応する基礎事項の整理」「国語教育等の他教科との連携を図りながら子どもの気づきを促す指導」「発達段階に応じたインプットの在り方」や「パワーポイントやデジタル教材などICT等の効果的な活用方法」「小学校教師に必要な英語指導者としての資質」に関する授業実践をまとめた。

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1. 大学生活入門 （一般常識　知っておきたい英単語・英語表現 P39～P46）	共	2019 年 4 月1日	開成出版株式会社	幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザインとして児童教育学科の学生の基礎学力及び一般常識の基礎を培うための学習書である。 一般常識の英単語・英語表現として小学校教諭に必要な教室英語に関する基本単語や表現を記載した。
2.教育実習ハンドブック （学習指導案の参考⑦ 中学校英語科学習指導案 （例） P61～P64 ）	共	2020 年 4 月 1 日	芦屋大学	本学の学生が教員免許状を取得するにあたり必要な基礎知識や資質向上に必要な内容を織り込んだものである。 筆者は中学校英語科学習指導案（例）として現行教科書単元を取り上げ、教材観・生徒観・指導観、評価規準、単元計画、本時指導案などの具体例を記載した。
3.芦屋大学臨床教育学部教育ジャーナル　創刊号 P9～14	共	2021 年 3 月 28 日	芦屋大学臨床教育学部	2020 年度に児童教育学科２年生後期授業の選択授業として開設された「教室授業」についての実践をまとめた。 小学校教師が授業や ALT との打ち合わせに等に使う英語を教科書を使いながら学び合い、実践力の基礎を養うことを目標にした。実践の具体と学生の感想も織り込んだものとした。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

【実践報告】 1. 芦屋大学特別支援教育冬季研修会報告 「保護者とのつながりを求めて」	単	平成 29 年 7 月 18 日	芦屋大学論叢第 67 号 （P53～61）	本学特別支援教育冬季研修会での講義内容をまとめた。 筆者の学校現場で扱った事例を紹介しながら、「保護者との良好な人間関係の構築」に必要なものを整理した。 校長、教頭、教諭など様々な立場に課せられた課題対応の役割も整理している。 「学校教育の抱える矛盾との共存」や「義務教育の役割」を見つめ直す機会とした。
2. 英語教育における小中連携	単	平成 29 年 12 月 18 日	芦屋大学論叢第 68 号 （P99～P111）	小中学校学習指導要領の特徴を整理し外国語教育における小中の接続の重要性」、「絵本や子供向けの歌」などを扱い方」、「聞く力、話す力（やり取り）（発表）、読む力、書く力」の4技能5領域を育てる効果的な指導の在り方をまとめている。加えて、「小学校外国語教育の変遷」、「これまでの小学校外国語活動の成果と外国語教育における小中連携」、「新学習指導要領の特徴を背景に様々な指導環境に対応する基礎事項の整理」「国語教育等の他教科との連携を図りながら子どもの気づきを促す指導」「発達段階に応じたインプットの在り方」や「パワーポイントやデジタル教材などICT等の効果的な活用方法」「小学校教師に必要な英語指導者としての資質」に関する授業実践をまとめた。
【その他（講演や発表）】 1. 芦屋大学夏季研修講座講師	単	平成 27 年 8 月	芦屋大学教育研究所	テーマ 「学校現場における生徒指導の課題」 中学校現場での生徒指導に係る体験を紹介し、多感期の生徒指導の在り方を示唆した
2. 芦屋大学冬季研修講座講師		平成 29 年2月	芦屋大学教育研究所	テーマ 「保護者とのつながりを求めて」 中学校現場での特別支援教育に係る実践例から生徒支援の在り方や課題を提示した。
3. 平成 29 年度猪名川町学校園経営研究会講師	単	平成 29 年 6 月 （2017）	猪名川町教育教育委員会	テーマ 「学校運営におけるそれぞれの職の在り方」

				学校教育法 37 条にある職の違いを軸に、管理職を目指す教員を対象に、生徒の個性を伸長する学校の在り方や課題を提示した。
4. 芦屋市小中学校教科等研究会講師	単	平成 30 年 10 月（2018）	芦屋市立小中学校教科等研究会	テーマ「英語教育の小中連携の在り方」英語の授業構築における小中の連携の在り方を具体的な教材を提示しながら示唆した。小中で共通に扱える題材を小中学校教員を対象に提示した。
5. 芦屋市立山手中学校授業研究会講師	単	令和 2 年 10 月（2019）	芦屋市立山手中学校	テーマ「主体的に自らを深める授業づくり」 中学 1 年生の授業を参観した後、小中連携の視点から具体的な英語の授業づくりについて助言した。
6. 芦屋大学　教員免許状更新講習会授業		令和 3 年 8 月 5 日	芦屋大学	教室英語（幼児・児童）の一例（Classroom English for beginners）として、幼稚園・小学校教諭の希望者を対象として授業を実施した。小学校の授業で使う教室英語を使いながら、ゲームや CLIL に関する授業例なども提示した。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　中村 整七

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要 （共著の場合は全員の著者名を記載） （共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
数学概論	（教育実践記録等） 1.平成 23･24 年度 芦屋市立山手中学校研究紀要 平成 23 年 平成 24 年	共	平成 24 年 3 月 平成 25 年 3 月	芦屋市立山手中学校		学校教育目標・教育課程・人権教育・生徒指導・授業研究などまとめ発刊した。授業研究では、「基礎学力の定着を図り，主体的に学ぶ力を育てる」ための教育課程づくりの研究実践をまとめた。特に、数学科における授業研究では，「学習集団における核となる生徒への指導方法の工夫を視点にした研究を行った際に、「教師用授業チェックリスト」など，どの生徒にもわかりやい学習にするための指導者の細やかな方策立案と運用に係る指導助言をし、実践記録と考察を監修した。1～4P 中村整七・今村一美・大石健二・坪井政人・比嘉美智子・米田直樹・村上秀作・上月ちひろ
	（その他） 1.平成 28 年度 芦屋市教育研究部会委嘱研究報告書	共	平成 29 年 3 月	打出教育文化センター	150	芦屋市教育委員会が研究を委嘱する「ユニバーサルデザイン授業づくり部会」の算数数学科の授業研究で「焦点化」「視覚化」「共有化」の3つの視点を意識的に取り入れた実践研究を指導した。子どもの側に立った3つの視点でわかり易さを作る研究成果をリーフレットや報告書にまとめ、報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。 1P中村整七・山下正記・佐伯千紘・八木美子・田淵雅樹・林優也・田中義明・森洋樹・小西三枝
	2.平成 29 年度 芦屋市教育研究部会委嘱研究報告書	共	平成 30 年 3 月	打出教育文化センター	170	芦屋市教育委員会が研究を委嘱する「情報教育部会」の算数数学科の授業で、学習支援ソフト「スカイメニュー」を活用して「誰もが授業で使えるタブレット PC」をテーマにした研究の指導を行う。児童生徒がペアやグループで考えたものを個々のタブレットから大型提示装置に映し出し、それらの考えの共通点や違いを話し合い、

						学びを深めていく授業づくりの成果を報告書にまとめた。これを報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。1P中村整七・柳本耕平・加島太成・坂東龍二・池田兼資・陰山圭一・眞﨑幹雄・伊藤佑輔・今若孝広・大川隼寛・長野伸哉・垣内あゆみ
初等教科教育法Ⅲ（算数）	（教育実践記録等）. 1 平成 28・29 年度芦屋市立打出教育文化センター所報	共	平成 29 年 3 月 平成 30 年 3 月	打出教育文化センター	12 16	芦屋市立学校園教職員の研修等（一般研修・課題別研修 38 講座、新規採用教員研修及び 2～5 年目教員研修 8 講座、教師力向上支援事業）の実施し、研修内容をとりまとめたもの。それぞれを監修した後に冊子化し、教育現場や各教育研究機関に配付した。 教師力向上支援事業においては、算数科1年「大きな数」・2年「長さ」の単元全時間において授業者とともに単元構想を練り、毎時間の指導の実際を考察し、子どもの理解度を観点にした研究を掲載している。 1P中村整七・大林亮・幸谷省吾
	2.平成 25 年度芦屋市立山手小学校研究紀要	共	平成 26 年 3 月	芦屋市立山手小学校	128	教育目標「みんながかがやく」を実現させる研究実践をまとめ発刊した。授業研究では、「共に学びを創り合う子どもを求めて」を研究テーマに算数科の学習における言語活動の充実を目指し、「対話力」を育てるための方策を探る研究に取り組んだ。研究授業を実施するごとに「一般化できる方策」を取りまとめた実践記録を監修したものを掲載している。1～3P 中村整七・栖田千聡・石原恭子・櫃田麻衣・村岡宏美・大森一彦・新屋敷恵美子・三浦望帆・高橋知子・森洋樹・森本良子
	3.平成 27 年度芦屋市立山手小学校研究紀要	共	平成 28 年 3 月	芦屋市立山手小学校	199	教育目標「みんながかがやく」を実現させる研究実践をまとめ発刊した。算数科教育では、子どもたちが、「算数（数学）用語」を駆使して、言葉を生かした対話ができることで知識や技能を更新していくことを観点にした実践研究を行う。考えた道筋を聴き合い、創り合うことで「仲間との応答のある学び」が具現できることを目指した研究実践を監修し掲載している。 1～3P 中村整七・垣内あゆみ・佐伯千紘・塩山利枝・延原勝哉・村岡 宏美・上殿敦子・宮尾陽子・澁谷英明・西嶋大輔・西尾節子

	令和２年度 芦屋大学臨床教育学部教育ジャーナル	単	令和３年３月	芦屋大学	7	実践研究『「算数科」における「主体的・対話的で深い学び」を実現させる指導法に係る一考察』を掲載した。初等教科教育法「算数科」の教育実践の中で「主体的・対話的で深い学び」を算数科の授業でどのように実現させていくのかを学生と共に見つけようとした実践をふり返り、考察したものを掲載した。子どもたちが主体的な学べるようにする指導法、深く考えられるように誘う指導法やその学習過程の創り方などについてまとめている。
教職実践演習（幼・小）	（教育実践記録等） 1.平成 25・26・27 年度 芦屋市立山手小学校「学校要覧」	単	平成 25 年 4 月 平成 26 年 4 月 平成 27 年 4 月	芦屋市立 山手小学校		学校経営の基本的構えを明示し、学校教育目標との関連、目指す地域の姿、目指す学校の姿、目指す家庭の姿を相互に関連づけ、幼児教育との連携を視野に入れて教育課程編成に反映させている。さらに、学校の教育課程において実践する人権教育、授業、特別活動を 3 本柱に据え、年間計画に基づいた具体的な実践の様子を著し考察を加えている。同時に、各学年及び専科における年間目標を監修したものを掲載している。
	2.平成 25・26・27 年度 芦屋市立山手小学校「学校だより」	単	平成 25 年 4 月より平成 28 年 3 月 各月発刊配付	芦屋市立 山手小学校		学校での学習や生活の中で子どもたちの良いところや、入学前から入学を経て成長する具体的な姿などを保護者に宛てて紹介している。また、教育目標「みんながかがやく」を実現させる様々な教育活動の具体的な実践やその意味・価値を記している。毎月刊行し、学校長として目指す教育の在り方を具体的に説明してきたもの。教職員への指導用としても活用してきた。
	3.平成 26 年度 芦屋市立山手小学校研究紀要	共	平成 27 年 3 月	芦屋市立 山手小学校		教育目標「みんながかがやく」を実現させる研究実践をまとめ発刊した。人権教育では、「確かな人権感覚を持ち、互いに認め合い、共に生きる子の育成をはかる」を基本方針にして、7 つ（差別解消、いじめ・心、特別支援、国際理解、平和、男女共生、命）の柱を立て、幼児教育との連携の視点も加えて取り組んだ教育活動の具体的な実践方法と実践記録をまとめ発刊した。1～4P 中村整七・西尾節子・村岡　宏美・佐伯千紘・上殿敦子・宮尾陽子・澁谷英明・西嶋大輔・櫃田麻衣・福本洋子・延原勝哉・中村珠貴

	令和元年度 芦屋大学論叢第72号	共	令和２年３月	芦屋大学		研究論文「学校インターンシップの実態と効果に関する一考察」-芦屋大学と地域の小学校を結ぶ取組を通して-を芦屋大学論叢に掲載した。学校インターシップの活動を通して、学生たちが小学校の教育現場での体験で何を学び、思いがどう変化したのかについて考察し、学生の進路形成にどのように寄与したのかをまとめたものを掲載している。

研究業績等に関する事項（5年以内）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 平成30年度 芦屋市教育研究部会委嘱研究報告書	共	平成31年３月	打出教育文化センター	芦屋市教育委員会が研究を委嘱する「授業改善部会」「外国語教育部会」「特別支援部会」「体力向上部会」「食育部会」の5つの研究部会の成果を報告書にまとめ、報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。 各部会の研究内容の指導と報告書の監修を行った。
令和元年度 芦屋大学論叢第72号	共	令和２年３月	芦屋大学	研究論文「学校インターンシップの実態と効果に関する一考察」-芦屋大学と地域の小学校を結ぶ取組を通して-を芦屋大学論叢に掲載した。学校インターシップの活動を通して、学生たちが小学校の教育現場での体験で何を学び、思いがどう変化したのかについて考察し、学生の進路形成にどのように寄与したのかをまとめたものを掲載している。
令和２年度 芦屋大学臨床教育学部教育ジャーナル創刊号	単	令和３年３月	芦屋大学	実践研究『「算数科」における「主体的・対話的で深い学び」を実現させる指導法に係る一考察』を掲載した。初等教科教育法「算数科」の教育実践の中で「主体的・対話的で深い学び」を算数科の授業でどのように実現させていくのかを学生と共に見つけようとした実践をふり返り、考察したものを掲載した。子どもたちが主体的な学べるようにする指導法、深く考えられるように誘う指導法やその学習過

				程の創り方などについてまとめている。
【その他（講演や発表）】 1. 芦屋市立小中学校新規採用教員研修会 2. 芦屋市 2 年次～5 年次教員研修会		平成 31 年 2 月 12 日 令和元年 5 月 13 日	芦屋市教育委員会主催初任者教員研修会 芦屋市教育委員会主催 2 年次～5 年次教員研修会	初任者の一年間の取り組みのふり返りを基に今後の取り組み方について講話を行う。 「『主体的・対話的で、深い学び』 を実現するために」をテーマにして、新学習指導要領完全実施に伴う授業改善の意義や具体的方法等について講演を行う。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　西 光　　晴 彦

担当授業科目に関する研究業績等

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
情報社会と情報倫理（Ⅰ） ・情報社会と情報倫理（Ⅱ）	マスコミ環境の改善と現代の子ども達へのメディア教育1　現代メディアの状況を踏まえてマス・メディアを考える	単	平成 14 年 11 月	芦屋大学論叢第 37 号	教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。人類の進化・成長過程で言語が生まれ文字が創り出され人間社会のコミュニケーションの媒体となった。科学技術の発達により視聴覚メディアが誕生。更にこれを一斉に電送するマスメディアを開発した。情報化時代は高度通信情報化社会を誕生させた歴史的経緯を論述すると共に、「コミュニケーションとは」についての諸説を紹介している。そしてこれらのマスメディアから発信される膨大な情報を正しく取捨選択する処理能力を養うためのマスメデイア教育の重要性について論究している。
	マスコミ環境の改善と現代の子ども達へのメディア教育 2　現代メディアの状況を踏まえてマス・メディアを考える	単	平成 15 年 3 月	芦屋大学論叢第 38 号	教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。変貌したマスメディアの注目すべき事例(報道)を取り上げ、その報道のあり方が社会に対してどのような影響を与えたのかを検証と考察として論述した。また、これらのことから「ジャーナリズムの倫理」について言及し、更には「言論の自由と知る権利」とは如何なるものなのかについても論述している。また、報道のあり方の問題点とマスメディア(ジャーナリズム)の本来あるべき任務と使命、そして存在意義を確認することによってマスメディアから発信される情報にアジテートされないメディアリテラシーを養成することを論述している。
・視聴覚教育Ⅰ放送教育Ⅱ	:伝達(教育)方法の発達過程とその歴史的背景の一	単	平成 17 年 6 月	芦屋大学創立 40 周年記念論文集Ⅱ	教育と伝達について、その歴史的経緯・発達過程を探りながら、その発達過程の中で、これまで開発された視聴覚教育や

	考察　-視聴覚教育を中心に-				視聴覚教材について紹介している。そしてこれらの視聴覚教材が教育にどのように役立てることができたのかを論究している。また、視聴覚教育・視聴覚教材についての諸説を紹介し、現代の視聴覚教育・視聴覚教材と比較し解説している。そして高度情報通信社会で育った現代の子供たちの教育に視聴覚教育・視聴覚教材は必要であることを論述・展開しているが、これらはあくまでも教育の補助であり、これを活用する教師の役割が重要であることを結論づけている。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1.マス・メディアの大衆操作とメディア教育（その1） 子供の食品(お菓子)選択吟味に与える影響［Communicability と Literacy］	単	平成 4 年 12 月	平成 4 年度日本産業教育研究会研究紀要	教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。現在の子ども達は急激に発達した情報化社会の中で生活している。特にテレビの発達普及により自分から働きかけなくとも容易に情報が得られ、その断片との接触に終始という状況を作ってきた。このために子ども達の学習に対する姿勢は受動的な傾向が強く、無感動であり、探求心に乏しい。しかし情報化社会で育った子ども達の感性に訴えた情報伝達はかえって効果が高められると考える。感性に訴えた情報伝達すなわちテレビを媒体とする情報伝達である。この効果を論究している。
2.マス・メディアの大衆操作とメディア教育（その 2） テレビ・メディアの虚構と現実［Communicability と Literacy］	単	平成 8 年 9 月	芦屋大学論叢 第 25 号	教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。現代の子ども達を取り巻く環境は、その得る情報の質・量共に大人の社会に迫っている。しかも、これらの情報が子ども達に悪影響を与えていることも事実である。そして、この傾向は今後益々深まって行くことは容易に予測される。そこで、本研究の目的はマス・メディアから発信される情報伝達を正しく各々の

				映像メディアや活字メディアと比較判断すると共に取捨選択し、自分のものとして正しく理解するためのリテラシー(Literacy「情報処理能力」)を養成するためのメディア教育の必要性と、そのあり方と効果について報告するものであるが、現代メディアの状況を踏まえてマス・コミュニケーションを考える(近年の事例を検証しながら報道のあり方に一石を投じる)ことによって、マス・メディア(情報発信者)に警鐘を鳴らし、本来あるべきマス・メディア(ジャーナリズム)の使命と存在意義を確認し、その問題解決のための方途を論述してゆきたい。
3.伝達(教育)方法の発達の一考察 視聴覚教育の史的展開を中心に	単	平成 10 年 8 月	大阪府立小学校・科学教育部(視聴覚教育分科会)特別紀要	当然のこととして視聴覚教材を活用した教育伝達(映像記号伝達)は、これをまったく活用しなかった教育伝達(文字記号伝達)よりも、その効果が高いのは自明の理である。このことは文字だけによるコミュニケーションと大きく異なることであり、文字は原則として就学することによってはじめて教えられ、文字と共に難しい意味や法則・論理を学んでいくのであるが、現代の情報化社会で生きる子ども達は就学以前の家庭のなかで、無意識の中で映像記号伝達(テレビが中心)を習得しているのである。 そこで、人類がコミュニケーションを取る手段として言語や文字を開発してきた経緯と知識の伝達(教育)方法がどのように発達してきたのか、また、その過程の中で開発された視聴覚教育(教材)は、どのような必要性で誕生したのか、そして、代表的な学者や教育者の諸説の解説を通して、その発展過程と歴史的背景と意義を探ることによって現在の伝達(教育)に役立てようとするものである。
4.小学生における情報機器(コンピュータ・放送機器)に関する実態調査研究	共	平成 11 年 5 月	平成 11 年度日本産業教育研究会研究紀要	情報機器(コンピュータ・放送教材)を活用することによって、学習者である子供たちは、新鮮な感動を得ることができるのではないかと考えることができ

				る。そしてこのことによって、学習意欲が高められ、事物事象の認識を容易にさせるとともに、クリエイティブな思考と発展的な学習を促すことにつながると思われる。そして、何よりもこれらの情報機器(コンピュータ・放送教材)を正しく活用することによって、洪水のように氾濫するさまざまな情報を正しく比較判断するリテラシィー(Literacy)も養成することになると考えられるのではないか。 現代を生きる子供たちは情報機器に関して、どの程度の興味や知識を持っているのか、そして活用する環境作りはできているのか、また活用しようとしているのかということについて実態調査を行った結果を分析し、その実態を把握することによって、次代を担う子供たちに、少しでも正しい情報機器(コンピュータ・放送教材)の活用の仕方や情報機器(コンピュータ・放送教材)の設置・環境作りに役立ててゆく為の方途を探りゆくものである。
5.マスコミ環境(テレビを中心に)が現代の子ども達に与えた功と罪	単	平成 14 年 5 月	日本産業教育研究会研究紀要	今世紀初頭に開発されたテレビによって、たしかに、コミュニカビリティ(Commun－icability)は高められ、私達の生活は便利になり、世界は狭まった。私達の住んでいる地球の裏側で起こった出来事が、テレビ画面を通じて自宅に伝達され、私達は、それらの情報をもとにして出来事を認識している。しかし、その情報は事実として直接、自分の感覚器で確かめたわけではない。もちろん地球の裏側で起こった出来事を誰もが直接確認することはできないが、いつのまにか私達は、それはテレビ画面に映った一部であるということを忘れている。その出来事が起こるに至るまでの背景や、その土地の環境まで、克明に認識する必要はないかも知れないが、少なくとも私達の生活に直接影響することや、私達の判断によっては社会情勢に変化をもたらすようなことについては慎重な判断と、

				それにともなう行動をしなければならない。　そこで、本研究ではマス・メディアより発信される情報伝達を正しく比較判断するリテラシー(Riteracy)を養成するためのメディア教育の必要性と、そのあり方と効果について報告するものであるが、本稿では、サブタイトルにあるように［マスコミ環境(テレビを中心に)が現在の子ども達に与えた功と罪］について論述してゆきたい。
6.マス・メディアの大衆操作とメディア教育（その3） テレビ・メディアの虚構と現実 ［Communicability と Literacy］	単	平成 25 年 3 月	日本産業科学学会研究論叢　第 18 号	私たちの日常生活での情報源は未だテレビ放送から発信されるものが、その大半を占めているのが現状である。このことから映像による情報伝達の媒体として、凄まじい影響力を持つテレビは弊害も与えていることは紛れもない事実である。家庭の茶の間に座ってテレビを見ながらくつろいでいるだけなのに、実際にはエネルギーを消費しているし、テレビを見すぎると精神活動が低下してしまうという精神科医からの報告もあげられている。また、テレビ映像の持つ特殊技法の発達は虚構と現実の境界をぼかしていることにも気づかねばならない。このことにより、マス・メディア（テレビ放送）より発信される情報伝達を正しく比較判断するリテラシィー(Literacy)を養成するためのメディア教育の必要性を報告するものである。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教　育　研　究　業　績　書

氏　名　　藤　本　　光　司

教職課程における担当授業科目に関する研究業績等

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
中等教科教育法【技術】	（著書）『技術・家庭科【技術分野】』	共	平成 27 年 2 月	開隆堂	主な執筆は、「ガイダンス p2-14」、「材料と加工に関する技術 p20-84」である。本教科書は、全国の中学校技術科で 6 割が利用している文部科学省検定済教科書である。
	『技術・家庭科【技術分野】学習ノート』、開隆堂	編	平成 27 年 11 月発行予定	開隆堂	全国の中学校技術科で生徒が使用する学習用ノートの編著。「ガイダンス：p1-7」、「材料と加工に関する技術：p8-43」、「エネルギー変換に関する技術：p44-63」について、本学卒業のベテラン技術科教員 6 名を招集し、新たな視点による生徒の学び支援の学習ノートとしてまとめた。
	『アクティブラーニングで深める技術科教育（自己肯定感が備わる実践）』	共	平成 27 年 10 月 30 日	開隆堂	グローバル化に対応した学校教育として、個々人の潜在的な能力を最大限に引き出し、よりよい社会を築いていけるような教育が重要である。本著は、技術科教育の意義を改めて見直し、実践的な内容で編集した。「倫理観を養いやさしさを育む情報教育」pp128-135
	『主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ』	編	平成 28 年 4 月 15 日	ぎょうせい	教育学を学ぶ学生、教職に従事している教員に対して、これからの「教学」を考え、その在り方、道筋を示すために教育方法学的な側面から執筆した。全 238 ページ編著

	『技術科教材論』	共	2021.4.26	竹谷書房	問題発見と課題設定の教材化、インストラクショナルデザインを活用した技術科の授業、ADDIE モデルと ARCS モデルによる授業設計、魅力的な授業を提供するための授業設計、チームビルディングなど執筆
	『技術・家庭科（技術分野）』 ※ 文科省検定教科書	共	2021.4	開隆堂出版株式会社	内容 A の「材料と加工の技術」に関する領域を編集
	（学術論文） 藤本光司、他 15 名：「工業高校におけるコミュニケーション演習と能動的学習(1)～(6)	共	平成 26 年 3 月～28 年 3 月	情報コミュニケーション学会 研究報告 CIS（2014～2018）	工業高校の特色を活かし、チーム学習、ものづくりを通して、コミュニケーション能力や表現能力を身につけさせることを目的に授業内容や学習の効果と課題、評価方法について 5 年間の取組を論述した。第 13 回全国大会にて優秀発表賞を受賞
	(教育実践記録等) 「循環型社会形成をめざした環境学習の実践、～ミミズ・コンポストによる給食残菜の堆肥化と野菜の栽培・調理・販売～」	単	平成 19 年 3 月	『シティ・サクセス・ファンド第３回実践報告集』、（財）消費者教育支援センター	技術科の「生物育成に関する技術」における教材として、給食から排出される残菜を活用して、ミミズを育て、そこから生まれた堆肥を活用し生物を育成する学習モデルを作成し循環型環境教育の授業実践を行った。本稿では、その取組についての概要を論じた。 pp.92-95
	「アクティブラーニングに求められる学習成果の測定と活用」	共	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集（京都市立芸術大学）	学習者が教科の到達目標に達したか否かは形成的評価を経て定期考査などで判定される。その過程で情意形成が関連しているが、生徒の自主性について視覚化できる評価の方法論について調査に基づき報告した。 pp18-21

	（著書） 『中学校技術・家庭科地域別教材「技術分野の実践例・授業提案集（近畿編）」』	編	平成 27 年 5 月	開隆堂	本著の編著者として「巻頭言」を執筆し次の学習指導要領の方向性を述べた。近畿地区 2 府 4 県の技術科教員から集めたで教育実践集であり、地域の特色を取り入れた実践でまとめた。技術科全 4 領域を網羅し各地区から 15 編を選んだ教育実践集である。pp2-31
	（学術論文） 「中学校技術科における材料加工分野の研究(1) ―　木工具に視点をおいた教材の考察　―」	共	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 13 回全国大会発表論文集	材料加工分野についての基礎研究として、平成 28 年度から使用される文部科学省検定済の『技術・家庭科(技術分野)』の 3 社に記載された木材加工の「木工具」について比較調査した。その結果、多様に掲載されているものの各社かなりの差が見受けられた。
	「「主体的･対話的で深い学び」に挑む技術科教育の研究(1) ― 兵庫県中学校技術･家庭科教育の研究と試行的取組からの学び ―」	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会 第 33 回年会論文集	次期学習指導要領を教育現場で実践するために、県内の教科部会との共著で投稿した。主に技術科としての「見方・考え方」について、生物育成の内容の授業実践を含めて論述した。
	教員採用試験における専門分野への対応　― オリジナル問題集の制作と学生調査による評価 ―	共	2020.2.29	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	地方自治体が実施する教員採用の 5 都市を対象に調査研究を行った。採用試験の教職問題や各教科に関する問題を分析し、院生と採用試験問題集を制作した。さらに、本学学生に調査を実施して採用試験に関する課題や展望を整理した。
	中学校技術科における SDGs と STEAM 教育との関連(1) ―　理論背景の整理と学習モデルの開発に向けて ―	共	2020.2.29	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	持続可能な開発目標（以下、SDGs）は、昨今、国際的な行動規範として産官学のビジョンに位置づけられている。本稿では、大学教育における教学面での SDGs への方策について、他大学の先進的な取り組みと、本学的に実施できる活動や取り組みを紹介した。

	技術科教育としての異校種連携におけるカリキュラムマネジメント（１） ― エネルギー変換分野における試作モデルの評価と課題 ―	共	2020.2.29	情報コミュニケーション学会 第16回全国大会発表論文集	教科間連携や異校種連携（幼少中など）などカリキュラムマネジメント（ＣＭ）を取り入れた教育活動が注目されている。技術科教育のさらなる可能性を探るためにＣＭを導入することによって得られる成果を探り、これらの理論背景を整理した。また、技術科教育と他教科との関連性や異校種連携の事例紹介と今後の課題並びに評価を述べた。
総合的な学習時間の指導方法	「主体的な学びを支援するためのチーム学習に関する研究，－FFS 理論を活用した学習者特性の基礎調査を通して－」	共	2011.8	日本教育情報学会第 27 回年会論文集	pp. 190−193
	「主体的な学びを支援するためのチーム学習に関する研究(2)－ 二つの世代カテゴリによる，FFS 理論の原因子と特性出現率の分析 －」	共	2012.8	日本教育情報学会第 28 回年会論文集	pp246-247
	「能動的学習による循環型社会の構築をめざした実践研究 －「尼海堆肥」で菜の花を育て、菜種から搾油の環境プロジェクト －」	共	2013.3	情報コミュニケーション学会第 10 回全国大会発表論文集	pp24-25
	「工業高校におけるコミュニケーション演習と能動的学習(1) － ものづくりを通したチーム学習の授業実践 －」	共	2013.3	情報コミュニケーション学会第 10 回全国大会発表論文集	pp131-136
	「工業高校におけるコミュニケーション演習と能動的学習(2) － 自主性尺度得点による 1 年生の調査と生徒の変容について－」	共	2013.3	情報コミュニケーション学会第 10 回全国大会発表論文集	pp131-136
	「バレエ実技のオンライン授業に関	共	令和 3 年 8 月	日本教育情報学会 第 37	実技科目を履修する学習者への指導方法として、リアルタ

	する研究 ― リアルタイム型授業による調査結果と今後の課題 ―」			回年会論文集（岐阜女子大学）	イム型のオンライン授業の展望と課題を報告した。pp404-405
	「グローバル教育の実践に向けて ― イギリス中等教育の教育事情の考察 ―」	共	令和 3 年 8 月	日本教育情報学会 第 37 回年会論文集（岐阜女子大学）	総合的な学習の時間に対して、生徒の国際感覚の育成や教育のグローバル化に対する教育実践について、イギリスの教育現場での取り組みを紹介した。pp390-391
	「バレエ教育の情意面に着目した指導方法の研究（1）」	共	令和 4 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 19 回全国大会発表論文集（青山学院大学 相模原キャンパス）	舞台芸術の側面で学習者の情意的側面の変容について自己肯定感から述べた。特にバレエ芸術の分野において、学習者への指導方法のメリットとデメリットを整理した。pp78-79
	「アーツマネジメントの課題と展望を探る（1）」	共	令和 4 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 19 回全国大会発表論文集（青山学院大学 相模原キャンパス）	舞台芸術において、製作する演目や技術スタッフの活動など、アーツマネジメントの側面より県立劇場におけるマネジメントを紹介した。pp80-81
教育の方法と技術（中等）	（著書）『元気が出る学び力　世の中の本質が見えてくる学びのヒント』	編	平成 23 年 4 月	ぎょうせい	教員が軸とするこれからの教育的視点を論じた。コメニウスなどの古典的教授法はもとより、ピアジェの行動主義やジューイの構成主義の考え方などを現代の教育事例に透かして考える内容を掲載している。さらに、学習者が主体的に学ぶアクティブラーニングの手法として、e-learning や学習環境のラーニングコモンについても執筆した。林徳治、奥野雅和らと編著、pp1-202
	（学術論文）「アクティブラーニングに求められる学習成果の測定と活用」※方法論からのアプローチ（テーマ別セッション）	共	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集、pp18-21	学習者が教科の到達目標に達したか否かの形成的評価について情意形成の側面から自主性の因子分析を行い、高等学校 1 年生と 3 年生の変容を統計分析して研究成果を報告した。

	（教育実践記録）「工業高校におけるコミュニケーション演習と能動的学習（1）～（5）」	共	平成 25 年～平成 27 年	情報コミュニケーション学会第 10 回～13 回全国大会発表論文集	高大連携校での 3 年間の取り組みについて、授業内容、ものづくりを通したコミュニケーション演習、生徒主体の展示活動、チーム学習の効果と課題、などについて報告した。
	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) ― ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて ―	共	2017.3.4	情報コミュニケーション学会 第 14 回全国大会発表論文集	教科教育法で求められる指導内容は、教科の歴史的経緯を理解し、学習指導要領の読み解き、授業の実践力に必要な知識・技能の習得などである。本研究では、ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だてを報告した。
	対話的で深い学びを取入れた自己調整学習の研究 ― 多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響 ―	共	2018.8.24	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	「教育と方法の技術［中等教育］」は、多人数授業であるが対話的で深い学びを展開している。本授業で、形成的に評価した 12 回分のレポート成績をカテゴリ別に分析するとともに自由記述の階層的クラスタ分析を行った。その結果、自己調整学習の理論に示された「書き行動方略」の指導段階で第 4 段階まで到達していることが判明した。
	8. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3) ― 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討 ―	共	2018.3.10	情報コミュニケーション学会 第 15 回全国大会発表論文集	技術科の「材料と加工に関する技術」領域では、設計→試作→検討→製作という新しい授業プロセスが示されている。特に「試作→検討」は、主体的で対話的な深い学びを推進するためのコミュニケーションの単元とも考える。本稿ではインストラクショナルデザインを意識した授業モデルを検討した。

	（著書） 『主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ』	編	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	本著は、知識基盤社会を生き抜く力の学生の学びについて主に教職履修の学生を対象とした著書である。構成主義や行動主義、ガニエの 9 教授事象など基礎・基本的な学習理論を網羅しつつ、アクティブラーニング型授業の設計プロセス(ADDIEモデルやロジックツリーなど)について、これから求められている 21 世紀型能力のキーコンピテンシーを軸に展開している。また、ICT を活用した反転授業や情報モラルの指導方法など、最新の ICT 活用の実践も掲載している。全 238 ページを編著
	（学術論文） 『学習情報研究（2007、3 月号）』、特集：国際交流学習の成功の秘訣、「国際理解教育における成功の秘訣」	共	平成 19 年 3 月	(財)学習ソフトウェア情報研究センター	国際社会では自己を確立し、人権感覚を育み、広い視野で異文化を吸収し、違った立場や違う国の人との共生をめざした資質や能力を育成する必要がある。本稿では、日本人学校や国際協力の教育活動(JICA）について社会教育を軸に論述した。林徳治との共著、pp.9-13、
	（教育実践記録） 「中学校技術科教育におけるエネルギー変換に関する教材研究(1)　－ESD の観点から LED 教材の一考察　－」	共	平成 26 年 11 月	情報コミュニケーション学会　研究報告 CIS Vol.11、No4	中学校技術科において、持続可能な開発のための教育（ESD）の観点からエネルギー変換の領域で扱う教材について考察した。pp14-15
	「中学校技術科における自尊感情育成の研究(1)　－電子黒板の効果的活用法　－」	共	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 13 回全国大会発表論文集	授業に参加できない生徒の中には「意欲」に問題があるのではなく「発達障害」が原因であると推定される者も少なくない。これらの生徒に対する「合理的配慮」についても検討していく必要がある。本稿では、電子黒板（スマートボード）を活用した授業実践について報告した。pp24-27
	「教員免許更新講習の必修領域に関する実践と評価　－ 教育方法学の講座内容を通した	共	令和 3 年 8 月	日本教育情報学会 第 37 回年会論文集（岐阜女子大学）	教職課程で実施している教育方法論について、教員免許更新講習の必修領域で実施した教材内容の実践と評価を検証した。また、講座内容を通し

	異校種間交流と事後調査分析の報告ー」				た異校種間交流と事後調査分析の報告を行った。p378-379
	「新設「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の対応と課題」	共	令和 4 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 19 回全国大会発表論文集（青山学院大学 相模原キャンパス）	令和 4 年度から新設される教職科目、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」に関する全国的な対応状況を調査してシラバス内容を検討した。pp82-83
	「高等学校情報科における効果的な VC 教材の開発と授業実践の研究（目に特性を抱えた生徒を対象として）」	共	令和 4 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 19 回全国大会発表論文集（青山学院大学 相模原キャンパス）	情報教育における指導の留意恬として、目に特性を抱えた生徒が 5%存在している。本稿では、それらの生徒への対応として、VC 教材を開発して支援を行う際の教材の提案を行った。pp84-85
教職実践演習（中等）	（著書） 『必携！相互理解を深めるコミュニケーション実践学（改訂版）』	共	平成 22 年 3 月	ぎょうせい	心理学カウンセリング手法の「アサーション」や地図的概念法（ＫＪ法、強制連結法）など、２１の教材コンテンツ。全教材が 90 分のグループ演習とし、学習者がＰＤＣＡサイクルマネージメントによる振り返り学習が可能な学習者参加型教材。教員が学級経営や授業作りに活用できる配布プリント教材も全ての編に揃えている。林徳治、沖裕貴監修、pp1-186
	（学術論文） 「主体的な学びを支援するためのチーム学習に関する研究」	共	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集	学校の教科指導や特別活動において班編成を軸とした学習をすすめることが多いが、無作為抽出型の班編制では、学習者の情意的特性が偏り、班の活気や学習到達度に影響する場合もある。FFS 理論を活用して中高生のリーダー特性を分析し、リーダータイプの出現率や因子特性を一般社会人と比較した。pp206-207
	プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試み ―小学校学習指	共	2019.2.23	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文	中教審答申（2008）は思考する手順に焦点を当てた思考スキルが注目され、新学習指導要領でも各教科等の特質に応じて、「プログラミ

	導要領改訂において―			集	ング的思考」の育成が求められる。そこで本研究ではプログラミング的思考に関する思考スキルを教科ごとに整理することで、各思考力がどの教科で身に付く機会があるのかを分析し報告した。
	「中学校技術科の教職課程における課題と展望（1）　－ 全国の動向と本学の現状について－」	共	2019.8.24	日本教育情報学会 第34回年会論文集	中等教科教育法（技術科）における教員養成において、本稿では、本教科としての教員養成の課題を概観するとともに、今後の教師力に関する課題と展望について述べた。
	中学校技術科の教職課程における課題と展望（2）－　教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について－	共	2020.8.29	日本教育情報学会 第35回年会論文集	全国の技術科教員養成課程の設置状況を調査し、本コースの免許状取得状況（2011-2018）や採用試験の合否、採用倍率等から本学的な課題や展望を述べた。本稿では、筆者が担当する「中等教科教育法技術Ⅲ（前期）・Ⅳ（後期）」の定期試験の点数と採用試験合否結果をもとに分析を行った。その結果、定期試験の成績別にみると、採用試験の合否によって有意差が表れた。
	家庭科教育の住生活分野における地域とのつながりを意識した学習活動の研究－　学校周辺の住環境調査を通して誰もが快適な暮らしを考える　－	共	2020.8.29	日本教育情報学会 第35回年会論文集	工業高校での「創造基礎」の授業で取り入れていた自主性尺度やFFS理論を取り入れて、チーム分けや生徒自身の成長度を確認した。本稿は、「プロゼロ」を学んだ生徒たちがゼミとは違う授業の中で、その手法をどのように活用し実践しているかを家庭科の授業を通して得た成果を報告した。
	グローバル人材育成を視野に入れた授業の研究（1）－「主体的・対話的で深い学び」を主眼においた海外研修の考察 －	共	2020.8.29	日本教育情報学会 第35回年会論文集	主体的・対話的で深い学びを教育現場で具現化し、グローバル人材の育成を実践可能なものにするための研究として、グローバル人材に求められる資質を考察した。芦屋学園高等学校・中学校が、これまで実践してきた海外研修を振り返り明らかになった課題を提起し

					た。また、海外の授業実践例もふまえたうえで、今後の海外研修が担うべき役割を考察した。
	（教育実践記録）『学習情報研究（2009、3月号）』「Ｗｅｂ活用によるフォトランゲージ手法　～　情報を構造化する力の育成　～」	単	平成21年3月	(財)学習ソフトウェア情報研究センター	Web上に発信された情報を学習教材として活用する場合、その情報の信憑性を精査しなければならない。言語情報の整合性を確認するのは容易であっても、視覚情報が与える影響は意図に反した解釈がなされる場合もある。フォトランゲージ（Photo Language）手法に応用し、授業実践で得た視覚情報の取り扱いに関する知見について述べた。pp1-2
	（学術論文記録）「職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1)　―　ARCSモデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて　―」	共	平成29年3月	情報コミュニケーション学会 第14回全国大会発表論文集	教科教育法で求められる指導内容は、教科の歴史的経緯を理解し、学習指導要領の読み解き、授業の実践力に必要な知識・技能の習得などである。本研究では、15回の授業を通したアクティブラーニングの実施と技術科教員に必要な知識と実践力を対話的かつ主体的に身に付け、深化できる能力を求め、インストラクショナルデザインの知見を取り入れ実践を重ね知識と実践力を効果的に身に付けさせたいと考えた。本稿では、特にARCSモデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だてを報告した。pp28-29
	「教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開（3）― 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの	共	平成30年3月	情報コミュニケーション学会 第15回全国大会発表論文集	中学校技術科の教職科目において、授業設計を行うための授業デザインを論述した。特に、次期学習指導要領に掲載された、設計と試作について、学生たちと取り組んだ試作モデルの製作と授業時数との関連性について述べた。pp149-149

	検討 ―」				
教育実習【技術】	（学術論文記録） 「教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討　―SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて　―」	共	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会 第 32 回年会論文集	教育実習は、実習生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会である。一方で、多くの実習生は教育実習に対して様々な期待とともに悩みや疑問を抱いていることが多い。教育実習用 SNS を通じて様々なコミュニケーション活動を行い、実習に関する情報の共有などに対して積極的な助言や励ましという支援を行った。実習生をはじめ 3 回生においても成果が得られた。教育実習支援モデルについての概要とその成果について報告した。pp24-27
	「中学校技術科の教職課程における課題と展望（1）　― 全国の動向と本学の現状について　―」	共	2019.8.24	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	中等教科教育法（技術科）における教員養成において、本稿では、本教科としての教員養成の課題を概観するとともに、今後の教師力に関する課題と展望について述べた。
	中学校技術科の教職課程における課題と展望（2）― 教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について　―	共	2020.8.29	日本教育情報学会 第 35 回年会論文集	全国の技術科教員養成課程の設置状況を調査し、本コースの免許状取得状況（2011-2018）や採用試験の合否、採用倍率等から本学的な課題や展望を述べた。本稿では、筆者が担当する「中等教科教育法技術Ⅲ（前期）・Ⅳ（後期）」の定期試験の点数と採用試験合否結果をもとに分析を行った。その結果、定期試験の成績別にみると、採用試験の合否によって有意差が表れた。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　池田　　聡

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】1 （著書） 環境教育	共	平成 19 年 3 月 31 日	現代社会と教育 出版元：㈲神戸商大サービス 印刷・製本：㈱サンエー出版	小学校単位の取り組みを通じて、身近な環境教育を、地域性を踏まえ考えた。その例として学校園内に作られた「学校ビオトープ」を取り上げる。環境教育には、自然にふれ、人にふれることによって、他をおもいやる優しい心をもった心豊かな子どもたちが増えてくれることが重要である。本著では、ビオトープを通じての環境教育をまとめている。
【著書】2 （著書） 環境教育とエコツーリズム	単	平成 19 年 3 月 31 日	現代社会と教育 出版元：㈲神戸商大サービス 印刷・製本：㈱サンエー出版	エコツーリズムの定義には、様々な分野、機関、団体（観光、自然保護、地域振興、旅行業等）の考え方があり、明確な定義がないのが現状である。しかし、文献を調べる内にエコツーリズムの定義や目的を考える上で外すことのできない重要な定義事例や目的事例が見つかった。本著では、幾つかの定義例を紹介し、自分なりの解釈をしている。そして、修学旅行での実施の可能性を追究している。
【著書】3 （著書） 内発的動機づけによる大学教育	共	平成 19 年 3 月 31 日	現代社会と教育 出版元：㈲神戸商大サービス 印刷・製本：㈱サンエー出版	今日的な消費者志向の時代を受けた必然的な結果で、大学経営は困難な状況にあると言われている。 消費者志向を完全に受け入れるのか、それとも従来の教育サービスを提供するのかを問題に実例を挙げての定義をおこなって
【著書】4 （著書） チャレンジショップ教育 ーイベント的活動を中心にー	共	平成 19 年 3 月 31 日	現代社会と教育 出版元：㈲神戸商大サービス 印刷・製本：㈱サンエー出版	チャレンジショップ教育を実施している大学を例に挙げ現状の問題と今後、予想される問題の打開策をまとめている。
【著書】5 （著書） ラウンドワンと複合型店舗	共	平成 20 年 3 月 31 日	流通・マーケティング―1 つの契機として― 出版元：株式会社一灯館 印刷・製本：藤成印刷㈱	近年の多様化する娯楽産業の中からボーリング業界に焦点を絞り、業界最大手の「ラウンドワン」にテーマを絞り込んだ。 その歴史と複合型店舗の可能性及び今後の発展性をまとめている。
【著書】6 （著書） 温暖化対策とエコツーリズム	共	平成 20 年 5 月 30 日	地域経済と民族文化 日本民族経済学会編 出版社：現代図書	地球温暖化の原因を考察し、その対策に「エコツーリズム」を選択した。「エコツーリズム」には、その効果においての即効性は望めないが、実施の方法によっては持続的な効果を得ることができる。そのための人材育成の充実を中心に、教える側と教わる側の環境認識についての考察をおこなった。
【著書】7 （著書） 大学生の基礎教養	編著	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教養 出版元：株式会社一灯館 印刷・製本：藤成印刷株式会社 編著者：池田聡	昨今の大学教員には研究だけではなく、教育も重要な課題となっておりまた、テキスト作成に係わる業績も問われるようになった。この様な状況の中で他大学の教員や民間有識者の協力の下、様々な分野から大学生の基礎教養を考えてもらい、一冊にまとめている。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

【著書】8 （著書） 環境問題と教育の重要性について	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教養 出版元：株式会社一灯館 印刷・製本：藤成印刷株式会社 編著者：池田聡	メディアを通して報道される環境問題は正しい知識を持っていなければ誤った解釈をしかねない。そのためには、学校での環境教育が重要となり、各年代に合わせた教育も重要となる。このような考えから学校教育における体験型の教育を考察している。
【著書】9 （著書） 学校教育における旅行型環境教育	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教養 出版元：株式会社一灯館 印刷・製本：藤成印刷株式会社 編著者：池田聡	実践型の環境教育であるビオトープの重要性について学校教育を通して考え、得た知識をいかに教育的効果が高い修学旅行に活かせるのかを考察している。
【著書】10 （著書） 心配り・心遣いを学ぶ	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教養 出版元：株式会社一灯館 印刷・製本：藤成印刷株式会社 編著者：池田聡	人間関係の希薄化が影響でコミュニケーション能力の低下が問題となっている。学生時代にはこの問題を解決する絶好の機会である。大学生活での気配り・心遣いを考察している。
【著書】11 （著書） 継承　―　夢へのスタート　―	単	平成 24 年 3 月 10 日	芦屋大学卒の事業家たちの教え 出版元：株式会社晃洋書房 発行者：上田芳樹 印刷者：藤森秀夫 編者：芦屋大学経営教育学部 芦屋大学ビジネス研究 センター	芦屋大学で学び卒業後に事業家として活躍する数名をピックアップし、在学生に講義の一環として体験談を語ったものであり、本著は山陽企業株式会社の代表取締役である吉岡一博氏の経営哲学や経営方針をインタビュー形式でまとめたものでる。
【学術論文】1 （修士論文） 地球の砂漠化の現状と原因に関する一考察 －中国大陸を中心として－	単	平成 14 年 3 月 31 日	芦屋大学大学院	中華人民共和国山西省大同における植林作業を通して、中国の一般的な農民の生活と水質源の枯渇の深刻さを身近に感じた。また食糧問題と砂漠化の現状の根底は同質であるとの視点から、特に植林の重要性について考察した
【学術論文】2 （学術論文） 環境教育に関する一考察 －中学生の環境認識－	単	平成 18 年 3 月 31 日	芦屋大学論叢 第 43 号	以前に中学生を対象に実施したアンケートを基に生徒とその家族の環境問題についての認識と今後の環境教育についてのあり方について考察している。
【学術論文】3 （学術論文） 環境教育とエコツーリズム －学校教育を中心として－	単	平成 20 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 13 号 発行所：日本産業科学学会（本部事務局） 出版所：株式会社荒川印刷	平成 19 年度 8 月に名古屋学院大学にて行われた日本産業科学学会全国大会にて報告したテーマをまとめた著書。内容としては、昨今、問題になっている温暖化対策のひとつの打開策としてエコツーリズムを取り上げて、学校教育、特に修学旅行においての実施の可能性と問題点の提議をおこなっている。
【学術論文】4 （学術論文） 環境初年度における国際会議と温暖化対策 ―　エコツーリズムを中心として　―	単	平成 21 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 14 号 発行所：日本産業科学学会（本部事務局） 出版所：株式会社荒川印刷	気候変動枠組み条約第 3 回締約国会合（COP3）で採択されている「京都議定書」では温室効果ガスの排出量を 2008 年度から 2013 年の 5 年間で各国とも規定の数量を削減することが決定している。この影響を受け、2008 年度はメディアを通して環境問題に対する様々な対策が報道され国民の環境に対する認識も高まっている。 2008 年度を環境初年度と位置づけ、国際会議のあり方を考えエコツーリズムを中心とした環境対策について考察している

【学術論文】5 （学術論文） 児童虐待の現状と防止対策 ―富山県を中心として―	共	平成 22 年 12 月 12 日	芦屋大学論叢 第 54 号	児童虐待の現状を中心に、虐待の種類、母親の育児負担、その問題の原因を考察し、現場の最前線で問題に直面している児童福祉司・子育て支援職員等の人物にヒアリング調査し、富山県を中心に考察している。
【学術論文】6 （学術論文） 長期宿泊における体験型環境教育 ―青少年の現代的課題を中心として―	単	平成 25 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 18 号 発行所：日本産業科学学会（本部事務局） 出版所：株式会社荒川印刷	長期集団体験活動において体験型環境教育の意義と目的について青少年の現代的課題と問題点を中心に今後の活動についての考察をしている。
【学術論文】7 （学術論文） 発育期における子どもの現代的運動課題について	共	平成 26 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 19 号 発行所：日本産業科学学会（本部事務局） 出版所：株式会社荒川印刷	生活環境の変化に伴い子どもの発育と運動能力、健康問題を課題とし、あそび・レクリエーション・自然活動を通して問題解決を考察している。
【学術論文】8 （学術論文） ケース・メソッド教育とキャリア教育	共	平成 27 年 3 月 31 日	高田短期大学紀要 第 33 号	ケース・メソッド教育を用いた実践的なキャリア教育について事例を参考に今後の発展性を考察している。
【学術論文】9 （学術論文） スポーツツーリズムの現状と課	単	平成 27 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 20 号 発行所：日本産業科学学会 出版所：株式会社荒川印刷	これまで技術大国・物づくり大国として国際社会の中で不動の位置を確立してきた我が国は、東日本大震災による原発事故以降第 3 次産業に着目してきた。2007 年観光立国基本法が施行されさらなる方向性の変化が急速に進みつつある。本研究はスポーツに特化した旅行形態である「スポーツツーリズム」の現状と課題を主題とし、2020 年に東京で開催が決定したオリンピック・パラリンピックの波及効果についても今後の研究としている。
【学術論文】10 （学術論文） 初年次教育におけるアクティブラーニングの研究（2） ―5 年間の「大学生活入門」を通した省察―	共	平成 28 年 8 月 20 日	日本教育情報学会 第 32 回年会誌	ここ数年の学生調査・学習評価について概観するとともに新たに授業に加えた「18 歳選挙・有権者教育」について、スマホ・REAS（リアルタイム評価支援システム）を活用したアクティブラーニングについての見解。
【学術論文】11 （学術論文） 環境の構成と人間社会～人為起因と自然起因～	単	平成 29 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 22 号 発行所：日本産業科学学会 出版所：株式会社荒川印刷	人間社会から考察する環境の構成を明確にし、地球規模での環境変動と時系列、産業革命以降の環境問題、地球温暖化を中心に見解を考察している。
【学術論文】12 （学術論文） 初年次教育におけるアクティブラーニングの研究（3） ―運用マネジメントおよび学習活動の質的評価に関する考察―	共	平成 29 年 8 月 20 日	日本教育情報学会 第 33 回年会誌	ここ数年の学生調査・学習評価について概観するとともに新たに授業に加えた「18 歳選挙・有権者教育」について、スマホ・REAS（リアルタイム評価支援システム）を活用したアクティブラーニングについての見解。（2）の継続研究。

【学術論文】13 （学術論文） スマート化に対する大学生の意識調査と考察	共	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会誌	日本教育情報学会第 35 回年会報告をまとめた内容でスマート化社会を大学生がどの様に捉えているかの調査をまとめたものである。
【学術論文】14 （学術論文） 地域環境と安全教育 ―社会性昆虫とその特性―	共	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会誌	日本教育情報学会第 35 回年会報告をまとめたものである。社会性昆虫の中からハチにテーマを絞り、その危険性、習性等対策と駆除についてまとめたものである。
【学術論文】15 （学術論文） 「中学校技術科の教材開発におけるSDGsとの関連(1) ―理論背景の整理と学習モデルの開発に向けて―」	共	令和 2 年 3 月 1 日	情報コミュニケーション学会 第 17 回全国大会 発表論文集	
【学術論文】16 （学術論文） 江戸時代と現代の環境問題に関する考察	単	令和 2 年 8 月 22 日	日本教育情報学会 第 36 回年会誌	現代の大量消費型社会とは大きく異なり、わずかなエネルギーしか消費しなかった江戸時代に注目しており、自然的起因と人為的起因の内訳は人為的起因を中心に述べ、省エネに貢献したであろう当時の多様な職種を中心に循環型社会の可能性について考察している。
【学術論文】17 （学術論文） 江戸時代の循環型社会―衣類と灰その中心的人物―	単	令和 3 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第	人為的起因の視点から現在とは異なり、循環型社会が構築できていた江戸時代を中心に、衣類における最終形態とも呼べる「灰」に注目し、この循環型社会構築の中心となった人物を中心に論じている。
【学術論文】18 （学術論文） 持続可能な会社経営についての一考察 - 経営者アンケートを中心として-	単	令和 3 年 8 月 22 日	日本教育情報学会 第 37 回年会誌	持続可能な社会の実現を目指し、近年多くの企業が積極的にSDGsを取り入れている。 会社経営者 30 名からのアンケートを元に CSR など企業の社会的責任についての考え方や今後の会社経営について多様な業種の経営者からその方向性についての考え方をまとめたものである。
【学術論文】19 （学術論文） 商人の精神と理念についての一考察 ー『日本永代蔵』を中心としてー	単	令和 4 年 3 月 31 日	芦屋大学論叢 第 75 号	本論では，持続可能な会社経営について，井原西鶴の『日本永代蔵』を参照しながら論じている。そこに登場する江戸時代の代表的な商人の中から，三井八郎右衛門高平をモデルとした「昔は掛算今は当座銀」（巻一ノ四）と富山家をモデルとした「才覚を笠に着る大黒」（巻二ノ三）を比較している。どちらのモデルになった商人も伊勢商人であり，江戸を代表する豪商で同じ伊勢を地盤として，木綿を商品として扱いながら，現在も継続する企業と残念ながらそうはならなかった企業の違いは何なのかを明確にし，持続可能な会社経営における手掛かりを考察している。
【その他（講演や発表）】1 （学会報告） 某企業における旅費精算について	―	平成 16 年 4 月 24 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：滋賀県男女共同参画センター	近年の多様化する旅費精算について経営者の視点と労働者の視点に立ちルーチンワークの円滑化等をテーマに一企業を例に挙げての学会報告。

【その他(講演や発表)】2 (学会報告) 中学生を中心とした環境認識に関する調査 「大阪・神戸の中学校を対象として」	―	平成17年 10月1日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学	環境問題に対する認識調査を大阪と神戸の中学校に通う2年生(200名)を対象に実施した。調査の結果で得たものを今後の学校教育に取り入れていかに実践的な環境教育を教育現場で実施できるかの学会報告。
【その他(講演や発表)】3 (学会報告) 環境教育に関する一考察 (大阪・神戸の中学校を対象として)	―	平成18年 5月6日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:追手門学院大学	教える側である教師と教わる側である生徒の環境問題に対する認識を高めなければ実践的な環境教育を行うことは不可能である。現状の問題と今後の課題についての報告。
【その他(講演や発表)】4 (学会報告) 学校教育におけるエコツーリズムの可能性	―	平成18年 9月30日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋市上宮川文化センター	環境と観光の両分野を含むエコツーリズムを学校教育の現場で実施するための問題点を例に挙げての学会報告。
【その他(講演や発表)】5 (学会報告) 学校教育とエコツーリズム ― 修学旅行での実施の可能性 ―	―	平成19年 3月17日	日本産業科学学会 中部・関西合同部会 開催場所:追手門学院大学	近年の修学旅行は数年前に比べると教育的意味合いや目的も変化しており、また多様化している。この修学旅行でのエコツーリズム実施の可能性についての部会報告。
【その他(講演や発表)】6 (学会報告) 環境教育とエコツーリズム －学校教育を中心として－	―	平成19年 7月28日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:名古屋学院大学	昨今、メディアを通じて報道されている環境に関する諸問題を例に挙げ、問題解決の一つの方策としてエコツーリズムに注目した。日本産業科学学会全国大会での
【その他(講演や発表)】7 (学会報告) 温暖化対策とエコツーリズム	―	平成19年 12月15日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学	平成20年度3月に出版予定の著書「温暖化対策とエコツーリズム」についての報告であった。環境に関する諸問題を正しい方向に進めていくために人材育成の重要性を中心に報告している
【その他(講演や発表)】8 (研究ノート) ≪研究ノート≫ 実践的商業教育の取り組み	共	平成20年 6月16日	芦屋大学論叢 第48号	某大学における実践学習の成果と反省点を1つのモデルとして、商業実践に関連する教育サービスの拡大と他大学での実施の不可を学習の意義を含めてその教育成果について考察している。
【その他(講演や発表)】9 (学会報告) 温暖化対策とエコツーリズム －環境初年度における国際会議を中心として－	―	平成20年 8月23日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:芦屋大学	「京都議定書」で採択された温室効果ガス排出量削減が始まる2008年～2012年における各地の対策また、2013年以降の目標について国際会議を中心にその対策としてエコツーリズムを導入した場合の効果についての学会全国発表

【その他（講演や発表）】10 （講演） マーケティング調査と環境問題	―	平成 21 年 11 月 18 日	開催場所：三重短期大学	―
【その他（講演や発表）】11 （研究ノート） 児童虐待の現状と防止対策	共	平成 22 年 6 月 12 日	芦屋大学論叢 第 53 号	児童虐待により、悲惨な報道がされる昨今において、その傾向を中心に考察している。また、事例を加えながらその対策についても考察している。
【その他（講演や発表）】12 （研究ノート） エコツーリズムにおける環境教育の現状と課題	単	平成 23 年 6 月 14 日	芦屋大学論叢 第 55 号	エコツーリズムの現状とツアーで実施される内容にどうのような教育的効果があるのか。世界的な視点から日本の現状を考察している。
【その他（講演や発表）】13 （学会報告） 長期宿泊における体験型環境教育	―	平成 24 年 4 月 21 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：高田短期大学	学校教育における体験活動の現状と青少年の現代的課題を中心に文部科学省が平成 23 年に位置づけた「長期集団体験活動」の取組みについての部会報告である。
【その他（講演や発表）】14 （学会報告） 長期宿泊における体験型環境教育 ―青少年の現代的課題を中心として―	―	平成 24 年 8 月 26 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所：芦屋大学	平成 24 年 4 月 21 日実施の関西部会において報告した長期宿泊における体験型環境教育に青少年の現代的課題と実施の問題点を中心とした学会報告である。
【その他（講演や発表）】15 （学会報告） 体験型環境教育から考察した 子どもの現代的課題について	―	平成 25 年 4 月 20 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：芦屋大学	体験型環境教育を実施するにあたり、子どもの成長段階において必要な運動能力と精神機能についての生体リズムを「スキャモンの発達・発育曲線を参考に報告している。
【その他（講演や発表）】16 （学会報告） 観光立国におけるスポーツツーリズム	―	平成 26 年 4 月 12 日	人材活用研究会 関西部会 開催場所：近江八幡商工会議所	2007 年に観光立国宣言をした我が国におけるスポーツツーリズムの発展と今後の展開についての報告をしている。
【その他（講演や発表）】17 （学会報告） スポーツツーリズムについて	―	平成 26 年 4 月 19 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：芦屋大学大阪キャンパス	過去 10 年間の訪日外客数を調査し、その目的と希望を考察している。また、国際大会等のイベントを調査し 2020 年、東京で開催されるオリンピック・パラリンピックでの訪日外客者数増の可能性についての学会報告。

【その他（講演や発表）】18 （学会報告） 地域の特性を活かしたスポーツツーリズム	―	平成 26 年 8 月 23 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所：青森公立大学	地域に特化したスポーツツーリズムの現状と課題を考察し継続的なスポーツツーリズムの在り方についての学会報告であった。
【その他（講演や発表）】19 （学会報告） 環境の構成と保全管理	―	平成 28 年 5 月 13 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：大阪産業大学	環境の構成を明確化し、地球規模での気候変動及びその影響による生命の変化について現状の生命体の中で高度な知能を持つと考えられる人間（ホモサピエンス）の観点から環境保全管理を考察している。
【その他（講演や発表）】20 （学会報告） 環境の構成と人間社会～人為起因と自然起因～	―	平成 28 年 8 月 21 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所：大阪産業大学	環境の構成と人間社会の関わり合いを明確にし、地球に与える影響を人為起因と自然起因と線引きし、その関わり合いについて全国大会での報告であった。
【その他（講演や発表）】21 （新聞記事掲載） 教育学術新聞 「コミュニケーションスキルの向上を通じた大学生活への適応支援、芦屋大学『大学生活入門』基礎演習Ⅰpp3」	―	平成 29 年 3 月 8 日	教育学術新聞 平成 29 年 3 月 8 日掲載	本学で実施している1回生の講義「基礎演習」を取り上げた新聞掲載。少人数教育を活かしたコミュニケーション能力向上を目的とする講義内容に関連させた記事である。
【その他（講演や発表）】22 （学会報告） ファッション業界を支える職人 ※ゼミ生指導報告	―	平成 29 年 12 月 16 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：芦屋大学	ファッション業界の現状と日本の産地と文化について実地調査を踏まえての学会報告となっている。（指導教員として）
【その他（講演や発表）】23 （学会報告） 日本における社会性昆虫による年間被害と損害	―	平成 30 年 9 月 1 日	日本人間関係学会 第 59 回関西地区大会 開催場所：大阪体育大学同窓会館（アネックス）	社会性昆虫に襲われる危険性は、ある一定の割合で毎年必ず確認されており、最悪の場合は死亡に繋がるケースも珍しくない。その種類及び習性、活動時期、襲われる危険を伴う行動等、その対策と駆除、また損害賠償等を含めた内容についてのハチを例としての報告。発表者の体験例及び法律と判例の解説を加え、毎年のハチによる死に至るケースを含め被害があること、行政の対応は地域により異なること、ハチの駆除には経済的負担と危険が伴うこと、私有地にあるハチの巣による被害が発生した場合損害賠償責任の可能性があることを結論とした。
【その他（講演や発表）】24 （研究ノート） 女性の雇用問題と政策に関する一考察 ―女性を取り巻く社会環境―	共	平成 30 年 11 月 21 日	芦屋大学論叢第 70 号	女性の社会進出増加により、雇用者全体に占める女性比率も上昇傾向にあり、現在では約 4 割を占めるに至っている。現代の働く女性の労働環境及び子育て等の問題点を考察し、法整備を含めた今後の展開を研究目的としている。

【その他（講演や発表）】25 （学会報告） 地域環境と安全教育 ―社会性昆虫とその特性―	―	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会 開催場所：岡山理科大学	社会性昆虫の中からテーマをハチに絞りその危険性、種類、習性、活動時期、襲われる危険性を伴う行動等、その対策と駆除についての報告。
【その他（講演や発表）】26 （学会報告） 江戸時代の循環型社会―古着屋・紺灰業を中心として―	―	令和 2 年 8 月 29 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：リモート	江戸時代の多様な職種を中心に循環型社会の可能性について報告した日本教育情報学会第 36 回年会の中から古着屋・紺灰業を中心に考察することを目的として述べている。
【その他（講演や発表）】27 （公開講座） SDGs（持続可能な開発目標）から考える次世代に伝えること	―	令和 3 年 2 月 22 日	芦屋大学公開講座 開催場所：芦屋市立公民館	貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が豊かさを享受できる持続可能な社会を 2030 年までに実現するという統一目標（SDGs）が国連で採択され数年となり、その考え方や取組は徐々に浸透してきている。生物間・世代間・世代内倫理の観点から次世代に伝えることを考える。
【その他（講演や発表）】28 （雑誌掲載） 環境問題と江戸の循環型社会	単	令和 3 年 3 月 31 日	中部大学大学院 GLOCAL2021	昨今問題となっている温暖化や砂漠化などの多様な環境問題は、産業革命以降に浮き彫りとなってきた、我々に直接ないし間接的に影響がある問題である。本論では、現在とは異なり、循環型社会が 構築できていた江戸時代に焦点を絞り人為的起因からの視点で論じている。
【その他（講演や発表）】29 （学会報告） 灰循環の比較研究	―	令和 3 年 3 月 14 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：大阪学院大学（zoom 対応）	地球に与える人為的起因の視点から江戸時代に注目し、完全な循環型社会を構築していた当時の時代背景及び灰の循環についての見解を述べた報告。
【その他（講演や発表）】30 （学会報告） 持続可能な会社経営についての一考察 - 経営者アンケートを中心として-	―	令和 3 年 8 月 29 日	日本教育情報学会 全国大会 開催場所：岐阜 （zoom 対応）	企業（会社）と SDGs・企業の社会的責任（CSR）・持続可能な会社経営を経営者はどの様に考えているのかを経営者の考えとしてまとめている。また、日本で SDGsは今後も浸透していくのかについての見解を述べた報告。
【その他（講演や発表）】31 （学会報告） 企業の社会的責任（CSR）についての一考察 - 地域連携を中心として-	単	令和 3 年 10 月 2 日	日本世代間交流学会 第 12 回全国大会 開催場所：追手門学院大学	会社・企業に関連させその創業理念、経営方針などを中心に、CSR（企業の社会的責任）について現役の会社経営者の考えを知るべく2021年6月に実施したアンケートの調査結果、井原西鶴の『日本永代蔵』に登場する商人などの思想等、江戸時代に商人・商家のあるべき姿を説いた石田梅岩の心学や、近江商人の「三方よし」などの経営哲学から持続可能な経営に関して現代まで受け継がれているその思想に関連させた報告。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　齋 藤　　治

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ 小学校理科教育における活動記録措置の導入報告～簡易ミニ電卓を用いた計測カウンタの教員免許状更新講習講座での利用事例～	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 74 号	4 (6)	齋藤治がベースの昆虫行動観測装置を開発した接続端末に、簡易ミニ電卓を用いたインターフェイスの導入を実施した記録。エネルギー変換領域での具体的な実践教材事例紹介。 共著：齋藤治、黒木出、渡康彦
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ ブレッドボード電子回路実習教材研究	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会	（抽出不可） (2)	ハンダを用いず、電子回路図から実体配線を展開学習する際に有用となる教材の考え方を述べている。エネルギー変換分野での電子回路実習教材のコア的教材論を述べた。 共著：齋藤治、森嵜功、森下博行
電気電子工学Ⅰ	＜学術論文＞ 演習用合成抵抗ボードを用いた電気配線構築力育成の考察	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会	（抽出不可） (2)	電気回路配線技術の基本習得となる合成抵抗計算と実習に関する論述。エネルギー変換分野での基礎コア領域教材となる考察である。 共著：森嵜功、齋藤治、渡康彦
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ アクトグラフを用いたタマネギバエの自然条件下での歩行活動の記録	共	平成 27 年 7 月	芦屋大学論叢第 63 号	1 (10)	筆者らが持つ専門電子技術およびソフトウェアが特異な生物学研究分野での装置作成と実務運用に帰する論文の紹介。（執筆担当部分：実用的専門的計測装置の紹介と開発過程の記述が、エネルギー変換分野においての応用電子装置の紹介（p34-35）となる。 共著：渡康彦、齋藤治、田中一裕

電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ 齋藤治、C++MFC によるアクトグラムソリューションの移植構築	単	平成 26 年 1 月	芦屋大学論叢第 60 号	9	筆者の持つシステムエンジニアリング技術、C++言語にて電子応用装置であるアクトグラム装置の全移植構築をした記述内容。エネルギー変換分野では、実務、応用電子分野での開発過程を論述している箇所に有意性がある。
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ ブレッドボード配線方式による電子回路作成の技術教育	共	平成 25 年 8 月	日本産業教育学会第 56 回全国大会（山口）	（抽出不可）（1）	筆者の教育現場で実演しているハンダ付けを必要としないブレッドボードによる電子回路学習作製状況を発表。エネルギー変換分野での電子回路論理の理解と配線技法修得に学習者の躓き易いポイントを提示、紹介（P41）した。 共著：齋藤治、渡康彦、藤本光司
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ 齋藤治、昆虫活動記録装置の高速計測システムソフトウェア移植	単	平成 22 年 12 月	芦屋大学論叢 54 号	10	筆者が持つ特異なインターバルタイマ操作技術を Win-PC 上に C++言語で移植構築した、電子制御分野での高速サンプリング技術を紹介している。エネルギー変換技術分野では、応用計測の基幹技術となり、電子計測の基本分野である。

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
1【講演や発表】 教員免許状更新講習講座 昆虫を使った理科の実験～アクトグラフで昆虫の活動を記録する～	共	令和 2 年 8 月	芦屋大学 教員免許更新講座講習	齋藤治、黒木出、渡康彦 簡易ミニ電卓をインターフェイスに用いた昆虫計測実験装置導入事例の実践紹介。エネルギー変換分野領域に該当。
2【実践報告】 芦屋大学自己点検評価委員会 2016 年度上半期活動の軌跡	共	平成 29 年 1 月	芦屋大学論叢 66 号 3（10）	河村繁、齋藤治、石田愛子、青木敦英、中村卓司、猪田裕子、森下博行 筆者が持つ ICT ソリューション技術を、大学認証評価業務での基幹システムとし、リサイクル PC、および共有サーバ構築を運用し、

				劇的な実務効率改善を行った記録。（P52～P54）
【その他】 （講演や発表、運営委員会等） 1.大学自己点検評価委員会芦屋大学認証評価業務遂行での副委員長職を担当 2.日本教育情報学会実行委員会 3.芦屋大学卒論プレゼンテーション大会　司会進行等企画実行委員長		令和3年3月（平成 28 年 4 月～） 平成29年8月 平成27年1月迄実施（平成 24 年 1 月～ ）	芦屋大学　自己点検評価委員会 日本教育情報学会第 33 回 芦屋大学経営教育学部卒論発表運営委員会	毎年作成をする大学認証評価書編纂と7年毎の実地調査実務業務運営を継続して担当。 大会実行委員会運営委員一員として大会運営業務を担当。 卒業論文発表会の企画運営司会進行および専門分野（電気電子エレクトロニクス分野）での講評、コメント等。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名 瀧 巖

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概 要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
	芦屋大学論叢第29号	単	1998 年 11 月		6	一般教養としての 技術科教育方法の考察 －大学生の木材加工の基礎技術評価を通して はさみやのこぎりが無器用で上手に使えることが少なくなってきたといわれる1970年から80年代にかけて育った子供たちが現在、大学生になっている。その学生たちに対して木材加工の技術について指導した内容について考察した。
	芦屋大学論叢第36号	単	2002 年 3 月		16	中学校技術分野の教育課程の編成と「技術とものづくり」指導の在り方 平成14年度より学習指導要領が改訂され、技術科の授業数に変化が生じた。今後の授業形態はどのように運営すればよいのか、学生にアンケートを実施し今後の技術教育の在り方について考察した。
	芦屋大学卒の事業家たち	共	2005 年 7 月		14	芦屋大学卒の事業家たち 芦屋大学を卒業したOBたちに、大学時代の思い出や現在の会社経営などについてイ現在に至る現在に至る現在に至るンタビューし、まとめた。
	芦屋大学論叢第42号	単	2005 年 11 月		12	中学校技術分野における改訂教育課程の編成 －学校教育適用への課題に関する考察－ 兵庫県の某中学校において現行の教育課程実施の実態調査を行った。これについての考察。
	芦屋大学論叢第45号	共	2007 年 6 月		12	アジア太平洋における武道国際交流 ―ハワイにおける空手国際交流を中心に― ハワイでの武道国際交流における異文化交流と日本本土と違った空手道の歴史について

	芦屋大学論叢第70号	共	2018年11月	講演論文	1	北村絵梨加、藤本光司、盛谷亨、若杉祥太、瀧巖：「教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開（3）― 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討 ―」 Development of Active Learning using Instructional Design in Teacher Training Courses（3）― Teaching model for realizing ″self-directed、interactive、and deep learning″ in the Industrial Arts Education of the Junior High School ― 情報コミュニケーション学会 第15回全国大会発表論文集（大手前大学）、pp148-149、2018.3.11

研究業績等に関する事項（5年以内）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【その他（講演や発表）】 1 神戸東ロータリークラブ		2006年4月		兵庫県武道国際交流団の報告 ―日本武道の必要性― 日本の武道の魅力と必要性は、国内以上に世界で認められ、盛んに指導が行われている。
2 ひょうご講座		2006年7月		武道国際交流における英語異文化の理解について

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　中 村　宏 敏

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　要（共著の場合は全員の著者名を記載）（共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
	1.『平成 21 年度文部科学省 大学教育・学生支援推進事業 学生支援推進プログラム 教職員協動による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施 平成 22 年度取組経過報告	共	平成 24 年 1 月	芦屋大学論叢 56 号	（抽出不可）（10）	平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職協動による学生リアルタイムサポートシステム体制構築と実施」の最終年度改良報告と 22 年度の経過報告 著者：林圭一、中村宏敏
	2.『携帯電話とパソコンを賢く上手に使おう』	共	平成 24 年 12 月	日本産業科学学会関西部会研究報告集	2（4）	スマートフォンの無料通話アプリ比較、利用する学生目線での便利な点、気をつけなければいけない点をアプリ毎に比較をしながら学生生活でどのように使えるかを報告
	3.『平成 21 年度文部科学省 大学教育・学生支援推進事業 学生支援推進プログラム教職員協動による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施』平成22年度取組経過報告	共	平成 25 年 1 月	芦屋大学研究論叢第 58 号	（抽出不可）（8）	平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施した「教職員協動による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」が平成 23 年度で完了したので、その成果を報告するものである。 本稿は、本取組の目的と概要、実施体制と実施経過、成果物の概要と得られた効果、などの項目に分けて、活動内容を紹介し、最後に今後の運用に言及している。 著者：林圭一、中村宏敏
	4.『心理学を応用した WEB デザインによる経営戦略』	共	平成 25 年 12 月	日本産業科学学会関西部会研究報告集	2（5）	色彩や配色、コンテンツが与える心理学効果を期待し、本学学生を対象に賃貸住宅のホームページを調査研究した。学生が賃貸住宅を考える場合にホームページが与える企業イメージがどのように作用するかをアンケート調査により調査研究し、実際に学生の実家で経営をされている賃貸住宅ホームページに適応してみてどのような効果が得られるかを研究したものである

	5.『目の不自由な人のための振動プログラミング時計の制作』	共	令和2年12月	日本産業科学学会関西部会研究報告集	5 （18）	生活の中で問題を抱えている人の為に何か手助けがしたいと考えていく中での体験として、目が不自由な生徒との出会いから、振動時計の制作を考え制作をしながら、論文の制作を行ったものである。主担当者が令和3年4月から神戸市の技術科教員として採用されました。その授業の中でも生きる論文として作成したものである。

研究業績等に関する事項（5年以内）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【その他（講演や発表）】 1.学生拳法リーダーズ研修会 1996～2021年	単独	1996年 1997年 1998年 1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年 2006年 2007年 2008年 2009年 2010年 2011年 2012年 2013年 2014年 2015年 2016年 2017年 2018年 2019年 2020年 2021年 2022年 毎年3月実施	全日本学生拳法連盟 於いて ラマダホテル 大阪キャッスルホテル	学生拳法におけるデータ整理と伝達方法について、ホームページをどう活用するかなどを各大学の主将や主務に毎年講演

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　森 下　　博行

担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
マルチメディア概論ⅠⅡ 教育の方法と技術	初等教育における情報教育の考え方	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢第 62 号	近年の教育を取り巻く環境を構成する種々の要素の中で、最も変化・進化の度合いが著しいものの一つに「情報」がある。日本では平成元年以降、インターネット利用の一般化に歩調を合わせるように携帯電話が普及してきた。同時にインターネットの発展は学校に通う児童生徒にさえ危険を与えるに至ってしまっている。初等教育においての情報教育の背景と歴史、必要性や問題点、また今後に取り組むべき課題などについて考察した。
マルチメディア概論ⅠⅡ 教育の方法と技術	ICT教育についての一考察	単	平成 28 年 1 月	芦屋大学論叢 64 号	大学教育に ICT を導入すべく考察した。初等教育においての情報教育の背景と歴史、必要性や問題点、また今後に取り組むべき課題などについて考察した。
マルチメディア概論ⅠⅡ 教育の方法と技術	ICT環境における自己表現力の育成について －児童・生徒への情報機器を用いた自己表現方法－	共	平成 28 年 7 月	芦屋大学論叢第 65 号	著者:森下博行・塚本邦昭 近年、自己表現能力の向上が求められており、社会的なニーズや大学教育にも自己表現力の導入が求められている。その育成方法として、ICT の活用を前提とした表現力の育成について考察した。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(2)	共	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会第 32 回年会	著者:藤本光司・森下博行・池田聡・若杉祥太 本学の初年次教育「大学生活入門」について、研究経緯と授業内容、実践例についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
芦屋大学自己点検評価委員会 2016 年度上半期活動の軌跡	共	平成 29 年 1 月	芦屋大学論叢第 66 号	著者:河村繁・齋藤治・石田愛子・青木敦英・中村卓司・猪田裕子・森下博行 本学が本年受審した大学機関別認証評価の報告書を編纂及び作成する過程をまとめたものである。ワークフローを開示することで、7年後の受審に向けての準備の一助としたい。共同研究により抽出不可能。
教授法が大学を変える「コミュニケーションスキルの向上を通じた大学生活への適応支援　芦屋大学、大学生活入門、基礎演習Ⅰ」	共	平成 29 年 3 月	教育学術新聞第2678 号	著者:藤本光司、森下博行、池田聡、若杉祥太 本学の初年次教育において、コミュニケーション実践のための教授法について探求。実際に講義での実習を通してコミュニケーションスキルの向上研究についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3)-運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察-	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会	著者:藤本光司・森下博行・池田聡・西藤治・井村薫子・成瀬優享・若杉祥太 本学の初年次教育「大学生活入門」について、研究経緯と授業内容、実践例についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
ブレッドボード電子回路実習教材研究	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会	著者:齋藤治・森嵜功・森下博行 複数電子部品の相互接続配線において電子回路図から実体配線までの教材開発等の立場から考察した。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名 盛谷 亨

※1 担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
プログラムと計測・制御 機械工学実験・実習	1. 競技用ソーラ・カー	共	平成 22 年 3 月	トランジスタ技術 第 47 巻 第 3 号 通巻第 546 号 （CQ 出版社）	芦屋 Sky Ace TIGA に搭載した電気系計測装置の機能と計測法、および競技会における運用方法について。
プログラムと計測・制御 機械工学実験・実習	2. 太陽電池活用の基礎と応用	共	平成 23 年 5 月	CQ 出版株式会社	ソーラーカー「芦屋 Sky Ace TIGA」に搭載された電気・電子系装置の紹介と、太陽電池の発電制御に関する技術について。
情報処理基礎 プログラムと計測・制御 機械工学実験・実習	3. 中学校技術科「プログラムによる計測・制御」における教材研究－自動演奏ピアノの製作 －	共	平成 25 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第10回全国大会発表論文集	玩具のピアノに小型電磁ソレノイドを取り付け、コンピュータ制御することによって自動演奏をさせる教材の提案と製作。

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1.「ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究（1）－ 教学として学生のマネジメント活動に視点をあてて －」	共	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集	ソーラーカーを活用したプロジェクト活動について、学生の積極的な参加と主体性を促すための方策として取り入れた、PBL の学びとその方向性について。
2. ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(2) －産学協働による PBL とマネジメント活動の充実－	共	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会 第 31 回年会論文集	ソーラーカーを活用したプロジェクト活動について、学生を主体とした産学連携、スポンサー誘致活動のあり方を考えた、PBL の学びとその方向性について。
3. ソーラーカープロジェクトのフィールドワークを重視したアクティブラーニング (1) －学生主体のマネジメント活動について －	共	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 13 回全国大会発表論文集	ソーラーカープロジェクト活動における、アクティブラーニングを重視した学生主導による産学連携、スポンサー誘致活動のあり方について。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

4. ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(3) －PBLの実際と学生が主体となった社会貢献活動について－	共	平成 28 年 7 月	日本教育情報学会 第回年会論文集	ソーラーカーを活用したプロジェクト活動について、学生を主体とした産学連携、スポンサー誘致活動のあり方を考えた、PBL の学びとその方向性について。
5. 2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果 (1)	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会 第 33 回年会論文集	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的とした PBL 授業プログラムの開発及び実践研究。
6. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3) ―中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討―	共	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 15 回全国大会発表論文集	中学校技術科の教職科目において、授業設計を行うための授業デザインを論述。特に、次期学習指導要領に掲載された、設計と試作時において、学生たちと取り組んだ試作モデルの製作と授業時数との関連性について。
7. 2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果 (2) 車両製作の取り組みと報告	共	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的とした PBL 授業プログラムの開発及び実践研究に準じた各年度の比較及び実践報告。
8. 中学校技術科の教職課程における課題と展望(1) －全国の動向と本学の現状について－	共	令和元年 8 月	日本教育情報学会 第 35 回年会論文集	文科省が実施した教職課程の再課程認定審査に基づき、技術科教育の全国的な養成課程の状況を整理した。一方、本学学生の教員としての学校への着任状況を過去 8 年間に遡り整理するとともに、本学の課題と展望を述べた。
9. 中学校技術科の教職課程における課題と展望(2) －教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について－	共	令和 2 年 8 月	日本教育情報学会 第 36 回年会論文集	文科省が実施した教職課程の再課程認定審査に基づき、技術科教育の全国的な養成課程の状況を整理した。前回報告に続き、本学学生の教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について考察した。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　井上 徹

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1.日本インテリア学会 30 周年記念号 「63 人のインテリア論」	単	2018 年 4 月	日本インテリア学会	「インテリアとイノベーション」 インテリアデザインにおける今後の課題とイノベーションの必要性について執筆。
【その他（講演や発表）】 1.近世イギリスにおける陶磁器とインテリアの関係に関する考察その 2	単	2014 年 10 月	日本インテリア学会 第 26 回大会 研究発表梗概集	18 世紀後半～19 世紀前半に描かれたカリカチュアを中心に近世イギリス社会における中流階級のインテリアと陶磁器の関係を検証・考察
2.近世イギリスにおける陶磁器とインテリアの関係に関する考察その 3	単	2015 年 10 月	日本インテリア学会 第 27 回大会 研究発表梗概集	18 世紀後半～19 世紀前半に描かれたカリカチュアを中心に近世イギリス社会における中流階級のインテリアと陶磁器の関係を検証・考察
3.超高層・高層マンションの居室と収納関係の調査・考察と提案	共	2016 年 10 月	日本インテリア学会 第 28 回大会 研究発表梗概集	2012 年の調査から 4 年、超高層・高層マンションの収納がどのように変化したかを調査・考察・提案。共同研究により抽出不可： 著者：小宮容一、井上徹
4.インテリアのカラーコーディネイトに適応した色相環の提案	共	2017 年 10 月	日本インテリア学会 第 29 回大会 研究発表梗概集	インテリアデザインにおける新たなカラーコーディネイトの提案。 共同研究により抽出不可： 著者：小宮容一、井上徹
5.インテリアデザインに於ける IoT(Internet of Things)に関する考察	共	2017 年 10 月	日本インテリア学会 第 29 回大会 研究発表梗概集	インテリアデザインを取り巻くスマート化・IoT の現状調査及び課題と考察。 共同研究により抽出不可： 著者：井上徹、中村孝之
6.第 1 回スマートインテリア研究部会ースマートインテリア趣旨説明ー	共同	2017 年 12 月	スマートインテリア研究部会	研究部会設立経緯及び、建築・インテリアと ICT・IoT のあらまし及び研究方法、研究計画・目的。
7.第 2 回スマートインテリア研究部会ーIoT 活用事例の現状(住宅・オフィス等) –	単独	2018 年 1 月	スマートインテリア研究部会	1.時代毎のスマートハウスの進展及び、HEMS の概略

				2.現状報告ハウスメーカーの取組・オフィスの現状等
8.第 3 スマートインテリア研究部会―スマートインテリア研究に関する検討項目―	単独	2018 年 8 月	スマートインテリア研究部会	スマートインテリア設計の為の要件を摘出・提案。
9.インテリアのスマートに向けたデザイン要件の枠組み検討-スマートインテリア研究その 1―	共	2018 年 10 月	日本インテリア学会 第 30 会大会 研究発表梗概集	インテリアのスマート化に向けたデザイン要件を摘出する為の枠組みを、ICF(国際生活機能分類)を使用し検討。その上で環境（空間）と活動（行為）のガイドラインになり得る項目を決定。
10.デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 2.-	共	2018 年 10 月	日本インテリア学会 第 30 会大会 研究発表梗概集	その1と連動し、デザイン用件摘出の事前調査として、デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。
11.スマート化に対する大学生の意識調査と考察	共	2019 年 8 月	日本教育情報学会 第 35 回年会	スマートインテリア研究その 2 のアンケートを他大学で実施し母集団を増やし、傾向の再確認を行った。
12. デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 3.-	共	2019 年 10 月	日本インテリア学会 第 31 回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。その 3
13.デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 4.-	共	2020 年 10 月	日本インテリア学会 第 32 回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。その 4
14.デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 5.	共	2021 年 10 月	日本インテリア学会 第 33 回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代における超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。 スマート研究その 5

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏名　　林　泰子

担当授業科目に関する研究業績等（10年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	概　要
教職実践演習中等教育(オムニバス) 教育実習事前・事後指導（情報） 教育実習（情報） 教育学研究方法(オムニバス)	（著書） 1.『元気がでる学び力』	共	平成23年4月	ぎょうせい （202頁）	知識基盤社会を生き抜くために、主体的に生きる喜びに繋がる学習意欲を芽生えさせ、課題解決に向けた適切な判断に基づく行動力を身につける事を目的とした書である。他者や社会を考慮した実践態度の重要性を説き、道徳的判断力を育成する内容を執筆した。 pp. 152-162 担当執筆 奥野雅和、林徳治、林泰子、他5名
	2.『主体的に学び意欲を育てる　教学改善のすすめ』	共	平成28年4月	ぎょうせい （235頁）	初等・中等・高等教育での教学改善において、学習者の学習活動や教員の教育・研究活動が効果的に遂行できるために、教育課程、教育方法・技術、教育評価などの方略、実践、評価、改善について記した書である。主体的な学びの授業実践について執筆した。 pp. 87-95 担当執筆 林徳治、藤本光司、若杉翔太、林泰子、他11名
	3.『アクティブラーニングに導く　教学改善のすすめ』	共	令和2年4月	ぎょうせい （251頁）	上記 4. の改訂版である。主体的な学びや論理的な考えで用いる手法と実践例について執筆した。pp. 91-99 執筆担当 林徳治、藤本光司、若杉翔太、林泰子、他16名
	（学術論文等） 1.「幼児教育課程におけるコミュニケーション能力の育成と検証　-保育活動別のコミュニケーションに着目して-」	共	平成31年3月	芦屋学園短期大学研究紀要第45号 （149頁）	「教育の方法および技術」の授業のコミュニケーション能力の育成を目的とした演習で修得した技術を、学生が実習園での「生活活動」「遊び活動」

					「課題活動」の中でどの程度実践できたのか調査した。学生の実習の振り返りとして行った調査の結果から、コミュニケーション能力の育成に対する演習の効果について検証した。 pp.43-64〇林泰子、若杉祥太、中谷有里
	2.PFF (Preparing Future Faculty)プログラム開発への取り組み-実践的 FD プログラムを応用した PFF の構築-	共	平成 24 年 5 月	大学教育学会第 34 回大会　発表要旨収録	立命館大学では 2009 年度より新任教員対象 FD 研修を実践している。この実践的 FD プログラムの開発手法やコンテンツを、大学教員を目指す大学院生を対象とした大学教員準備プログラム（以下 PFF プログラム）の開発に応用し、その取組みについて提案した。 pp.222-223〇林泰子、沖裕貴、前田真志、松村初
	3.北米の大学における PFF の現状	共	平成 24 年 6 月	日本高等教育学会第 15 回大会　発表要旨収録	大学教員を目指している立命館大学の大学院生を対象とした大学教員養成（Preparing Future Faculty：PFF）プログラムの開発を目的として、最も先進的に PFF を開発・運営している北米の３大学を訪問し、その取り組みについて調査した。大学教員に必要とされる獲得すべき能力や、それに対応したプログラムに関する情報や大学院生へのインタビューなどの現状を調査した内容を報告した。 pp.155-156〇林泰子、沖裕貴、前田真志、松村 初
情報処理実習Ⅰ・Ⅱ（単独） 情報倫理研究（単独）	（著書） 1.『元気がでる学び力』	共	平成 23 年 4 月	ぎょうせい（202 頁）	（再掲のため、略）
	2.『留学生のための日本語で学ぶパソコンリテラシー』	共	平成 27 年 1 月	共立出版（187 頁）	大学、専門学校や高等学校、日本語学校等でパソコンリテラシーを学ぶ留学生を対象とした、情報教育のための教科書である。情報倫理の章において、情報社会や情報の特性、著作権、個人情報、道徳的判断等について執筆した。 pp.110-124 担当執筆 橋本惠子、金子大輔、林泰子、他 3 名

教職実践演習中等教育(オムニバス) 教育実習事前・事後指導(情報) 教育実習(情報) 教育学研究方法(オムニバス)	(学術論文等) 1.「幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望-情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに-」	共	平成30年3月	芦屋学園短期大学研究紀要第44号 (264頁)	実習先で知り得た情報の適切な取り扱いの重要性を、学生が再認識することを目的とする「情報モラルセミナー」を実施した。事前・事後に情報モラルに関するアンケート調査を行った。実習直前の1年生に着目し、その事前・事後アンケート調査の分析・検証の結果から、今後の保育者養成校での情報モラル教育について検討した。 pp.105-125○林泰子、若杉翔太、中谷有里
	2.地域社会における「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育	単	平成25年11月	日本教育情報学会第29回年会論文集	滋賀県において筆者が担当した、人権教育機関や地域総合センターなどの関係者・職員、学校関係者、市議会議員などを対象とした講演をもとに、ネット上での誹謗中傷や人権侵害がおこる社会的背景、ネット利用する人の道徳的判断の育成などの研修内容と取組みについて報告した。 pp.294-295○林泰子
	3.情報科教育関連科目を受講する理系学生を対象とした学修に関する実態調査	共	平成25年11月	日本教育情報学会第29回年会論文集	教職課程の情報科教育関連科目を受講している理系学生を対象に、教授・学習に関するアンケート調査を実施した。調査概要は、教員の授業評価、学生の生活面での情報に関する実態、学生が今後の教育活動をするうえで有用と捉えている授業内容などである。その結果から受講生の学修の実態を把握し、情報科教育関連科目における授業内容の改善について検討した。本研究は平成23-25年度科研費補助金(大学のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究、課題番号23531030、2013、代表　林徳治)の一環として実施した。 pp.350-353○林泰子、林徳治
	4.地域社会における「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育(2)	単	平成26年8月	日本教育情報学会第30回年会論文集	前回より継続して、滋賀県内での「ネット社会と人権」をテーマに取り組んでいる、情報モラル教育の活動について報告した。なかでも今回で2回目となる高等学校では、事

					前に対象者にインターネット利用やスマートフォンなどに関するアンケートを実施し、その結果をもとに道徳的判断を用いた情報モラル教育について検討した。 pp. 64-65〇林泰子
	5. 中学生を対象とした「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育	単	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会第 31 回年会論文集	中学 3 年生を対象に実施した情報モラル教育において、受講者へ実施したケータイ（スマートフォンなど）や SNS の利用に関するアンケートの調査結果と、道徳的判断を用いた情報モラル教育の結果を検討し報告した。 pp. 308-309〇林泰子
	6. 中学生を対象とした道徳的判断を用いた情報モラル教材	単	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会第 32 回年会論文集	前年度実施の中学校の依頼で、さらに早い段階の中学 2 年生に、道徳的判断を用いた情報モラル教育を実施することとなった。今回は、そこで用いた中学生を対象とした道徳的判断力を高めるための情報モラル教材を提示し、その工夫・改善点や効果について検討した。 pp. 270-271〇林泰子
	7. 幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1)－短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組み－	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集	保育者を目指す学生が、実習先での個人情報や実習内容などの情報に対する責任を再認識するための情報モラルセミナーを開催した。セミナー前後のアンケート調査をもとに、今後の保育者養成校での情報モラル教育への取り組みについて検討した。 pp. 300-301〇林泰子、若杉祥太、納庄聡、中谷有里
	8. 幼児教育課程における情報モラル教育に関する実践と評価(2)－役割取得能力の向上への試み－	共	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会第 34 回年会論文集	学生が情報を取り扱ううえで、他者や社会への影響を考慮した広い視野を持ち、保育者としての道徳性や人間力を高めるため、その基盤となる役割取得能力の向上を目指した情報モラル教育の学習方法を試みた。その方法を報告し検討した。 pp. 336-337〇林泰子、若杉祥太、中谷有里

	9.留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共	令和元年８月	日本教育情報学会第35回年会論文集	留学生の国籍が多様化していることから、情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方の違いなどを把握し、大学生としての情報教育を行うことが望まれる。基本的なパソコン操作のスキル調査とは別に、情報リテラシーに関する意識について１年生全員を対象にアンケート調査を行い、本稿では留学生（1年生）の情報リテラシーへの意識調査の結果について検討した。 pp.230-231〇林泰子、若杉祥太、中谷有里
	10.オンデマンド授業による学習観の変容に関する調査研究	共	令和２年８月	日本教育情報学会第36回年会論文集	LMS を導入したオンデマンド授業に不慣れな学生がどのような学習観をもってオンデマンド授業に取り組んでいるのか、その実情を把握するために市川（1995）の学習観尺度を用いたアンケート調査を実施した。今回は、主体的な学修への取り組みと学習観との関係について検討した。 pp.338-339〇林泰子、若杉翔太、中谷有里
	11.オンデマンド授業による学習観の変容に関する調査研（2）	共	令和３年８月	日本教育情報学会第37回年会論文集	前回に継続し、後期に同様のアンケート調査を行い、前期と後期のデータを比較した結果をもとに学習観の変容について検討した。pp.306-307 〇林泰子、若杉翔太、中谷有里

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　井 村　薫 子

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　要
【学術論文】 1.「“妖精”が“賢女”に書き換えられた理由―グリム兄弟はなぜフランス語からの借用語に満足せず、ドイツ語派生の言葉にこだわったのか―」	単	平成 25 年 3 月	学位論文	これまで、私自身バレエやディズニー映画を通じて「眠れる森の美女」の存在を知っていたのだが、これには類話があることを知った。その中でも影の主人公といえる“妖精”に焦点を当て、グリム兄弟の行った書き換えを元に、なぜグリム兄弟はドイツ語起源の単語にこだわったのかということを明らかにする。
2.「日本におけるバレエ教育に関する研究」	単	平成 29 年 2 月 平成 29 年 5 月	・学位論文 ・日本アーツビジネス学会口頭発表	今日までの日本バレエ界の発展は先人たちの努力によって作り上げられてきたが、日本バレエが更なる発展を遂げるにはバレエ教育を根本から見直す必要があると考える。現在日本国内で活躍しているバレエダンサーたちはどのようなバレエ教育を受けてきたのか、ということを研究し、現在の日本国内のバレエ教育における問題を明らかにし、今後のバレエ教育について提言を行った。
3.「初年次教育におけるアクティブラーニングの研究（3） ― 運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察 ― 」	共	平成 29 年 7 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集，(pp274-275)	入学時の学生は、不安や期待を感じつつ徐々に大学生活に馴染んでいく。本稿では学生同士のつながりを深めさせる手立てについて、入学前のリメディアル教育および初年次教育の取組を報告する。また成績評価の量的／質的評価の側面を概観する。 井村薫子・新谷佳冬・佐藤真左美・藤本光司
4.「日本におけるバレエ教育に関する研究―芦屋大学バレエコースのカリキュラムをもとに考察―」	共	平成 29 年 7 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集，(pp 288－289) ・日本教育情報学会第 33 回年会 口頭発表	芦屋大学経営教育学部経営教育学科では平成 24 年度よりバレエコースが開講した。日本において、私立大学にクラシックバレエに特化したコースの開設というのは初の試みといえる。本研究では、コース設立の意義を

				述べ、バレエ界の更なる発展のために過去 6 年間のカリキュラムをもとに実績と現状を踏まえ、今後の課題について報告する。 井村薫子・新谷佳冬
5.「日本におけるバレエ教師教育の必要性について(1)―芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの試み―」	共	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢第 68 号	大正時代に西洋及びロシアからバレエという芸術が日本に伝来し約一世紀が経過した。バレエ鑑賞が大人の社交や楽しみとなる文化を持つ西洋の国とは異なり、日本ではバレエ公演を観る観客層も薄く、バレエを見に来る観客の大半は出演者の関係者が客席を占めるという状況である。 本稿では、一種の歪な形態のまま発展を遂げた日本のバレエの問題点、特に教師養成の側面に焦点を当て 2013 年度より開講した芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの意義と、コース内容等について報告する。 井村薫子・佐藤真左美
6.「芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(1)-制作側からの視点-」	共	令和 2 年 9 月	芦屋大学論叢第 73 号	芦屋大学バレエコースでは第一期卒業生を輩出した 2015 年から毎年、芦屋市民センター・ルナホールにて卒業公演を開催している。 大学コースにおいての卒業公演ということで、教室の発表会との違いは明らかである。卒業公演が、ただの発表の場ではなく、学生教師共に学びの場として、様々な成果・課題が挙げられる。本稿ではそれらに重点を置き、実績報告とする。
7.「芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(2)」	共		芦屋大学論叢第 75 号 ※掲載予定	
【その他（講演や発表）】 1.カンパニーでこぼこ　第 10 回公演「眠れる森の美女」出演 2.生誕 200 年記念オペラセレクション　歌劇王ヴェルディの肖像　出演 3.トモコアートダンスカンパニー「MASK」出演		平成 24 年 4 月 平成 25 年 9 月 平成 26 年 6 月	兵庫県立芸術文化センター　大ホール フェスティバルホール びわこホール　中ホール	

4.衣裳デザイナー　時広真吾プロデュース　第 5 回美の種「華心～打・舞・歌・調・装」出演		平成 27 年 10 月	京都府民ホール　アルティ	
5.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物　Vol.2」出演		平成 27 年 4 月	西宮市プレラホール	
6.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物　Vol.3」 演出・出演		平成 28 年 9 月	西宮市プレラホール	
7. 0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物　Vol.4」演出・出演		平成 30 年 3 月	西宮市プレラホール	
8.芦屋大学バレエコース卒業公演　指導・演出助手		平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月 平成 30 年 12 月 令和元年 12 月	芦屋市民センター　ルナホール	
9.CTB　Studio　クリスマスパフォーマンス　指導・演出助手		平成 25 年 12 月 平成 26 年 12 月 平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月 平成 30 年 12 月 令和元年 11 月	京都府立文化芸術会館	

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　高倉 弘士

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】1 （著書） 第 5 章 保育運動を考える	共	平成 24 年1月	『保育の社会学 子どもとおとなのアンサンブル』、学文社	本書は保育・子育て研究への新たな試みへの第一歩とするものであり、保育を社会学の視点から見ていくという大前提のもとに論述する。 保育の現場の実情をできるかぎり重視しながら、保育の現場を側面から動かす行政をも念頭におき、各諸課題へ取り組む。
【著書】2 （著書） 序章 「地域包括ケア」をめぐる制度改革の動向と課題 第 2 章 大阪府内の病院、老健の入院入所、退院退所調査	共	平成 29 年 12 月	『地域包括ケアを問い直す―高齢者の尊厳は守れるか』、日本機関紙出版センター	地域包括ケアで高齢者は幸せに暮らせるのか？ 要介護者の家族、病院・老健の入退院の実態調査、医療・介護の現場実態などから、地域包括ケアの公的責任不在、地域の助け合いへの矮小化、費用負担の問題などについて検討し、住民のための本当の地域ケアとは何かを探る。
【著書】3 （著書） 第7章 なぜ今も階級が問題なのか	共	令和 5 年 3 月	『岐路に立つソーシャルワーク現代のラディカル・ソーシャルワーク』、クリエイツかもがわ	格差、貧困、差別などへのソーシャルワークは「効率的な」マネジメントに忙殺され、本来の役割を発揮できていないのでは。ラディカルな政治思想と活動に根ざしたソーシャルワークを求め、多様な視点から徹底的に検討する。翻訳もとの本は出版からすでに20年を経過しているが、それでも現在の社会福祉状況をとらえる際に役立つ知見が多くある。
【学術論文】1 （博士論文） 環境リスクの共有が環境運動に与えた影響に関する社会学的考察―ダイオキシン類および PCB をめぐる住民運動を事例として	単	平成 25 年 3 月	立命館大学大学院応用社会学研究科	産業廃棄物処理場建設・操業をめぐる反対運動を分析対象とし、住民運動の要因分析をおこなっている。具体的には、住民運動はどういった要因で拡大し、どういった要因で収束するのか、を運動体への参与観察やインタビュー調査、調査票調査を用いて明らかにした。当該住民運動は産業廃棄物の健康被害を争点とする住民運動であるため、ダイオキシンや PCB などのいわゆる科学的根拠をどのように扱うかによって住民運動の成否に影響することを実証的に明らかにした。
【学術論文】2 （学術論文） 教育階層と格差意識・社会活動・社会的ネットワーク ―地域と暮しについての意識調査データからみる教育による分断をめぐる現状と課題―	共	平成 23 年 6 月	『立命館産業社会論集』第 47 巻1号	本稿は，教育階層と収入・格差に対する意識はいかなる関連をもつのか，教育階層と社会活動への参加や社会的ネットワークの保有状況はいかに関連しているのかを明らかにすることを目的としている。近畿2府4県に在住する20歳から65歳未満の男女の調査データの分析から，教育階層が高いほど世帯収入満足度は高く，格差意識は低いことが示された。これは高学歴層ほど高収入であるためである。また，高学歴層ほどサークル活動，自己研鑽活動に参加する傾向があり，社会的ネットワークについても高学歴層ほど規模が大きい。これらの結果は，現代の日本社会において教育達成は職業的地位達成の手段にとどまらず，日常生活の多くの領域を分断する側面をもっていることを示唆している。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

【学術論文】3 （学術論文） 合意形成における科学的情報の影響	単	平成 24 年3月	『日本産業科学学会研究論業』第17号	産業廃棄物処理場建設・操業をめぐる反対運動を事例として、その争点となっている処理場操業による健康被害について、科学的情報の持つ役割は非常に大きい。だがこれまで、科学的根拠の持つ重要性には積極的な言及がなかった。そこで、科学的根拠をめぐってどのような合意形成がなされるのか、また合意形成の結果、住民運動はどのような戦略をとるのかを分析している。分析の結果、科学的根拠は重要であり、住民運動の戦略も大きく変わることが明らかとなった
【学術論文】4 （学術論文） 環境運動における科学的情報の役割―環境ホルモンを争点とした住民運動を事例に―	単	平成 24 年 9 月	『立命館産業社会論集』第 48 巻第 2 号	環境問題を争点とした運動では、化学物質と被害との因果関係が客観的に証明されるかどうかが運動を展開するうえで重要な要素となりうる。そこで、本研究では、特定の科学的情報に注目が集まっている時期と注目が薄れてきた時期とでは住民運動の展開過程に差異がみられるかどうかを探索的に分析した。分析の結果、環境運動の初期段階においては、科学的情報への注目度が高く、運動参加者の個人での判断が重要な役割をはたしていることが明らかとなった。後期の段階においては、科学的情報への注目度が低くなり、運動体の組織強度が重要な役割を果たしていることが示唆された。
【学術論文】5 （学術論文） 環境問題の解決における科学的根拠の同定過程―産業廃棄物処理施設増設反対運動をめぐって―	単	平成 25 年 3 月	『立命館大学人文科学研究所紀要』No.101	環境運動の展開において、科学的根拠の同定過程は非常に重要な要素になりうる。なぜなら環境運動において、運動の根拠となる最も大きな事柄は被害の程度であるためである。そのため、運動として発展していくためには主体者自身が検知した感覚的な周辺環境の変化を、誰もが認知しうる客観的な科学的根拠として提示することが要請される。本論では、環境運動を事例に、被害状況が明確かつ単純ではない環境運動の科学的根拠の同定過程がどのように進行するのかを中心に分析を行う。本論の事例より、同定過程において住民運動側と行政側との科学的測定の結果に差異が生じていることが明らかとなった。科学的測定は一般化された手続きを順守した方法であり、そのため客観性は担保されている。従って、科学者が提供する実験結果ないしは測定結果などの科学的根拠は客観性を担保していると言える。しかし、その科学的根拠を運動展開へ戦略的に用いる場合、留保が必要である。つまり、科学的根拠にはどのような手法が用いられたのか、という条件を加味したうえで用いなければならないということである。今後、環境運動とその展開の過程に用いられる科学の関係を分析しようとする場合、科学的根拠の扱われ方に注目しながら分析を行う必要があると言える。
【学術論文】6 （学術論文） 『部落差別の実態に係る調査結果報告書』(法務省人権擁護局)の検討	単	令和 3 年 5 月	部落問題研究 2021 年 5 月号(No237)	『部落差別の実態に係る調査結果報告書』(法務省人権擁護局）が公表されたことを受け、部落差別の実態がどのようにとらえられているのか、調査の分析結果を批判的に検討することを目的としている。検討の結果、現在の部落差別の実態を見ていることにすぎず、全体的にみれば部落差別件数の減少傾向こと、インターネットで部落差別事例が増加していることへの根本的な問いにこたえるものではないことが確認された。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

【学術論文】7 （学術論文） 社会福祉法人の大規模化・協働化に関する一考察 ―一般社団法人社会福祉経営全国会議経営実態調査2020 年度からの検討―	単	令和 3 年 12 月	『総合社会福祉研究』第 51 号	複雑化・多様化する福祉ニーズに対して、政府は、社会福祉法人を合併・連携させ、大規模法人化・協働化することで対応しようと考えている。いっぽうで、我が国では多様化する福祉ニーズに対して、小規模法人で対応してきた側面がある。果たして、複雑化・多様化する福祉ニーズに、政府の考える社会福祉法人の大規模化・協働化は、こたえられるのであろうか。本稿では、こうした関心から法人規模に注目して分析し検討をくわえる。本稿の分析結果からは、相対的に見て大規模法人には職員の定着について課題があるとみることができる。くわえて、非正規職員や派遣職員に依存している率が高いということが明らかになった。確かに、政府が指摘するように、福祉への要望は複雑化・多様化してきている。だからといって、国が目指す自助・互助の社会保障を大規模化を通じて担わせてすべてが解決するということではない。今後、これまで以上に地域に根ざした地域福祉の在り方、公的な福祉の拡充が問われることになると考える。
【学術論文】8 （学術論文） コロナ禍で働く福祉労働者の実態に関する一考察	共	令和 3 年 12 月	『総合社会福祉研究』第 51 号	本稿では『コロナ禍で社会福祉現場で働く人々の労働実態調査』の分析結果から、コロナ禍で社会福祉現場に何が起こっていたのか、その課題を整理することを目的とした。現在、社会福祉現場で働く人手が足りない中で、他分野からの転職者に支えられ、過重な労働を強いられている、または仕事に見合わない低賃金水準という厳しい実態が、本研究でも明らかになった。やりがいをもち、激務に耐えられてあまり退職や転職を考えない人はもちろん存在するが、しかし一方で、業務や時間に追われて心の余裕を失ってしまい、自信を失いながらも身を粉にして支援にあたっている人たちは、将来に展望を持てなくなり、退職や転職を考えてしまうということも示唆された。
【その他（講演や発表）】1 （雑誌掲載） 社会保障からの公的責任の継続的な後退を視る	単	平成 29 年.3 月	『福祉のひろば』204 号、財団法人大阪福祉事業財団	本論稿では、介護報酬の引き下げ、「生活支援戦略」に見る生活保護制度の見直し、社会福祉領域の市場化、高齢者の再定義など、政府が行う一連の事柄から何が見えてくるのか。すなわち、社会保障・社会福祉領域からの公的責任の継続的な後退状況である。こうした後退状況は、福祉領域の市場化による経済の効率化と発展という理念のもとに過剰なほど偏向し、急速にその動きを加速させており、近年では特に傑出した動きとなっている、という内容を執筆している。
【その他（講演や発表）】2 （雑誌掲載） 社会福祉を担う若者たちの生活が苦しくなっている	単	平成 29 年 10 月	『福祉のひろば』211 号、財団法人大阪福祉事業財団	社会保障・社会福祉は生命と健康を守る重要なものである。ときに社会福祉従事者は、困難を抱える個人や世帯を支援する。対象者は、精神疾患や経済的貧困を抱える方等様々だ。だが現在、そうした支援する側が貧困に陥っている現状がある。本稿では、なぜ支援する側が経済的貧困に陥るのかを追求している。政府は介護現場へのロボットやAIの導入を急ピッチで行っているが、そうしたことよりも、現場職員への財政支援こそが急務であると考える。
【その他（講演や発表）】3 （雑誌掲載） ハンセン病をとおして社会福祉を考える	単	平成 30 年 10 月	『福祉のひろば』223 号、財団法人大阪福祉事業財団	社会保障・社会福祉は、生命と健康を守る重要な社会的基盤である。こうした保障はその性格上、公平性を担保しなければならない。何らかの力によってこれが侵されるようなことがあれば、社会福祉従事者は、疑義を唱え修正をせまるべきことがらであろう。だが、過去において、社会福祉従事者がハンセン病罹患者の社会的排除に加担していた。そうした背景から、現在も国立療養所に住まわれている方にインタビューをおこない、これまでの経緯や社会がどのように見えていたのか、なにが剥奪されたのか等をきき、執筆を行った。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教　育　研　究　業　績　書

氏　名　　成瀬　優享

研究業績等に関する事項（5 年以内）

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】 アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	コラム「技能伝承　急がば回れ」を執筆 pp118-119
【学術論文】 1.潤滑剤性能・特性評価試験機の開発提案	単	平成 28 年 7 月	芦屋大学論叢	競技用自転車チェーンを対象とした潤滑剤において、実用環境を再現した評価試験機が無い事から、実用される環境を調査し、これに基づいた潤滑剤性能及び特性評価試験機開発に関わる提案を実施した。 芦屋大学論叢第 65 号 pp79-90 成瀬優享
2.2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得（1）	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	2 級自動車整備士養成課程において、整備士に求められる深い課題解決能力の構成要素である技術、知識、社会人基礎力の向上を目的とし、車両製作を主軸としてゼミ活動と授業を連携させたＰＢＬ授業プログラムの開発と実践の 1 年目の経過報告行った。 日本教育情報学会 第 33 回年会論文集（芦屋大学）、pp276-277、2017.8.26-27 成瀬優享、大西昌哲、藤本光司、盛谷亨、齋藤治、若杉祥太
3.初年時教育におけるアクティブラーニングの研究（3）	共	平成 29 年 8 月	同上	本学のリメディアル教育について整理し，初年次教育を円滑に推進するためのクラス編成やマネジメントについて述べ、学生レポート評価に関する質的評価・量的評価の課題について報告した。 日本教育情報学会 第 33 回年会論文集（芦屋大学）、pp288-289、2017.8.26-27 藤本光司、森下博行、池田聡、斎藤治、井村薫子、成瀬優享、若杉祥太

4.2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得（2）	共	平成 30 年 8 月	同上	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的としたＰＢＬ授業プログラムの開発及び実践研究に準じた各年度の比較及び実践報告を行った。 日本教育情報学会　第 34 回年会論文集日本教育情報学会第 34 回年会論文集（松蔭大学）pp294-295、2018.8.25-26 成瀬優享、盛谷亨、藤本光司、若杉祥太、大西昌哲、齋藤治
5.2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力育成を目的とした包括的教材開発に関する研究	単	平成 31 年 1 月 15 日	芦屋大学修士論文	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得（2017）（2018）の実践を元に、整備士に求められる深い課題解決能力を育成するために必要な要素と、教材として求められる要素を併せ持つ教材開発に関する研究を行った。この研究により、計算された不完全さをもつ包括的な教材が提案された。 芦屋大学　大学院　平成 30 年度修士論文　2019.1.15 成瀬優享
6.2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果（3）	共	令和 1 年 8 月 24 日	日本教育情報学会	同研究の最終報として、一連して行われた PBL 授業プログラムの成果と課題に関する報告を行った。また、これらの研究に伴い明らかとなった課題を解決するための手段として、包括的教材の開発提案を行った。 日本教育情報学会第 35 回年会論文集（岡山理科大学）pp214-215　2019.8.24/25 成瀬優享、若杉翔太、盛谷亨大西昌哲、藤本光司、斎藤治
7.2 級自動車整備士養成課程における包括的教材の開発と実践（1）	共	令和 2 年 8 月 22 日	日本教育情報学会	養成課程で用いる教材として、専門性と社会人基礎力を同時に高めていくための包括的教材に求められる要件と構成について、考察を行った。 日本教育情報学会第 36 回年会論文集（札幌学院大学）pp312-313　2020.8.22/23 成瀬優享、若杉祥太 興感染症の影響により、従来

芦屋大学

8.座学系科目の遠隔授業化が技能に影響を与えた可能性についての報告	単	令和 3 年 8 月	日本教育情報学会	対面で行われていた座学系授業がオンラインやオンデマンド授業に変更された。これに伴い座学系授業での得点は有意な変化がみられなかったものの、実技系科目にて有意差がみられた。 日本教育情報学会第 37 回年会論文集（岐阜女子大学）pp374-375　2020.8.28/29
【その他（講演や発表）】 1.FD 研修　救急	単	令和元年 11 月	芦屋大学	大学での事故や災害時に伴う負傷者発生に対して、積極的介入が必要なケースと、その対処法に関する講習を実施（成瀬優享）
2.FD 研修　救急	単	令和 3 年 5 月	芦屋大学	新型コロナウイルス流行に対応した脳心肺蘇生法に関する講習を実施（成瀬優享）
3.消防　心肺蘇生研修	共	令和 3 年 12 月	成徳小学校	同校の小学生を対象に、心肺蘇生法研修を実施（成瀬優享）

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　野口　　聡

※1 担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要 （共著の場合は全員の著者名を記載） （共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）
中等教科教育法Ⅰ【情報】（単独）	（学術論文） 1.「人に教えるために書く文章」の書き方に影響を及ぼした理由および契機の分析	共	2021 年 3 月	日本教育工学会論文誌 45(Suppl.)	4	授業において、「人に教えるために書く活動」という教授方略を実施した。この教授方略に取り組む生徒が、文章を書くための方略を変えた理由や契機を計量テキスト分析によって明らかにした。 その前提として、初期と 19 ヶ月後における書くための方略の出現単語の傾向から分析した。その結果、初期と 19 ヶ月の時点に差が見られた。そのため書くための方略を変えた理由や契機の自由記述を KJ 法で分類し、4 つのカテゴリが生成された。 著者：野口聡、田中雄也
	2.学習した内容を教える活動に取り組む生徒の意識が知識習得に与える影響	共	2020 年 3 月	日本教育工学会論文誌 44(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動において、その活動に取り組む生徒の意識が知識習得に及ぼす影響を分析した。この際、教えることを意識的に取り組む生徒は、意味理解志向が高く、知識テストでも高い得点を得る擬似相関の可能性がある。そこで意味理解志向学習観を統制変数として、教える活動に取り組む意識と知識テストの 3 観点との偏相関係数を算出した。分析の結果、振り返り・まとめ、書き方の工夫、調べ直しの意識が高いほど、知識テストの得点が高いことが明らかになった。 著者：野口聡、田中雄也
	3. The Impact on Knowledge Acquisition of Detailed Over-explanation on Science in Junior High School	共	2019 年 9 月	Educational Technology Research 42(1)	12	The following results were revealed: (1) Letting students imagine their teaching targets were Groups 1), 2), and 3) led them to use simple expressions. (2) Having students imagine their teaching targets were Group 1) led them to use explanations that provided supplemental information. (3) The students that imagined Group 1) as their teaching targets were more likely to acquire knowledge accurately compared to the other groups.

						著者：Satoshi NOGUCHI, Masayuki MURAKAMI
	4.保育におけるプログラミング的思考の基礎を育てるための保育実践	単	2019年6月	子ども学研究所, Child Research Net	抽出不可	小学校から高等学校までのプログラミング教育を概観し、そこから保育における実践を提案した。
	5.グループ学習が日本語文法の習熟度に与える影響	共	2019年4月	日本教育工学会論文誌43(Suppl.)	4（抽出不可）	国語の文法分野でグループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、実践前後の習熟度のテスト、理解への自己評価，グループ学習をどう捉えているかのアンケート調査を実施した。その結果、グループ学習の条件を整えれば、事前事後の得点差の平均値が、グループ学習群は一斉授業群よりも大きくなり習熟度の高まる傾向がみられると共に、グループ学習に対する満足度も高かった。 著者：冨田幸子、野口聡
	6.災害対応等における学校への携帯電話持ち込み可否についての生徒および学生の意識	共	2019年3月	芦屋大学論叢72	10（抽出不可）	小学生、中学生や高校生が災害時や事件時、日常生活において、携帯電話を学校に持ち込む可否に関する生徒および学生の意識を明らかにした。 著者：竹内和雄、安東茂樹、野口聡
	7.平易な表現・情報の補足を用いた説明が中学理科の知識の習得に与える効果	共	2018年12月	日本教育工学会論文誌42(2)	11	教授対象を想定することで、解答の書き方に平易な表現・情報を補足する説明が使われるようになるのか、また正確に知識を習得するのか、調査した。 著者：野口聡、村上正行
	8.プログラミング的思考の基礎をつくる保育方法の評価ルーブリックの開発	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集 JSET18(2)	6	幼児教育におけるプログラミング的思考を同定したうえで、プログラミング的思考を評価するための評価基準を開発した。 著者：野口聡、堀田博史
	9.グループ学習が文法の理解に与える影響 ： 学習内容の習得度と理解度の相関	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集 JSET18(2)	6（抽出不可）	グループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、習熟度の相違、理解の自己評価の調査した。 著者：冨田幸子、野口聡
	10.中学理科における人に教える活動に取り組む生徒の意識が学習に対する自己評価に与える影響	共	2018年4月	日本教育工学会論文誌42(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動に取り組む生徒の意識が、学習に対する自己評価に与える影響を明らかにした。そのために、活動に取り組む生徒の意識の構成要因が、理科学習の4観点（興味・関心、知識理解、科学的思考、観察実験）の自己評価に与える影響を分析した。その結果、生徒の意識の構成要因として、「①振り返り・まとめ

						方」、「②自然現象との関連」、「③書き方の工夫」、「④調べ直し」の因子が抽出された。 著者：野口聡、田中雄也
	11.プログラミング的思考の基礎をつくる保育方法の分析	共	2018 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 JSET 18(1)	8	幼児教育においてプログラミング的思考を育むため保育方法を1年間定期的に実践した。その保育実践による幼児のプログラミング的思考の伸長を評価した。 著者：野口聡、堀田博史
	12.中学校の理科における対話による理解を阻害する要素についての検討	単	2017 年 3 月	国際言語文化学会 国際言語文化 3	10	中学校理科の授業において、人に教えるために書く活動を実施する際、学習活動を妨げる要因を調査、分析した。
	13.中学校の理科教育における対話による理解を妨げる要因についての分析	共	2016年3月	日本教育工学会研究報告集 JSET 16(1)	6	中学校理科の授業において、対話による学習活動に取り組むときに、学習活動を妨げる要因を調査した。 著者：野口聡、田中雄也
	14.中学校の理科教育における授業者の発問を取り入れたミニ説明方式による科学概念理解の効果	単	2015年4月	日本教育工学会論文誌 39(Suppl.)	4	中学校理科において、通常授業および対話を取り入れた教授方略を実践した。これらの指導方法の相違が、知識習得に与える影響を分析した。
	15.大学実習科目でのブレンド型 e ラーニングにおける学生の学習動機づけの分析	共	2014年12月	情報コミュニケーション学会誌 9(2)	9	ブレンド型eラーニングを利用した初年次のコンピュータ操作技能を習得させる実習科目において、意欲的に演習や課題を取り組んだ学生が、どのような要因で学習意欲を持続したのかについて明らかにした。そのために主体的に学習した学生群とそうではない学生群に分けて（以下、主体群と非主体群）、その相違点をARCSモデルに沿ったアンケートおよび具体的な理由を自由記述調査により分析した。 著者：野口聡、堀田博史、清水五男、垣東弘一、小田桐良一、久保田賢一
	16.学校教育における子どもの安全：ICT 活用の可能性	共	2012年3月	セミナー年報 2011 関西大学経済・政治研究所	4 (10)	学校教育における子どもの安全について、ICT活用の視点から検討した。具体的には、中学校おける防災ゲーム「クロスロード」を応用し、「いじめ」に関するディスカッションの方法について考察した。 著者：久保田賢一、時任準平、野口聡
	17.Analysis of Limited	単	2011 年 6 月	The Korean Journal of the	11	日本の学校において、授業においてICTを活用する教師が直面している問

	Information Technology Education Implementation in Japanese Schools			Learning Sciences 5(1)		題を明らかにするために、大阪府の小中学校の教員を対象としたアンケートを分析した。分析の結果，21の問題が抽出された。 著者：Satoshi Noguchi、Kenichi Kubota
中等教科教育法Ⅱ【情報】（単独）	（学術論文） 1.「人に教えるために書く文章」の書き方に影響を及ぼした理由および契機の分析	共	2021 年 3 月	日本教育工学会論文誌 45(Suppl.)	4	授業において、「人に教えるために書く活動」という教授方略を実施した。この教授方略に取り組む生徒が、文章を書くための方略を変えた理由や契機を計量テキスト分析によって明らかにした。 その前提として、初期と 19 ヶ月後における書くための方略の出現単語の傾向から分析した。その結果、初期と 19 ヶ月の時点に差が見られた。そのため書くための方略を変えた理由や契機の自由記述を KJ 法で分類し、4 つのカテゴリが生成された。 著者：野口聡、田中雄也
	2.学習した内容を教える活動に取り組む生徒の意識が知識習得に与える影響	共	2020 年 3 月	日本教育工学会論文誌 44(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動において、その活動に取り組む生徒の意識が知識習得に及ぼす影響を分析した。この際、教えることを意識的に取り組む生徒は、意味理解志向が高く、知識テストでも高い得点を得る擬似相関の可能性がある。そこで意味理解志向学習観を統制変数として、教える活動に取り組む意識と知識テストの 3 観点との偏相関係数を算出した。分析の結果、振り返り・まとめ、書き方の工夫、調べ直しの意識が高いほど、知識テストの得点が高いことが明らかになった。 著者：野口聡、田中雄也
	3.The Impact on Knowledge Acquisition of Detailed Over-explanation on Science in Junior High School	共	2019 年 9 月	Educational Technology Research 42(1)	12	The following results were revealed: (1) Letting students imagine their teaching targets were Groups 1), 2), and 3) led them to use simple expressions. (2) Having students imagine their teaching targets were Group 1) led them to use explanations that provided supplemental information. (3) The students that imagined Group 1) as their teaching targets were more likely to acquire knowledge accurately compared to the other groups. 著者：Satoshi NOGUCHI, Masayuki MURAKAMI
	4.保育におけるプログラミング的思考の基礎を育てるた	単	2019 年 6 月	子ども学研究所，Child Research Net	抽出不可	小学校から高等学校までのプログラミング教育を概観し、そこから保育における実践を提案した。

	めの保育実践					
	5.グループ学習が日本語文法の習熟度に与える影響	共	2019年4月	日本教育工学会論文誌43(Suppl.)	4（抽出不可）	国語の文法分野でグループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、実践前後の習熟度のテスト、理解への自己評価、グループ学習をどう捉えているかのアンケート調査を実施した。その結果、グループ学習の条件を整えれば、事前事後の得点差の平均値が、グループ学習群は一斉授業群よりも大きくなり習熟度の高まる傾向がみられると共に、グループ学習に対する満足度も高かった。 著者：冨田幸子、野口聡
	6.災害対応等における学校への携帯電話持ち込み可否についての生徒および学生の意識	共	2019年3月	芦屋大学論叢72	10（抽出不可）	小学生、中学生や高校生が災害時や事件時、日常生活において、携帯電話を学校に持ち込む可否に関する生徒および学生の意識を明らかにした。 著者：竹内和雄、安東茂樹、野口聡
	7.平易な表現・情報の補足を用いた説明が中学理科の知識の習得に与える効果	共	2018年12月	日本教育工学会論文誌42(2)	11	教授対象を想定することで、解答の書き方に平易な表現・情報を補足する説明が使われるようになるのか、また正確に知識を習得するのか、調査した。 著者：野口聡、村上正行
	8.プログラミング的思考の基礎をつくる保育方法の評価ルーブリックの開発	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集JSET18(2)	6	幼児教育におけるプログラミング的思考を同定したうえで、プログラミング的思考を評価するための評価基準を開発した。 著者：野口聡、堀田博史
	9.グループ学習が文法の理解に与える影響 ： 学習内容の習得度と理解度の相関	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集JSET18(2)	6（抽出不可）	グループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、習熟度の相違、理解の自己評価の調査した。 著者：冨田幸子、野口聡
	10.中学理科における人に教える活動に取り組む生徒の意識が学習に対する自己評価に与える影響	共	2018年4月	日本教育工学会論文誌42(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動に取り組む生徒の意識が、学習に対する自己評価に与える影響を明らかにした。そのために、活動に取り組む生徒の意識の構成要因が、理科学習の4観点（興味・関心、知識理解、科学的思考、観察実験）の自己評価に与える影響を分析した。その結果、生徒の意識の構成要因として、「①振り返り・まとめ方」、「②自然現象との関連」、「③書き方の工夫」、「④調べ直し」の因子が抽出された。 著者：野口聡、田中雄也

	11.プログラミング的思考の基礎をつくる保育方法の分析	共	2018 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 JSET 18(1)	8	幼児教育においてプログラミング的思考を育むため保育方法を1年間定期的に実践した。その保育実践による幼児のプログラミング的思考の伸長を評価した。 著者：野口聡、堀田博史
	12.中学校の理科における対話による理解を阻害する要素についての検討	単	2017 年 3 月	国際言語文化学会 国際言語文化 3	10	中学校理科の授業において、人に教えるために書く活動を実施する際、学習活動を妨げる要因を調査、分析した。
	13.中学校の理科教育における対話による理解を妨げる要因についての分析	共	2016年3月	日本教育工学会研究報告集 JSET 16(1)	6	中学校理科の授業において、対話による学習活動に取り組むときに、学習活動を妨げる要因を調査した。 著者：野口聡、田中雄也
	14.中学校の理科教育における授業者の発問を取り入れたミニ説明方式による科学概念理解の効果	単	2015年4月	日本教育工学会論文誌 39(Suppl.)	4	中学校理科において、通常授業および対話を取り入れた教授方略を実践した。これらの指導方法の相違が、知識習得に与える影響を分析した。
	15.大学実習科目でのブレンド型 e ラーニングにおける学生の学習動機づけの分析	共	2014年12月	情報コミュニケーション学会誌 9(2)	9	ブレンド型eラーニングを利用した初年次のコンピュータ操作技能を習得させる実習科目において、意欲的に演習や課題を取り組んだ学生が、どのような要因で学習意欲を持続したのかについて明らかにした。そのために主体的に学習した学生群とそうではない学生群に分けて（以下、主体群と非主体群）、その相違点をARCSモデルに沿ったアンケートおよび具体的な理由を自由記述調査により分析した。 著者：野口聡、堀田博史、清水五男、垣東弘一、小田桐良一、久保田賢一
	16.学校教育における子どもの安全：ICT 活用の可能性	共	2012年3月	セミナー年報 2011 関西大学経済・政治研究所	4 （10）	学校教育における子どもの安全について、ICT活用の視点から検討した。具体的には、中学校おける防災ゲーム「クロスロード」を応用し、「いじめ」に関するディスカッションの方法について考察した。 著者：久保田賢一、時任準平、野口聡
	17.Analysis of Limited Information Technology Education Implementation in Japanese Schools	単	2011 年 6 月	The Korean Journal of the Learning Sciences 5(1)	11	日本の学校において、授業においてICTを活用する教師が直面している問題を明らかにするために、大阪府の小中学校の教員を対象としたアンケートを分析した。分析の結果、21の問題が抽出された。

						著者：Satoshi Noguchi、Kenichi Kubota
情報数理学Ⅰ	（学術論文） 1.「人に教えるために書く文章」の書き方に影響を及ぼした理由および契機の分析	共	2021 年 3 月	日本教育工学会論文誌 45(Suppl.)	4	授業において、「人に教えるために書く活動」という教授方略を実施した。この教授方略に取り組む生徒が、文章を書くための方略を変えた理由や契機を計量テキスト分析によって明らかにした。 その前提として、初期と 19 ヶ月後における書くための方略の出現単語の傾向から分析した。その結果、初期と 19 ヶ月の時点に差が見られた。そのため書くための方略を変えた理由や契機の自由記述を KJ 法で分類し、4 つのカテゴリが生成された。 著者：野口聡、田中雄也
	2.学習した内容を教える活動に取り組む生徒の意識が知識習得に与える影響	共	2020 年 3 月	日本教育工学会論文誌 44(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動において、その活動に取り組む生徒の意識が知識習得に及ぼす影響を分析した。この際、教えることを意識的に取り組む生徒は、意味理解志向が高く、知識テストでも高い得点を得る擬似相関の可能性がある。そこで意味理解志向学習観を統制変数として、教える活動に取り組む意識と知識テストの 3 観点との偏相関係数を算出した。分析の結果、振り返り・まとめ、書き方の工夫、調べ直しの意識が高いほど、知識テストの得点が高いことが明らかになった。 著者：野口聡、田中雄也
	3.The Impact on Knowledge Acquisition of Detailed Over-explanation on Science in Junior High School	共	2019 年 9 月	Educational Technology Research 42(1)	12	The following results were revealed: (1) Letting students imagine their teaching targets were Groups 1), 2), and 3) led them to use simple expressions. (2) Having students imagine their teaching targets were Group 1) led them to use explanations that provided supplemental information. (3) The students that imagined Group 1) as their teaching targets were more likely to acquire knowledge accurately compared to the other groups. 著者：Satoshi NOGUCHI, Masayuki MURAKAMI
	4.グループ学習が日本語文法の習熟度に与える影響	共	2019 年 4 月	日本教育工学会論文誌 43(Suppl.)	4（抽出不可）	国語の文法分野でグループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、実践前後の習熟度のテスト、理解への自己評価、グループ学習をどう捉えているかのアンケー

						ト調査を実施した。その結果、グループ学習の条件を整えれば、事前事後の得点差の平均値が、グループ学習群は一斉授業群よりも大きくなり習熟度の高まる傾向がみられると共に、グループ学習に対する満足度も高かった。 著者：冨田幸子、野口聡
	5.災害対応等における学校への携帯電話持ち込み可否についての生徒および学生の意識	共	2019 年 3 月	芦屋大学論叢 72	10（抽出不可）	小学生、中学生や高校生が災害時や事件時、日常生活において、携帯電話を学校に持ち込む可否に関する生徒および学生の意識を明らかにした。 著者：竹内和雄、安東茂樹、野口聡
	6.平易な表現・情報の補足を用いた説明が中学理科の知識の習得に与える効果	共	2018 年 12 月	日本教育工学会論文誌 42(2)	11	教授対象を想定することで、解答の書き方に平易な表現・情報を補足する説明が使われるようになるのか、また正確に知識を習得するのか、調査した。 著者：野口聡、村上正行
	7.グループ学習が文法の理解に与える影響 ： 学習内容の習得度と理解度の相関	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集 JSET18(2)	6（抽出不可）	グループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、習熟度の相違、理解の自己評価の調査した。 著者：冨田幸子、野口聡
	8.中学理科における人に教える活動に取り組む生徒の意識が学習に対する自己評価に与える影響	共	2018 年 4 月	日本教育工学会論文誌 42(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動に取り組む生徒の意識が、学習に対する自己評価に与える影響を明らかにした。そのために、活動に取り組む生徒の意識の構成要因が、理科学習の4観点（興味・関心、知識理解、科学的思考、観察実験）の自己評価に与える影響を分析した。その結果、生徒の意識の構成要因として、「①振り返り・まとめ方」、「②自然現象との関連」、「③書き方の工夫」、「④調べ直し」の因子が抽出された。 著者：野口聡、田中雄也
	9.英語の語学研修国における使用言語の相違による学習意欲への影響についての研究	共	2016 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 JSET 16(5)	8	英語母国語圏および英語第二言語国圏への語学研修に参加した学生の学習意欲に与える影響を分析した。 著者：野口聡、相川真佐夫、坂本季詩雄、野澤元、村上正行
	10.中学校の理科教育における授業者の発問を取り入れたミニ説明方式による科学概念理解の効果	単	2015 年 4 月	日本教育工学会論文誌 39(Suppl.)	4	中学校理科において、通常授業および対話を取り入れた教授方略を実践した。これらの指導方法の相違が、知識習得に与える影響を分析した。

情報数理学Ⅱ	（学術論文） 1.「人に教えるために書く文章」の書き方に影響を及ぼした理由および契機の分析	共	2021 年 3 月	日本教育工学会論文誌 45(Suppl.)	4	授業において、「人に教えるために書く活動」という教授方略を実施した。この教授方略に取り組む生徒が、文章を書くための方略を変えた理由や契機を計量テキスト分析によって明らかにした。 その前提として、初期と 19 ヶ月後における書くための方略の出現単語の傾向から分析した。その結果、初期と 19 ヶ月の時点に差が見られた。そのため書くための方略を変えた理由や契機の自由記述を KJ 法で分類し、4 つのカテゴリが生成された。 著者：野口聡、田中雄也
	2.学習した内容を教える活動に取り組む生徒の意識が知識習得に与える影響	共	2020 年 3 月	日本教育工学会論文誌 44(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動において、その活動に取り組む生徒の意識が知識習得に及ぼす影響を分析した。この際、教えることを意識的に取り組む生徒は、意味理解志向が高く、知識テストでも高い得点を得る擬似相関の可能性がある。そこで意味理解志向学習観を統制変数として、教える活動に取り組む意識と知識テストの 3 観点との偏相関係数を算出した。分析の結果、振り返り・まとめ、書き方の工夫、調べ直しの意識が高いほど、知識テストの得点が高いことが明らかになった。 著者：野口聡、田中雄也
	3.The Impact on Knowledge Acquisition of Detailed Over-explanation on Science in Junior High School	共	2019 年 9 月	Educational Technology Research 42(1)	12	The following results were revealed: (1) Letting students imagine their teaching targets were Groups 1), 2), and 3) led them to use simple expressions. (2) Having students imagine their teaching targets were Group 1) led them to use explanations that provided supplemental information. (3) The students that imagined Group 1) as their teaching targets were more likely to acquire knowledge accurately compared to the other groups. 著者：Satoshi NOGUCHI, Masayuki MURAKAMI
	4.グループ学習が日本語文法の習熟度に与える影響	共	2019 年 4 月	日本教育工学会論文誌 43(Suppl.)	4（抽出不可）	国語の文法分野でグループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、実践前後の習熟度のテスト、理解への自己評価、グループ学習をどう捉えているかのアンケート調査を実施した。その結果、グループ学習の条件を整えれば、事前事後の得点差の平均値が、グループ学習群は一斉授業群よりも大きくなり習熟度の高まる傾向がみられると共に、グ

						ループ学習に対する満足度も高かった。 著者：冨田幸子、野口聡
	5.災害対応等における学校への携帯電話持ち込み可否についての生徒および学生の意識	共	2019 年 3 月	芦屋大学論叢 72	10（抽出不可）	小学生、中学生や高校生が災害時や事件時、日常生活において、携帯電話を学校に持ち込む可否に関する生徒および学生の意識を明らかにした。 著者：竹内和雄、安東茂樹、野口聡
	6.平易な表現・情報の補足を用いた説明が中学理科の知識の習得に与える効果	共	2018 年 12 月	日本教育工学会論文誌 42(2)	11	教授対象を想定することで、解答の書き方に平易な表現・情報を補足する説明が使われるようになるのか、また正確に知識を習得するのか、調査した。 著者：野口聡、村上正行
	7.グループ学習が文法の理解に与える影響 ： 学習内容の習得度と理解度の相関	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集 JSET18(2)	6（抽出不可）	グループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、習熟度の相違、理解の自己評価の調査した。 著者：冨田幸子、野口聡
	8.中学理科における人に教える活動に取り組む生徒の意識が学習に対する自己評価に与える影響	共	2018 年4月	日本教育工学会論文誌 42(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動に取り組む生徒の意識が、学習に対する自己評価に与える影響を明らかにした。そのために、活動に取り組む生徒の意識の構成要因が、理科学習の4観点（興味・関心、知識理解、科学的思考、観察実験）の自己評価に与える影響を分析した。その結果、生徒の意識の構成要因として、「①振り返り・まとめ方」、「②自然現象との関連」、「③書き方の工夫」、「④調べ直し」の因子が抽出された。 著者：野口聡、田中雄也
	9.英語の語学研修国における使用言語の相違による学習意欲への影響についての研究	共	2016 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 JSET 16(5)	8	英語母国語圏および英語第二言語国圏への語学研修に参加した学生の学習意欲に与える影響を分析した。 著者：野口聡、相川真佐夫、坂本季詩雄、野澤元、村上正行
	10.中学校の理科教育における授業者の発問を取り入れたミニ説明方式による科学概念理解の効果	単	2015 年 4 月	日本教育工学会論文誌 39(Suppl.)	4	中学校理科において、通常授業および対話を取り入れた教授方略を実践した。これらの指導方法の相違が、知識習得に与える影響を分析した。
データサイエンス	（学術論文） 1.「人に教えるために書く文章」の書き方に影響を及ぼした理由および契機の分析	共	2021 年 3 月	日本教育工学会論文誌 45(Suppl.)	4	授業において、「人に教えるために書く活動」という教授方略を実施した。この教授方略に取り組む生徒が、文章を書くための方略を変えた理由や契機を計量テキスト分析によって明らか

（単独）						にした。 その前提として、初期と19ヶ月後における書くための方略の出現単語の傾向から分析した。その結果、初期と19ヶ月の時点に差が見られた。そのため書くための方略を変えた理由や契機の自由記述をKJ 法で分類し、4つのカテゴリが生成された。 著者：野口聡、田中雄也
	2.学習した内容を教える活動に取り組む生徒の意識が知識習得に与える影響	共	2020年3月	日本教育工学会論文誌44(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動において、その活動に取り組む生徒の意識が知識習得に及ぼす影響を分析した。この際、教えることを意識的に取り組む生徒は、意味理解志向が高く、知識テストでも高い得点を得る擬似相関の可能性がある。そこで意味理解志向学習観を統制変数として、教える活動に取り組む意識と知識テストの 3 観点との偏相関係数を算出した。分析の結果、振り返り・まとめ、書き方の工夫、調べ直しの意識が高いほど、知識テストの得点が高いことが明らかになった。 著者：野口聡、田中雄也
	3.The Impact on Knowledge Acquisition of Detailed Over-explanation on Science in Junior High School	共	2019年9月	Educational Technology Research 42(1)	12	The following results were revealed: (1) Letting students imagine their teaching targets were Groups 1), 2), and 3) led them to use simple expressions. (2) Having students imagine their teaching targets were Group 1) led them to use explanations that provided supplemental information. (3) The students that imagined Group 1) as their teaching targets were more likely to acquire knowledge accurately compared to the other groups. 著者：Satoshi NOGUCHI, Masayuki MURAKAMI
	4.保育におけるプログラミング的思考の基礎を育てるための保育実践	単	2019年6月	子ども学研究所, Child Research Net	抽出不可	小学校から高等学校までのプログラミング教育を概観し、そこから保育における実践を提案した。
	5.グループ学習が日本語文法の習熟度に与える影響	共	2019年4月	日本教育工学会論文誌43(Suppl.)	4（抽出不可）	国語の文法分野でグループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、実践前後の習熟度のテスト、理解への自己評価、グループ学習をどう捉えているかのアンケート調査を実施した。その結果、グループ学習の条件を整えれば、事前事後の得点差の平均値が、グループ学習群は一斉授業群よりも大きくなり習熟度の高まる傾向がみられると共に、グループ学習に対する満足度も高かっ

						た。 著者：冨田幸子、野口聡
	6.災害対応等における学校への携帯電話持ち込み可否についての生徒および学生の意識	共	2019年3月	芦屋大学論叢72	10（抽出不可）	小学生、中学生や高校生が災害時や事件時、日常生活において、携帯電話を学校に持ち込む可否に関する生徒および学生の意識を明らかにした。 著者：竹内和雄、安東茂樹、野口聡
	7.平易な表現・情報の補足を用いた説明が中学理科の知識の習得に与える効果	共	2018年12月	日本教育工学会論文誌42(2)	11	教授対象を想定することで、解答の書き方に平易な表現・情報を補足する説明が使われるようになるのか、また正確に知識を習得するのか、調査した。 著者：野口聡、村上正行
	8.プログラミング的思考の基礎をつくる保育方法の評価ルーブリックの開発	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集 JSET18(2)	6	幼児教育におけるプログラミング的思考を同定したうえで、プログラミング的思考を評価するための評価基準を開発した。 著者：野口聡、堀田博史
	9.グループ学習が文法の理解に与える影響 ： 学習内容の習得度と理解度の相関	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集 JSET18(2)	6（抽出不可）	グループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、習熟度の相違、理解の自己評価の調査した。 著者：冨田幸子、野口聡
	10.中学理科における人に教える活動に取り組む生徒の意識が学習に対する自己評価に与える影響	共	2018年4月	日本教育工学会論文誌42(Suppl.)	4	人に教えるために書く活動に取り組む生徒の意識が、学習に対する自己評価に与える影響を明らかにした。そのために、活動に取り組む生徒の意識の構成要因が、理科学習の4観点（興味・関心、知識理解、科学的思考、観察実験）の自己評価に与える影響を分析した。その結果、生徒の意識の構成要因として、「①振り返り・まとめ方」、「②自然現象との関連」、「③書き方の工夫」、「④調べ直し」の因子が抽出された。 著者：野口聡、田中雄也
	11.プログラミング的思考の基礎をつくる保育方法の分析	共	2018年3月	日本教育工学会研究報告集 JSET 18(1)	8	幼児教育においてプログラミング的思考を育むため保育方法を1年間定期的に実践した。その保育実践による幼児のプログラミング的思考の伸長を評価した。 著者：野口聡、堀田博史
	12.中学校の理科における対話による理解を阻害する要素についての検討	単	2017年3月	国際言語文化学会 国際言語文化 3	10	中学校理科の授業において、人に教えるために書く活動を実施する際、学習活動を妨げる要因を調査、分析した。

	13.英語の語学研修国における使用言語の相違による学習意欲への影響についての研究	共	2016年12月	日本教育工学会研究報告集 JSET 16(5)	6	英語母国語圏および英語第二言語国圏への語学研修に参加した学生の学習意欲に与える影響を分析した。 著者：野口聡、相川真佐夫、坂本季詩雄、野澤元、村上正行
	14.中学校の理科教育における対話による理解を妨げる要因についての分析	共	2016年3月	日本教育工学会研究報告集 JSET 16(1)	6	中学校理科の授業において、対話による学習活動に取り組むときに、学習活動を妨げる要因を調査した。 著者：野口聡、田中雄也
	15.中学校の理科教育における授業者の発問を取り入れたミニ説明方式による科学概念理解の効果	単	2015年4月	日本教育工学会論文誌 39(Suppl.)	4	中学校理科において、通常授業および対話を取り入れた教授方略を実践した。これらの指導方法の相違が、知識習得に与える影響を分析した。
	16.大学実習科目でのブレンド型 e ラーニングにおける学生の学習動機づけの分析	共	2014年12月	情報コミュニケーション学会誌 9(2)	9	ブレンド型eラーニングを利用した初年次のコンピュータ操作技能を習得させる実習科目において、意欲的に演習や課題を取り組んだ学生が、どのような要因で学習意欲を持続したのかについて明らかにした。そのために主体的に学習した学生群とそうではない学生群に分けて（以下、主体群と非主体群）、その相違点をARCSモデルに沿ったアンケートおよび具体的な理由を自由記述調査により分析した。 著者：野口聡、堀田博史、清水五男、垣東弘一、小田桐良一、久保田賢一
	17.学校教育における子どもの安全：ICT 活用の可能性	共	2012年3月	セミナー年報 2011 関西大学経済・政治研究所	4 (10)	学校教育における子どもの安全について、ICT活用の視点から検討した．具体的には，中学校おける防災ゲーム「クロスロード」を応用し、「いじめ」に関するディスカッションの方法について考察した。 著者：久保田賢一、時任準平、野口聡
	18.Analysis of Limited Information Technology Education Implementation in Japanese Schools	単	2011 年 6 月	The Korean Journal of the Learning Sciences 5 (1)	11	日本の学校において、授業においてICTを活用する教師が直面している問題を明らかにするために、大阪府の小中学校の教員を対象としたアンケートを分析した。分析の結果、21の問題が抽出された。 著者：Satoshi Noguchi、Kenichi Kubota

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

研究業績等に関する事項（5 年以内）				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1.「人に教えるために書く文章」の書き方に影響を及ぼした理由および契機の分析	共	2021 年 3 月	日本教育工学会論文誌 45(Suppl.)	授業において、「人に教えるために書く活動」という教授方略を実施した。この教授方略に取り組む生徒が、文章を書くための方略を変えた理由や契機を計量テキスト分析によって明らかにした。 その前提として、初期と 19 ヶ月後における書くための方略の出現単語の傾向から分析した。その結果、初期と 19 ヶ月の時点に差が見られた。そのため書くための方略を変えた理由や契機の自由記述を KJ 法で分類し、4 つのカテゴリが生成された。 著者：野口聡、田中雄也
2.学習した内容を教える活動に取り組む生徒の意識が知識習得に与える影響	共	2020 年 3 月	日本教育工学会論文誌 44(Suppl.)	人に教えるために書く活動において、その活動に取り組む生徒の意識が知識習得に及ぼす影響を分析した。この際、教えることを意識的に取り組む生徒は、意味理解志向が高く、知識テストでも高い得点を得る擬似相関の可能性がある。そこで意味理解志向学習観を統制変数として、教える活動に取り組む意識と知識テストの 3 観点との偏相関係数を算出した。分析の結果、振り返り・まとめ、書き方の工夫、調べ直しの意識が高いほど、知識テストの得点が高いことが明らかになった。 著者：野口聡、田中雄也
3.The Impact on Knowledge Acquisition of Detailed Over-explanation on Science in Junior High School	共	2019 年 9 月	Educational Technology Research 42(1)	The following results were revealed: (1) Letting students imagine their teaching targets were Groups 1), 2), and 3) led them to use simple expressions. (2) Having students imagine their teaching targets were Group 1) led them to use explanations that provided supplemental information. (3) The students that imagined Group 1) as their teaching targets were more likely to

				acquire knowledge accurately compared to the other groups. 著者：Satoshi NOGUCHI, Masayuki MURAKAMI
4.保育におけるプログラミング的思考の基礎を育てるための保育実践	単	2019 年 6 月	子ども学研究所, Child Research Net	小学校から高等学校までのプログラミング教育を概観し、そこから保育における実践を提案した。
5.グループ学習が日本語文法の習熟度に与える影響	共	2019 年 4 月	日本教育工学会論文誌 43(Suppl.)	国語の文法分野でグループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、実践前後の習熟度のテスト、理解への自己評価、グループ学習をどう捉えているかのアンケート調査を実施した。その結果、グループ学習の条件を整えれば、事前事後の得点差の平均値が、グループ学習群は一斉授業群よりも大きくなり習熟度の高まる傾向がみられると共に、グループ学習に対する満足度も高かった。 著者：冨田幸子、野口聡
6.災害対応等における学校への携帯電話持ち込み可否についての生徒および学生の意識	共	2019 年 3 月	芦屋大学論叢 72	小学生、中学生や高校生が災害時や事件時、日常生活において、携帯電話を学校に持ち込む可否に関する生徒および学生の意識を明らかにした。 著者：竹内和雄、安東茂樹、野口聡
7.平易な表現・情報の補足を用いた説明が中学理科の知識の習得に与える効果	共	2018 年 12 月	日本教育工学会論文誌 42(2)	教授対象を想定することで、解答の書き方に平易な表現・情報を補足する説明が使われるようになるのか、また正確に知識を習得するのか，調査した。 著者：野口聡、村上正行
8.プログラミング的思考の基礎をつくる保育方法の評価ルーブリックの開発	共	2018 年 5 月	日本教育工学会研究報告集 JSET18(2)	幼児教育におけるプログラミング的思考を同定したうえで，プログラミング的思考を評価するための評価基準を開発した。 著者：野口聡、堀田博史
9.グループ学習が文法の理解に与える影響 ： 学習内容の習得度と理解度の相関	共	2018年5月	日本教育工学会研究報告集 JSET18(2)	グループ学習に取り組む学級と、教員による一斉授業を行う学級を設け、習熟度の相違、理解の自己評価の調査した。 著者：冨田幸子、野口聡
10.中学理科における人に教える活動に取り組む生徒	共	2018 年 4 月	日本教育工学会論文誌 42(Suppl.)	人に教えるために書く活動に取り組む生徒の意識が、学習に対

の意識が学習に対する自己評価に与える影響				する自己評価に与える影響を明らかにした。そのために、活動に取り組む生徒の意識の構成要因が、理科学習の4観点（興味・関心、知識理解、科学的思考、観察実験）の自己評価に与える影響を分析した。その結果、生徒の意識の構成要因として、「①振り返り・まとめ方」、「②自然現象との関連」、「③書き方の工夫」、「④調べ直し」の因子が抽出された。 著者：野口聡、田中雄也
11.プログラミング的思考の基礎をつくる保育方法の分析	共	2018 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 JSET 18(1)	幼児教育においてプログラミング的思考を育むため保育方法を1年間定期的に実践した。その保育実践による幼児のプログラミング的思考の伸長を評価した。 著者：野口聡、堀田博史
12.中学校の理科における対話による理解を阻害する要素についての検討	単	2017 年 3 月	国際言語文化学会 国際言語文化 3	中学校理科の授業において、人に教えるために書く活動を実施する際、学習活動を妨げる要因を調査、分析した。
13.英語の語学研修国における使用言語の相違による学習意欲への影響についての研究	共	2016年12月	日本教育工学会研究報告集 JSET 16(5)	英語母国語圏および英語第二言語国圏への語学研修に参加した学生の学習意欲に与える影響を分析した。 著者：野口聡、相川真佐夫、坂本季詩雄、野澤元、村上正行
14.中学校の理科教育における対話による理解を妨げる要因についての分析	共	2016年3月	日本教育工学会研究報告集 JSET 16(1)	中学校理科の授業において、対話による学習活動に取り組むときに、学習活動を妨げる要因を調査した。 著者：野口聡、田中雄也
【その他（講演や発表）】 1.「人に教える活動」に取り組む学習観と学力との関係	共	2019年8月	第69回日本理科教育学会	「人に教える活動」に取り組む学習者の学習観と学力の関係を分析した。 著者：田中雄也、野口聡
2.説明する学習活動が生徒の知識習得に与える影響	共	2018年12月	日本理科教育学会近畿支部	教授方略「人に教える活動」が、生徒の知識習得に与える影響を分析した。 著者：田中雄也、野口聡
3.中学校理科における授業のまとめ方の分類	共	2018年7月	第68回日本理科教育学会	中学校理科授業において、終末の時間にどのような教授活動が取り組まれているのかを分析した。

				著者：田中雄也、野口聡

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　山 片 崇 嗣

担当授業科目に関する研究業績等（10 年以内）

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数（総ページ数）	概　　要 （共著の場合は全員の著者名を記載） （共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述）

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） グローバル人材育成を視野に入れた授業の研究 －「主体的・対話的で深い学び」を主眼に置いた海外研修の考察－	共	2020.8.22	日本教育情報学会 第 36 回年会論文集	グローバル人材に求められる資質を考察したうえで、これまで芦屋学園中学校・高等学校で実践した海外研修を通じて視察した海外の授業実践例を検証した。それらの考察をふまえ、改めて現状の日本の教育を見直し、「主体的・対話的で深い学び」の実践を急務とした新しい日本型のグローバル教育の開発が必要であると提言した。
（学術論文　発表） 中等教育におけるグローバル教育の実践に向けて　－海外の授業を踏まえて-	単	2021.5.22	令和３年度第１回日本産業科学学会　関西部会　学会発表	伝統的な日本の教育における成果と課題を検証し、家庭教育としての補修授業、受験指導や学歴主義、企業の終身雇用制度等の背景から今後の日本のグローバル教育に求められる方向性を模索したうえで、オーストラリアの授業実践に触れ、改めてアクティブ・ラーニングの重要性を説き、日本の教育の課題と展望を提言した。
（学術論文　発表） 中等教育における国際教育の実践 － 海外研修プログラムの課題と提言 －	単	2021.8.28	第 27 回日本産業科学学会　全国大会　学会発表	文部科学省が目指すグローバル人材育成の一環として多くの中等教育現場で海外生徒派遣プログラムが実践されていながらその多くが「語学研修」や「ホームステイ」に特化しており、グローバル人材の育成という目標に直結するものではないことを指摘した。今後の海外研修プログラムの在り方や担う役割について考察し、提言した。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

(学術論文) グローバル教育の実践に向けてーイギリス中等教育の教育事情の考察ー	共	2021.8.29	日本教育情報学会 第 37 回年会論文集	勤務校の姉妹校であるイギリス提携校に生徒を派遣・引率した際の現地校視察を通じて、授業展開の意図と学校が掲げる教育目標に関して現場教員と管理職教員にヒヤリングし、実態を体系化した。また、日本の教育現場で実践されている教育目標や教育実践を比較してイギリスと日本の教育実践の相違点を明らかにした。特に教育現場における教員現場の組織形態や実践目標の指示系統などの差異を整理し、日本の教育の課題を浮き彫りにした。
(学術論文　発表) 「グローバル教育の確立に向けて:オセアニアの教育事情」	単	2021.12.11	日本産業科学学会第 2 回　関西部会	勤務校の姉妹校であるオーストラリアの提携校に生徒を派遣・引率した際の現地校視察を通じて、日本の教育現場で実践されている教育目標や教育実践を比較してオーストラリアと日本の教育実践の相違点を明らかにした。
(教育実践記録) グローバル人材育成を視野に入れた高大接続教育の研究（１）ー芦屋学園中学校・高等学における海外派遣プログラムの検証ー	共	2019.7.26	芦屋大学論叢 71 号	主体的・対話的で深い学びを教育現場で具現化し、グローバル人材の育成を実践可能なものにするための研究として、グローバル人材に求められる資質を考察した。芦屋学園高等学校・中学校が、これまで実践してきた海外研修を振り返り、明らかになった課題を提起した。
(研究ノート) グローバル人材育成を視野に入れた高大接続教育の研究（２）ー 国際教育における「アクティブ・ラーニング」モデルの考察	共	2020.3.10	芦屋大学論叢 72 号	理想的な国際教育の方向性を高大接続教育の観点から提言した。文科省が推奨する「学力の３要素」を育むための教育財を国際教育の視点からも考察し、「アクティブ・ラーニング」のメソッドも念頭に置き、今後の教育システムを模索した。